CRAZYYYY STUUUUNT!!!!

蛇豆

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＣＲＡＺＹＹＹ　ＳＴＵＵＵＮＴ！！！

【Ｎコード】
Ｎ８９２９Ｒ

【作者名】
蛇豆

【あらすじ】
涙が出るほど虚弱な主人公がアメリカへ留学！すると即日ホテルを爆破され拉致られる！拉致られた先はヘンな宗教団体の教会！そしてそこで一年間強制軟禁！しかし、そんなとこも住めば都。朝は覚醒剤吸ったロリータ教祖とラジオ体操、アフロのアル中神父と共に朝食ならぬ朝酌を済ませ、昼はヲタの殺人鬼教徒とスキンシップ、夜は変態エロ姉ちゃんのヒロインと……！？　こんな生活してみたい？！一日で腹一杯だぜ！！
キチガイだらけの超ド級滅茶苦茶コメディーここに有り！！あぁ

もう、こんなん出版したら確実日本滅んじゃうよ。

※なお、この作品を読むには親のいない一人部屋、鼻血を拭くティッシュ、別の用途でのティッシュが必要です。

◆ホームページ立ち上げました！！◆

第1話　「死の贖罪はキ●ガイの味」（前書き）

テーマソングはマキシマムザホルモンの
「鬱くしき人々のうた」

第1話　「死の贖罪はキ●ガイの味」

「皆の者よ。」

美しいゴシック様式のステンドガラスが壁一面に張られたとある教会の中、両腕を大きく広げる大司教に、教会机に並んだ信者達が祈りを捧げる。

「我々は我らが神サルバージによって、強く守られているのだ。」

サルバージ教大司教、ケビン・チャビスが祭壇の上、胸に手を当てて静かに目を閉じた。それに合わせ、今日のミサに多く集った、白いローブを着た信者達も胸に手を当て目を閉じた。

「あぁ、我らが神サルバージよ。」ケビン神父は言った。「汚れし邪教徒共に聖なる鉄槌を」

すると信者達が神父の言葉を繰り返す。

「皆の者よ！」突然、ケビン神父は眼を開き、声を荒げた。「全ての悪に死の鉄槌を！！」

「「「全ての悪に死の鉄槌を！！」」」教会内に信者達の声がこだまする。

サルバージ教。近年、終末思想の若者を相手にして大きくなった新興宗教団体で、強力な私兵集団を持つ。昨日、隣町の異教教会を焼き払った。中にいた異教徒も残らず皆殺しにした。

神父に天井のステンドガラスからの眩しい日の光が差し込んできた。ステンドグラスには彼らの唯一の神サルバージが異教徒を模した悪魔を串刺しにしている様子が流麗に描かれている。

全ての悪に死の鉄槌を。

やがて、その言葉は神父と信者達との大合唱になった。

全ての悪に死の鉄槌を。

全ての悪に死の鉄槌を。

大聖堂に響きわたる、狂気と狂喜の声。

全ての悪に死の鉄槌を。

全ての悪に死の鉄槌を。
サルバージ様からの御加護の報いに世の異教徒を抹殺するのだ。
全ての悪に死の鉄槌を。
全ての悪に死の鉄槌を。
我らに刃向かう者は皆死ぬのだ。神父と共に拳を上げる信者達。

全ての悪に死の鉄槌を！

そして、信者達の声が一層大きくなった次の瞬間。
「Ｆｕｕｕｕｕｃｋ！！！！！！！」
突如女の叫び声が轟き、それと共にウージーの五月蠅い銃声が信者達の大合唱を掻き消した。
「何事だ！！」ケビン神父が叫ぶと、蜂の巣にされた大聖堂の入り口の大きな扉が外から蹴破られた。
そしてそれが真紅のカーペットの床に倒れると、そこから1人の黒髪の女が現れた。
その女は右が白、左が黒の生地の厚い袖なしのYシャツを着ているが、胸以外の全てのボタンを外して異常に肌けた様子を見せている。下に穿いている白いダボダボのスラックスも丹田が見える位置まで下げられている。
耳にはそれぞれサファイアのピアスが二つずつ。臍にも一つ付けられている。
少し童顔で攻撃的なその顔には泣き黒子が一つ、右目尻の下にあり、肩まで伸びた黒いショートヘアが揺れる。
すると、その女は小さな舌を出しながら司祭壇の神父に中指を立てた。「やぁ。あんた等の腟（はら）ん中洗いに来たよ」
その途端「黙れ部外者！！帰れぇぇ！！」今度は罵倒の大合唱だ。
「帰れ！！」
「ここは売女などが来る所ではない！！」
「さっさと立ち去れい！！」

次の瞬間突如女が持ったマイクロウージー９ｍｍが火を噴き始めた。

銃口から放たれた無数の弾が信者達を斬り裂いた。ある者は頭部から脳髄を噴き出し、ある者は腕を肩からもぎ取られ、またある者は心臓を撃ち砕かれて床に大量の血糊を吐き出して死ぬ。

「さぁて、皆で楽しい悦しい殺し合いをしようじゃないか」女は狂気を臭わせる笑みを浮かべた。

返り血がケビン神父の頬に降りかかった。我を忘れて信者が殺されていく様を見ていた彼は目覚めた。

「皆の者、何をしている!!その売女を殺せ!!」神父が叫ぶと、信者達は一斉に懐から銃を抜き、その引き金を引いた。弾丸の嵐が女を襲う。

女はそれを見ると、先程撃ち殺した信者を立て起こし、盾にした。途端、女の持つ死体から無数の凄まじい衝撃が伝わってきた。

一つ一つの銃弾が死体の肉体を削いでいく。ゼリー状の肉の破片が辺り一帯に飛び散る。

「ヤバいね」女は気なく呟いた。ウージーを死体の首もとから撃つも、弾切れを起こしてしまった。「仕方ない」

ダウト。出番だよ。

女が言ったその瞬間。

突如女の陰からレインコートのようなものを来た少年が、奇声を発しながら飛び上がった。

そのレインコートには女と同じ白と黒のコーティングがなされており、その手にはバットと包丁。フードで隠れた顔に光る眼光は明らかに猛禽のものだった。

「シャハハヒハハハハハハハァァ!!」狂った叫び声を上げながら女を飛び越え床に着地するとその少年、ダウトは笑みを浮かべながら銃を撃つ信者達に突っ走っていった。

信者がダウトに照準を変えた。

だが、その時すでに信者の一人が犠牲となっていた。

バットで側頭部を殴られ、力任せに包丁で左胸を抉られた信者は絶望と苦悶の表情で大量の血を撒き散らしながら数秒のたうち回ると、息絶えた。

しかし、その数秒の内にもダウトは2人程の信者の心臓を刈り取っていた。

奇声を上げながら。狂悦の引きつった笑みをこぼしながら。

彼、ダウトは殺人中毒者だ。幼い時両親を殺し、孤児院でクラスメイトを皆殺しにし、裏路地で通りすがった全ての者は無差別に殺し、刑務所でも看守を撲殺して脱獄し、スラムのストリートファイターも皆殺しにし、自分の首を狙うギャングも残らず虐殺した。彼の人生は本当の意味での薔薇色だ。

すると、「バ～カ、ケツ丸見えだよ」女はダウトに気を取られる信者達に弾を再装填したウージーを撃ち込み始めた。

「クソっ！！」ケビン神父は自分の信者が殺されていく様を見ると、歯ぎしりを立てて司教台を殴りつけた。

このままではまずい。

彼は焦っていた。あの売女とガイキチ男の狙いは私だ、もうすぐ私を殺しに囲みを突き破って来る、と。

だが、恐れてはいなかった。

我らがサルバージ教は幾多の戦いを乗り越えて今日のここまで来ているのだ。今までに十を越える宗教を潰し、キリスト教まで相手にした。そんな我々がたったキチガイ二人に滅ぼされてたまるか。

「うおおぉおおぉお！！」ケビン神父は怒りに震える指で司教台の中に光る赤いボタンを押した。

すると、祭壇の赤い床から何かが現れた。

７４式車載７．６２ｍ機関銃だ。巨大な機関銃がその堅牢な姿を露わにしたのだ。

「何やってんの、アイツ？！」それを見た女は一言。神父を撃とうと試みたが、目の前の信者の相手で精一杯だ。

神父が銃の二つあるグリップを握った。不遜な笑い声を上げて。

「死ねぇえぇぇえぇえぇえ！！！」

女が飛び退いた瞬間、目の前にいた信者の一人が頭を西瓜の如く飛び散らせた。祭壇で唸る機関銃の怒号は有象無象関係なく照準に合ってしまったもの全てを破砕していく。

ステンドガラスが音を立てて崩れ、入り口両隣に飾られていたサルバージ神の銅像が不細工に抉られていく。

群がった信者も下手くそなダンスを踊ってバタバタと死んでいき、残った者は皆散り散りになって逃げ惑う。

硝煙が立ち上り、機関銃の狙いをつける事が出来なくなってしまったが、それでも尚、神父は狂ったように撃ち続けた。反動を喰らう両手両腕の感覚が麻痺してきた。それでも尚、神父は引き金を引き続けた。

やがて弾が尽きた。さんざ教会を破壊した機関銃は引き金を引いてもシリンダーが回転するだけのものになってしまった。硝煙が靄となって消えていく。

急激に静まり返った教会。その床には死屍類類の屍地獄が展開されていた。

「ははははははは！！！」

床に転がった忌まわしき白黒スーツを着た2つの死体。

だが、自らが手にかけてしまった信者、粉砕したステンドガラス、見る影も無くなってしまった銅像…。

失った物が多すぎた…。

もう信者を手にかけた私を崇める崇拝者は現れるだろうか。いや、現れないだろう…。

ああ私はこれからどうやって生きていけばいいのだろう。

我が身の滅びはいつやって来るのだろうか…。

サルバージ…我がサルバージよ…。

脳味噌がナパームで焼き爛れたように憔悴したケビン神父は司教台に寄りかかって独り笑った。

もはや教会にはケビン神父以外の人間は誰もいない。

はずだった。
そして、神父自らが言った「我が身の滅び」の時も案外あっさり来てしまった。

「やぁ、御苦労様。」祭壇に奉られたサルバージ神の巨大な彫刻の影から殺した筈のあの女がウージーを持って現れた。
見ると女は上半身は何も着ていない。裸だ。
死体の方をよく見てみると、明らかに他人だ。硝煙の中で女は自分のスーツを信者の死体に着せたのだった。
しばらくすると、教会机の陰に隠れていたダウトも祭壇に上がって来た。女と同じく上半身は裸。
「チェックメイト。アンタ弱いねぇ」女が神父の顔を覗き込む。小さく舌なめずりをして、耳に優しく息を吹きかけた。「代わりにアンタんところのを着たかったんだけどね、面倒臭かった。アンタの機関銃で穴だらけだったしね」
女は司教台に神父を押し倒し、ウージーを額に押しつけ、神父と覆い被さって鼻先が触れ合う程に接近した。と同時に神父の胸に2つの乳房の生暖かい弾力が伝わった。
「本当はアンタと一発ヤってから殺したかったんだけどね。野次がいるし、帰ったらアフロが五月蠅いし」残念、と笑いながら女は引き金を引く人差し指に力を入れ始めた。「何か言い残したい事はある?」
「貴様…貴様の名は…?!」
「…アタシ?…アタシの名前はクロア…。もういいでしょ?死ね」

第2話　「キ●ガイの歌は地獄への入り口」（前書き）

第2話　「キ●ガイの歌は地獄への入り口」

僕の名前はブロンズ。今、ロサンゼルス国際空港のタクシー玄関にいる。

ドイツから遙々観光にやってきたのさ。

今から何処に行くのかって？ここから北に３０キロほど行ったところに、ロハネっていう町があるんだ。そこにはね、いろんな教会があっていろんな宗教があるんだってさ。

僕は宗教に興味があるんだよ。変だろ？でもね僕はいろんな宗教を学ぶことでいろんな思想を学べる、と思っているんだ。宗教を学んで世界をもっと知りたい。僕はその為にロハネに行くんだ。

そう言えばさっき飛行機のニュースでロハネでサルバージなんたらっていう宗教団体の教会が爆発したっていうのを聞いたんだけど大丈夫かなぁ。

あっ、新しいタクシーが来た。待ってるタクシーが全部予約済みで困ってたところだったんだ。おーい、カモン！！僕の前に停車してくれた。乗れた！よかった！

さて、運転手さんに行き先を言わなきゃ。英語はバッチリだぜ。

「ロハネへ行って下さい」

よし言えた。レッツゴー・ロハネ！！

…あれ？運転手さん浮かない顔だねどうしたの？

「…ロハネかい、何の用だ？」運転手さんは僕の方を向いて聞いてきた。

「色々な宗教を学びに行くのです。」

「そうかい。」運転手は素っ気なく答えると、「安くしとくから街の前で降りてもらうぞ。」

「あ…はい…分かりました…」何なのだろう。サルバージなんたらの爆破の影響で街には行けなくなってるのか？そうなってたら困るなぁ…

すると、タクシーは動き出した。ロサンゼルスの田舎育ちの僕には目も眩むような都会の中を走り出した。

運転手さんとのその後のやりとりで基本料金はタダ、距離延長金は5割引になった。やった。

しばらくすると突然、車窓からの風景が高層ビルが立ち並ぶ都会から古風な建築様式の建物がずらりと並んだ歴史感じる町並みへと変わった。

ロハネだ。ここでタクシーが道路の脇でストップした。

「行きすぎた…すまんが、ちゃっちゃと降りてくれ」運転手さんが眉間に皺を寄せた。

「あ…はい」僕は財布を取り出した。

えーと、15ドル25セント…?あっ、小銭で出せそうだぞ…!

1ドル硬貨が1枚…2枚……14枚…15枚!!あった!!

……あれ?25セント硬貨が…

「あぁ、遅い!お客さん、もう金いらないから降りてくれ!!」

突如、運転手さんが声を荒げて言った。

「…は?」

「早く!!」

僕は運転手さんに無理矢理身体を押し出されタクシーから放り出された。歩道に転がる僕。キャリーも乱暴に投げ渡された。直後、タクシーは猛スピードでUターンし、そのまま走り去ってしまった。

何だろう…タクシー禁止区域なのだろうか…?その割には周りには沢山タクシーが並んでるぞ…?

まぁ、いいや。タダ乗りさせてもらったし。

今、僕のロハネの旅が始まった。

晩秋の夕方はやっぱ少し寒いな…ジャンパーでも着ようか…。

やっぱいいや、冷えた風が気持ちいい。

僕はキャリーを引きずって歩きだした。
白を基調とした古風な風景はどこかヨーロッパを思わせるような趣があり、所々に目当てとする教会も見える。
どこからかジャズの美しい音色が聞こえる。通り過ぎようとしたバーからだ。僕はそのウィンドウを覗いた。黒のスーツをお洒落に着崩した3人の老人が楽しそうに体を揺らし、ピアノやらドラムやらをリズミカルに叩いている。曲はキャラバン…だろうか。その前では嬉しそうに酔った若い男女の2人組が座っていた。
いいなぁ…僕は店内から漏れ出す淡い光に包まれる。
出来る事ならいつまでもここでこうしていたかった。
だけど、先に宿を目指さなきゃ。ほら、日が落ちかけてる。
茜色に染まる町並み…何百年か前のロンドンの街がそのまま時を止めているような風景。
見渡すパノラマ３６０度全てが芸術。
まるで異世界だ。

さて、もう少しで予約していたホテルに着くぞ。あぁ、時差ボケで頭が痛くなってきた。早く行かないと。
街灯がポツポツと点き始めた。辺りもすっかり暗くなってきている。立ち並んだ家々にも明かりが灯される。風も一層冷たくなった。
僕はバックパックからアディダスのジャンパーを取り出し、着た。
正直心地良いけど体には堪える寒さだ。風邪を引いたらコトだ。
すると遙か前方で警察が何やら集っているのがぼんやりと見えた。
あれ、そこから黒い煙が出てるぞ。あっ、消防車も来てる。まさか

ーーー?!

僕は走り出した。まさか、ニュースで言ってたサルバージなんたらの教会か?

ドンピシャリ。僕の予想は当たっていた。息を切らしながら目を向けると、木っ端微塵になった教会の残骸がそこにあった。

ニュースで見たものと同じ光景だ。黒炭にまみれた白の煉瓦。砕け散ったサルバージ像。焼け焦げた死体もまだ何体か転がっている。

見回してみると、どうやら周りの建物も教会の爆発に巻き込まれたようだった。

右隣の喫茶店なんかは壁が抉り取られているし、左隣のホテルなんかはほぼ全壊状態だ。酷い有り様だ。

ん…?ホテル…?

そのホテルの外壁に辛うじて引っかかっている、爆発によって大きく傾き歪んだ看板に注目した。

なんてこった。

ホテル・ミスロハネ。

僕が今夜に予約しておいたホテルだ。そのホテルが僕の目の前で、文字通りのスクラップになってしまっている。

流石にこの状態で営業はしてないだろう。だって入り口が潰れちゃってるんだもん。

…どうするんだ。旅前に見たネットによればロハネ市内ではこのホテル・ミスロハネが唯一の宿泊施設らしい。まさかこんな形でフられるとは…

ツイてない……

ロサンゼルスに逆戻り…か…

僕は仕方なくホテルに背を向け、フラフラとトボトボと来た道を戻り始めた。

すると、背後から現れた1人の少女が歩く僕を呼び止めた。

「ねぇ、そこのお兄さん」ふと、明瞭で可愛らしい少女の声が背

後から聞こえた。
僕は振り返った。が、すぐには声の主が何処にいるか分からなかった。
彼女が小さすぎたのだ。
ふと足元を見たら彼女はいたのだ。彼女の背丈は僕の腰の高さより低いため、振り返るだけでは彼女の姿は捉えられなかった。
その少女は奇妙な服を着ていた。右半分を白、左半分を黒に染めたパーカーの様なものを着ていた。袖の方は上下に分かれ、右側は上が白、下が黒。左側はそれとは反対になっていた。下には白いスラックスを穿いており、首には十字架の様なものがぶら下がっていた。
「…君はキリシタンかい？」
すると少女はニコリと微笑んで、「そうです。キリスト教エンズ派です。」と背の高いこちらを見上げながら返した。被ったフードから覗いた彼女の目は今の夕日のような金に輝いていた。清潔そうなロングヘアーの髪も同じくそうだった。
「お兄さん、何か困った事があるでしょう？」今度は彼女が僕に質問してきた。
「ん…ああ…今晩の宿がオシャカになったんだよ…」僕はすっかり遠ざかってしまった、瓦礫同然となった廃墟を指さした。あぁ、教会を爆破した連中が忌々しく思えてきた。
「あっ…！」途端少女は目を丸くさせて、誰もが思いもしない事をサラリと言った。

「すみません。私達の所為です。」

は…？
え…？
僕は驚きを隠せなかった。
「…君があそこを爆破したの…？」

「ええ、そうです。」
「あの教会を?」
「はい、そうです。」
「……。」
「……。」
「お巡りさ〜〜ん!!!! ヘルプミー!!!!」
「無駄です。そこら中の警察はみんな私が賄賂で買ってます。」
そう言って無邪気な笑顔を見せる少女。(賄賂と言っている時点で邪気満々なのだが)
……。
ええええぇぇぇ!?

閑話休題。

「……そうですか。宿がなくなったんですね…。」少女は陰りを見せて俯いた
「…巻き添え喰らわせて本当にどうも済みませんでした…」すると少女は申し訳なさそうにペコリと頭を下げた。途端、妙に甘い香りが舞った。香水か…?あぁ、もうこの子なんか怖い…。
「あぁ、もういいよ」僕は笑顔でそう返すと少女に背を向けた。本当に日が暮れてきた。早く街を出て宿を取らなきゃ。そして何よりこの子怖い。「そう言ってホテルの人にもちゃんと謝っとこうね。じゃあね。僕はもう行くよ。新しい宿を探さないとね。」
僕は早足で逃げ…もとい歩き出した。えーと次どこにしようか。まぁ、取りあえずヘイ、タク…
「あっそうだ!!お詫びに私の家に泊まりませんか?」振り向くと、少女は嬉しそうに僕の腕をがっしり掴んでいた。
あ、もう駄目だ。僕は思った。
だが、反面嬉しかった。どんな形であっても旅先の情というのはこの上なく嬉しいものだ。
だけど、この子怪しいぞ、怪し過ぎるぞ。どうする…?!

あああああぁぁ～～～

僕は2秒葛藤した末、「え、ホントに!?ありがとう!!」少女についていく事にした。

昔から僕、情に弱いんです。

すっかり夜になって少女に連れられた先は何と教会だった。正真正銘ここが私の家です、と少女は言う。その教会はこの街の他のものより一回り小さかったが、建って間もないからだろうか外装に目立った汚れは一切無い。

「ただいま帰りましたぁ～。」少女はそう言って大理石の階段を昇って少し進み、大きい大聖堂への扉を叩いた。

すると、銀行の金庫の堅い扉のようにゆっくりとそれは開いた。中へと進む。左右に何十という教会机の列。足元には赤のカーペット。祭壇に奉られているのは十字架に磔にされたキリスト。上を見上げれば美しいステンドガラスが天井一杯に張られている。小さいのに関わらず立派な内装だ。

しかしブロンズがそう思った直後、彼の目に信じられないモノが飛び込んできた。

祭壇の上の司教台で一人の若い女とアフロの中年男性が酒を酌み交わしていた。

思いっ切り罰当たりだ!ブロンズは思った。何故なんだ?普通の教会では飲酒禁止なのにーー

「やぁ、お帰り教祖様。」酔って少し顔を赤らめた女が、少女に

向かって手を振った……？

…んん？！

えっ…まさかこの子教祖！？キリスト様が教祖じゃないの？っていうかまずこの歳で！？もう訳が分からない…

すると、僕は手を振る女と目が合ってしまった。しばらく見つめ合うと、

「ねぇ、教祖様。そこの色男（ロメオ）、誰？連れて来たの？」首を傾げて聞いた。

「はい、私が連れて来ました者です。今晩ここに泊めてあげる事にしました。名は……」

「…僕の名前はブロンズ。ドイツから来たんだ。」教祖…少女…？が詰まったので僕が代わりに言った。そういえば僕まだこの子に自己紹介してなかったな…。

ふうん…と女は相づちを打つと、手元に置かれた一杯のビールをゆっくりと飲み始めた。

「ＯＫ、ＯＫ。ブロンズね。あたしの名前はクロア。宜しく」クロアはそう言うと司教台の席から立ち、祭壇から降りてきた。

クロア…ＯＫ。分かった、クロアね。じゃあクロア、服はまともに着てくれよ。白と黒の袖無しＹシャツ…胸のところしかボタンとめてないよね。それと、スラックスはちゃんと穿こう。

目のやり場に困るから止めてくれ。

「何ジロジロ見てんのさ？」僕がいろいろ考えているとクロアは挑発的な目で聞いてきた。

「え、い、いや……」あぁ、ヤバい。完璧にどもってしまった。こういうのには免疫が無いんだよなぁ。「…べ…別にジロジロなんか見てないよ…」

「嘘。ヤベぇ、一発ヤりてぇ、とか思ってるでしょあんた」

……。

いきなり何言い出すんだーー！？まぁ、酔ってる様だから仕方ないか。あ、最初の三文字「ヤベぇ」は合ってる…。

「違う、違うよ、僕はただー」
「視姦して妄想してただけだよーって？」
あぁもう。この人は酔っぱらってるんだ。酔っぱらってるんだ。
耐えるんだ。我慢だ。
「ねぇ…。」
「…な…何…？」よし、僕はもう何を言われても動じないぞ。いちいち反応する方が恥ずかしいんじゃあないか？さらりと受け流そう。
「あたしとセックスしない…？」
ぶふぉあ！！
なななななななな！！！！
この目、真剣（マジ）だ…！！
ねぇお願い、体を擦り付けないで！
「…膣（なか）が疼いて…堪んないんだよ…」
うわぁ！！耳に息吹きかけないでよ、ホント！！何か変な声出ちゃったじゃないか！！
顔近い顔近い顔近い顔近い！！
舌なめずりした…
…襲われる！
あぁ、体を押し倒しに来たぁぁぁ！！
ぎゃゃゃゃゃ！！！
だが、この僕を救ってくれたのは極めて意外なものだった。
スリッパだ。
「止めろ、クソボケぇぇぇ！！」そんな野太い怒号と共にどこからともなく家庭用スリッパが放たれた。
勢い良く放たれたそれは一直線にクロアの頭を直撃した。
「いっ…！！」仰け反るクロア。その隙に僕はクロアから離れる

ことが出来た。「何だよ、アフロインポ！！」
「うるせぇ、セッ中ビッチ。」そう答えたのはクロアと先程まで飲んでいたへべれけの中年男性だった。クロアと同じ様な白黒スーツを着、同じ様なスラックスを穿いていたが、足首までの丈がある赤いマントと彼自信の顔が三つは余裕で入るだろうと思う巨大なアフロがとても印象的だった。
この人がスリッパを投げて僕を助けてくれたんだね。ありがとう。
「おう、そこの兄ちゃん。俺ァリカルドっつうんだが…面倒臭ぇ、アフロって呼んでくれ。」中年男性…オヤジ…リカルドは僕にそう言うと片手に持ったテキーラの瓶をそのまま滝飲みし始めた。
それにしてもこの人…かなり体臭…いや酒臭い人だなぁ…結構離れてると思うのにここまで臭いがやって来るぞ…！
ここで、「あっそうだ！！」少女教祖が突然、何か閃いた様に呟いた。
「そろそろ薬を飲まなきゃいけません。」少女はそう続けると懐から白い粉末の入った小さいビニール袋を取り出した。
…あれ？
あの粉…覚醒剤に見えたのって僕だけかな…多分気のせいだ。
少女はその袋から薬（覚醒剤じゃありません）を最寄りの教会机の上に少量こぼすと、それに思い切り鼻を近づけ、大きな深呼吸を繰り返しだした。
…覚醒剤じゃないよね…？え…？
少女は深呼吸を数回すると、恍惚とした表情でこちらに向き直した。
「はわわわわ、おそらにきんぎょがういてますぅ～」
……。
イヤァァァァ！！覚醒剤だぁ！！
あああああ。そういえば、夕方のあの匂いって香水じゃなくってこれ！？
世も末だぁ。

…あっそうだ。この子名前何て言うんだろう?
振り返ってみれば、僕、会ってから一度も名前で呼んだことなかった。
でもこれさぁ、聞くタイミング相当おかしいよね?殴られないかな…?まぁ、いいや。
営業マンみたく、蠅みたく、手をさすりながら僕は聞いた。できるだけ笑顔で。「そういえばさぁ…浸ってるトコロ悪いけど…君…名前何て言うの…?」
「え〜?うんこ〜〜〜。」
…。
…。
…?
そうか、君の名は「うんこ」か。名付け親の顔が見たいわ!!
「『うんこ』な訳ないでしょ?ヤク中。」本当の意味で夢心地な少女の頭をクロアがグーで殴り付けた。何も入って無さそうな乾いた音が響いた。「『アリス』って言うんだよ。又の名を『ヤク中教祖』。赤ちゃんの時、哺乳瓶の中身が覚醒剤だったらしいよ」笑いながらクロアは続けた。
「あーあと、ダウトっていうサッチュウの奴もいるから」
「サッチュウ?」
「殺人中毒者。今路地裏の掃除に行ってる。」
「……。」
「後であたしも行く。久々に逆死姦しにイって来るよ。」
……。
ああもう。何ここ?ホントに地球?

キリスト教エンズ派。
現在、信者2人。
キリストの魂が宿ってこの世に生を受けたアリス・キャンバーを教祖とする。
教説は只一つ。
「我らが神からの救いのために異教徒を皆殺しにせよ。」
麻薬を多く取り扱い、それにより収入を得、さらに町長に賄賂を貢ぎ、この町を牛耳っているという。
そのためこの町の警察は殆ど機能せず、完全に無法地帯となっている…

と、リカルド神父はウィスキーを飲み干しながら上機嫌に語った。
クロアは裏路地に行き、アリス教祖は司教台の上で奇妙なダンスを踊っている。
気が付くと、月が知らぬ間に高く上がっていた。夜も更けてきた。
あくびをすると、リカルド神父に空き部屋へと案内された。教会兼家らしい。行く廊下の途中でリビングやキッチンらしい部屋が見れた。
空き部屋へと案内され、リカルドがおやすみと言って扉を閉めると、僕はすぐにその中にあったベッドへダイブした。

あぁ、疲れた。
よし。明日すぐここを出よう。

第2話　「キ●ガイの歌は地獄への入り口」（後書き）

次話からは糞作者の執筆環境のせいで一話一話がかなり短くなってるから。
見易くなったと捉えるか、見にくくなったと捉えるかはアンタに任せる事にするよ。

by
クロア

第3話　「キ●ガイには朝も夜もない」　1

ねぇ。僕の実家はね、田舎の農家だからさ、鶏の鳴き声が朝の目覚ましの代わりになるんだ。それが農家の習慣だったし、僕の近所も皆そうだった。

それに対して都会は銃声が目覚ましの代わりになるのか。

へぇ～。

……。

うぇぇえぇぇん。助けてぇぇえぇ。

朝っぱらから大聖堂で撃ち合いが始まってるよぉおぉぉ。

「この邪教徒共ぉぉ！！よくも我々の教会を壊し、我らが教祖を殺したなぁぁあぁぁあ！！」そう一斉に叫び散らしながら銃器を乱射しているのはサルバージ教の信者の生き残りだった。このエンズ・クライシスト・チャーチを朝っぱらから襲撃しに来た輩であり、今朝のブロンズの目覚ましになった輩でもある。一同は一気に大聖堂の扉をぶち破り、ウージーやらＡＫやらを狂ったように撃ちまくっていた。

第3話　「キ●ガイには朝も夜もない」　2

見境なく繰り出されていく銃弾は、ステンドガラスを割り、教会机を蜂の巣にしていく。キリストが神々しく描かれた天井のステンドガラスも一気に崩れ落ち、落下したガラス片が豪快な音を立てて粉々に砕け散る。

止まない銃声。止まない破壊音。

ただ、この教会の者で朝からこの最悪の混声合唱を聞かされて黙っている臆病者はあいにくブロンズしかいない。あとの４人はかなり不機嫌そうに朝のラジオ体操をしにやってきた。

一番手はアリス教祖だ。司教台に弾が打ち込まれると、その陰からヒョコリと現れた。

「おい、そこのガキ!!ぶっ殺してやるぜ!!」直後、完全に暴徒化した一人のサルバージ信者が教祖に銃を向けた。

しかし、その信者は教祖の姿を見た途端、凍り付いた。

アリス教祖は、身の丈程あるミニガン（ターミネーターのシュワルツェネッガーが携行していた小型バルカンであり、アメリカ軍のヘリや車装甲としてよく用いられる重火器）を引っ提げていたのだ。

「貴方達ぃ何をしてるんですかぁぁあぁあ!!!」その一瞬後、教祖の絶叫と共にミニガンが唸りを上げだした。

第3話　「キ●ガイには朝も夜もない」　3（前書き）

ウォッカ
世界最強の酒
アルコール度数９６パーセント
絶対飲むものじゃないよね。
それをクロア姉さんは第２話の１１で飲んでました。
絶対吐きます。
よってこの部分をビールと変更させていただきました。
因みに普通ウォッカはカクテルの隠し味に使うらしいよ。

ｂｙブロンズ

第3話　「キ●ガイには朝も夜もない」　3

１００発／1秒の、化物の呻き声の様な銃声が異教徒達の肉体を爆散させていく。

「あひゃわ～まるで人がゴミの様ですぅ～」

廻る廻る銃口からの火花と人間の肉の花火が爆ぜる。転がった臓物達が僅かに湯気を立たせる。

ここで、

「おいおい、折角の朝酌が台無しじゃあねぇか。」アフロのリカルド神父が気だるそうに祭壇の端から現れた。手にはグレネードガン。

「お前等は『朝は一杯のビールから始まる』っていう言葉知らねぇのかぁぁぁ!??」怒りと酔いで真っ赤になった額に太い血管を浮き上がらせながら神父は撃った。

それとほぼ同時に、群がる異教徒達がグレネードの爆発と共に吹っ飛んだ。

「撃て!!撃ち殺せ!!」半数が死に、圧倒的に不利になった異教徒共も応戦する。信じるものを奪われた怨というものは怖いものだ。人を狂わせる。

異教徒の畜生共の目を見てみろ。あぁ、死んだ奴も生きてる奴も皆、悲しみで瞳が灰がかっている。

教祖は口元を僅かに歪ませ、嘲笑した。

「Ａｍｅｎ.」

祭壇のキリスト像の首元が畜生共の銃弾で抉られた。

第3話　「キ●ガイには朝も夜もない」　4

何も見えない聞こえない。何も感じることもない。
僕はベッドのシーツにくるまってそうブツクサ何度も呟きながら銃声が聞こえなくなるのを待っていた。
まず、これ宗教団体なの?テロリストとかマフィアとかじゃないよね?自問自答を繰り返す。
あ、僕ってここ、ロハネには観光に来てるんだよね?本当だよね?
何で僕がこんな羽目に…
「おはよう、ロメオ」突然クロアが部屋に入り込み、僕のくるまっていたシーツを引っ剥がした。「良い夢見たかい?」
「あ…うん。最悪の目覚めだったけど。あと僕の名前はブロンズだ。」
「わ〜かってるよ。」目を見たが、何も分かっちゃいないようだった。「まぁ、そんなことより…」
「…何?」
「アンタ一年くらい家に帰れないかもよ」
は?

第3話　「キ●ガイには朝も夜もない」　5

どういうこと？え？
帰れないって何で？！
驚きの余り、思ったことが全て口に出てしまった。
「そんなに怒鳴りなさんな。まぁ、アタシらにとっちゃ嬉しい話なんだけどさ。」
「どういう意味だよ」
「話が長くなるんだけどさ、サルバージ教が今朝滅んだんだよ。わかる？さっきの銃声だよ。でね、この街の支配率でウチらの『キリスト教エンズ派』がＮｏ．１になった訳だよ。」
成る程。この街の宗教は互いに争ってるって訳ね。それで頂上を取った、と。良かったじゃん。でもそれと何が関係あるんだ？
「あっ。アンタの考えた事わかった。何と関係があるんだ、でしょ？」
僕は頷いた。
すると、クロアは僕の寝ているベッドに腰掛けた。
「今のアンタ目立ち過ぎてるんだよ」

第3話　「キ●ガイには朝も夜もない」　6

嘘だ。
僕が目立つ訳無い。
小中高、万年いじめられ放題で特技がペン回しの僕が目立つ？有り得ない。
「ここがＮｏ．１になったという事は、アンタはこの街で１～５番目に偉いっていうことになるじゃん」
「ちょっと待ってよ、僕は君達の仲間じゃ…」
「他から見たら仲間に見えるさ、この教会に入って一晩出てこないとなるとね。」クロアはこちらを向いてニコリと微笑んだ。「アンタ今、外に出たら１００％殺されるよ。まぁ、アタシもだけど。」
「…誰に…？」
「バカだねぇ、アンタ。他の宗教団体の連中さ。この街を牛耳る為に皆必死なんだよ。」
僕呪われてないか？
とびきり強力な黒魔術とかで。

第3話　「キ●ガイには朝も夜もない」　7

マルク・チャップマン市長。

この街、ロハネを牛耳るためには彼、市長に貢ぐのが最低条件だ。

市長は金が大好きだ。金の亡者だ。いや、金中毒だ。それ程彼は金を心から愛してやまない。

毎日のように豪勢なパーティを開き、いつも贅沢な超高級ブランドに身を包んでいる糞タヌキだが、彼に貢ぐとどうなるか。

1、警察の無力化。

市長という権限を以って、ロハネに警察が干渉できないようにすることができる。完全にとまではいかないが、おかげでロハネは無法地帯化し、自由に抗争も出来るようになる。

2、擁護。

貢いでくれる者が死ぬという事は、彼の財布が痛むということになる。

今まではサルバージ教が市長に貢いでいたが、クロア達がつい先程その権利を奪ったのだった。

加えて市長はとても人間不信だ。

第3話　「キ●ガイには朝も夜もない」　8

彼にとって金を貢がない相手はただの屑なのだ。
世の中、金、金、金。金をくれない奴は信じられない。
つまり、街から誰かが貢がないとロハネは廃都となってしまうのだ。
この賄賂、即ち貢ぎの行為は半ばロハネの文化だ。ロハネは古くから屑が集まり、屑だけが暮らす、屑の街。
よってロハネの住民は彼に感謝せねばならないだろう。彼がいなければ直ちにアメリカ政府が街を弾圧するだろうから。

3、街の存続。
彼に貢ぐ限り、ロハネは存在する。更に言うと、金でロハネは存在しているのだ。
だから、街の住民は宗教を作り、莫大な金を信者から掻き集め、貢ぎの金を作っているのだ。
だが、「街のみんなで力を合わせてお金を集めよう」なんてことはしない。
街で最も力を持った者が全額払う事になっている。

第3話　「キ●ガイには朝も夜もない」　9

4、最強の証明。
その方がロクデナシ住民達にとっては面白いし、この街に協力なんて言葉はない。
みんなみんな平和という名の頭のネジがとうの昔に腐ってしまっているのだ。

これが、ロハネ。
これが、ロハネの全て。
どこを見てもキチガイしかいない、そんなゴミ、屑、塵、芥の街の全てなのだ。

「まぁ、要するにさ、まずアンタは市長に保護してもらわないと外の空気も吸えないワケ。」クロアは立ち上がって、のびをした。
「まぁ、その申請はすぐだからさ、心配しなくていいよ」
「あぁ、わかった。」
「うん。じゃあね」

そして僕はすっかり鬱っ気になってしまった。
家に帰れなくなった…
ベッドに再び伏した。

登場キ●ガイ紹介　クロア（前書き）

ヒャーヒャッヒャッヒャッ。
凄い色ムラ。
ベタ塗り最高ゥ！！！
という訳で悲しい糞絵の誕生です。
トホホ……。

登場キ●ガイ紹介　クロア

クロア　Ｃｌｏｅｒ

年齢　２０歳。
血液型　Ｏ型
趣味　嫌がらせ、童貞狩り

キリスト教エンズ派のひとり。
エモノは二挺のマイクロウージー。
淫乱嬢。Ｓ●Ｘ中毒。
初体験は七歳。
下ネタ担当。
もし姉だったらまずい人。

「ちょっ、クロ姉！勝手に風呂に入ってくんなぁぁぁ！！」
「ちょっ、クロ姉！リビングで堂々ＡＶ鑑賞すんなぁぁぁ！！」
「ちょっ、クロ姉！俺のベッドの中へ入ってくるなぁぁぁ！！！」

クロ姉「え～、いいじゃん」

疲れそうだ。

戦闘力　★★★☆☆
性行テク　★★★★★★★★★
羞恥心　★☆☆☆☆

読者人気度　★★★★★
作者寵愛度　★★★★★

キャラテーマソング：High and Mighty Color「背徳の情熱」

第4話　「ヤケ酒　with　キ●ガイ」　1

「お～い、ブロンズ。」リカルド神父がブロンズの部屋の戸を叩く。返事がない。もう一度、戸を叩く。返事がない。

……。

居留守使うなボキャアアアアア！！！

リカルドはブチギレてそのドアを思いっ切り蹴破った。

蹴破ったドアの先には、やはりブロンズがいた。

いや、寝転がっていた。

いや、転がっていた。

水を失った魚のような目で虚空を見つめ、すっかり魂の抜け殻と化したブロンズがベッドの上に転がっていた。ブロンズはリカルドを見つけるが何の反応も見せなかった。

「おい、ブロンズ。生きてるか？死んでるなら返事しろ」ジョークにも反応しない。

しかし、リカルドがふと耳を澄ますとこんな声が聞こえてきた。

「僕はお家に帰れないんだ…、僕はお家に帰れないんだ…、僕はお家に帰れないんだ…」

ブロンズの経だった。同じ言葉を同じトーンで呪文の如く繰り返していた。

リカルドは思った。

あ～あ。

鬱だ。間違いない、コイツ鬱だ。

よし、こういう時は…

ビールが一番！！

第4話　「ヤケ酒　with　キ●ガイ」　2

「んあ…？ふぁあ…」
大聖堂の教会机で昼寝をしていたクロアは目覚め、ひとつ、欠伸をした。不意にステンドガラスが視界に入った。眩しい日中の日の光が差してこない。夜闇がほのかに滲み出ていた。どうやら自分は昼寝のつもりが夜まで寝てしまったようだ。
昨日夜遊びし過ぎたかな…まぁでも気持ち良かったからいいや。
足音がしたのでふと、祭壇の方に目を向けた。
そこにはダウトが立っていた。殺人鬼の少年だ。
「おはよう、バカ」
「もう夜だよ。それに『バカ』って呼ぶの止めてくれない？」
「うるせぇ、バカ。人の前で死体とセックスする奴はバカとしかいいようがねぇよ、バカ」
「気持ちいいんだからいいじゃん。そうだ今からアタシとーーー」
「ヤんねぇよ、バカ」ダウトはそう吐いて、フードを深く被り直した。
「室内にいる時くらいはフード脱ぎなよ」
「うるせぇ、バカ。カッコいいじゃんかよ、このバカ」
「うるさい厨二。」
「黙れ、バカ。」
そんな口喧嘩が２０分程。
殴り合いに発展して間もなくすると、リカルドが祭壇の脇から現れた。

第４話　「ヤケ酒　ｗｉｔｈ　キ●ガイ」　３

「おーい二人共～」リカルドが呼んだが二人は全くの上の空。
クロアとダウトの喧嘩は続く。
「ちょっと、今顔殴ったでしょアンタ！！この野郎！！」
「黙れバカ、喰らえ、『爆裂・雷電殺戮拳（バーニンサンダージェノサイド）』！！とあっッッ」
「痛！！また顔殴ったね、厨二！！死ね！！」
「うるせぇ、バカ！！俺は１７歳だよ！！」
乱闘。罵倒と拳の嵐。本気の殴り合いだった。
リカルドは最初、面白がってそれを見ていたが、時が経つにつれ段々と苛立ちを覚えていった。
体のあちこちがむず痒くなってきた。リカルドの体がアルコールを欲しているのだ。先ほどから１０分ほど飲んでいないリカルドにとっては当然の事だった。

あああぁぁあぁああ……！俺ぁ早くビール飲みてぇんだよォ！！

眉間に太い血管を浮き上がらせたリカルドは懐からスリッパを取り出した。

第４話　「ヤケ酒　ｗｉｔｈ　キ●ガイ」　４

「るせぇぇえぇぇえぇ！！！！」そう絶叫しながらリカルドが投げたスリッパはまずダウトの頭を弾き飛ばし、続いてビリヤードのようにクロアの頭も弾いた。

ダウトの体は床に叩き付けられ、高くバウンドし、司教台の上に転がり、置いてあった酒瓶を一式割りまくった。

「くぉら！！俺の酒（人生）に何て事しられっちゃられられら！！！！……取り合えず死ねぇぇぇ！！！」

続けて投げられた時速１４０キロのスリッパは気絶していたダウトの顎を的確に捉え、跳ね上げた。

ダウトは死んだ。

享年１８ー。

閑話休題。（ダウト君は普通にのびてるだけです。ご冥福をお祈りしないで下さい。）

「ところでよォ、クロア。ブロンズが鬱モードになっちまったんだよォ。」

第４話　「ヤケ酒　ｗｉｔｈ　キ●ガイ」　５（前書き）

五月になりました。
ＧＷはどうお過ごしになられますか？
お暇ならば是非ロハネに観光に来て下さい……。
そしてキリスト教エンズ派の教徒になって下さい……。
ニャハハ。

ｂｙアリス

第4話　「ヤケ酒　with　キ●ガイ」　5

「あぁ…そう…。で？」スリッパで出来た額の傷を手で押さえながら、クロアは言った。
「みんなで一緒にヤろうや。」
「犯るの！？誰を？アタシを？！」
「誰も輪姦（マワ）すなんて言ってねぇよ、ビッチ！！目を輝かすな！！飲（ヤ）るんだよ！！」
「ちぇっ」するとクロアはつまらなそうに舌打ちした。「そうだったよ、忘れてたよ。アンタがインポだってこと」
「言ってろ。」リカルドは司教台の上の滅茶苦茶に荒らされた酒を片付け始めた。「んな事より手伝え。」
「…はいはい。」
その間、ブロンズはずっと祭壇の隅に転がっていた。
そしてそれに気付かなかったアリスはその顔面を思い切り踏んづけてしまった。

第4話　「ヤケ酒　with　キ●ガイ」　6

「え～皆さん。」リカルドがマイクを指でつついた。直後甲高いやかましい音が鳴り響いた。「え～今回、ブロンズ君が鬱になってしまいました。なので歓迎会を兼ねて憂さ晴らしにみんなで飲み会を開きましょ～～！！」

ワイン、ビール、その他様々な酒類で埋め尽くされた司教台。そこに座るのはブロンズ、クロア、アリス、ダウト、リカルドの5人。

ブロンズは思った。

ねぇ、なんでアリスちゃんが宴の席に出てるの？あと、ダウトも。未成年でしょ君たち。

それとあとこんな事してる間あったら早く帰らせてくれよぉ～～

「早速行くぞ。」リカルドは右手にジョッキを持った。「それでは乾杯の音頭はブロンズ。頼むぜ。」

「わ…わかったよ…。」渋々、僕もビールを注いだジョッキを手に取った。「え…ええ…と…うん…と…みなさん、ありがとうございます……？」

僕は重い腕でジョッキを持ち上げた。

乾杯。

そして、地獄の宴の幕が上がってしまったのだった。

第4話　「ヤケ酒　with　キ●ガイ」　7

宴はまずリカルドの一気飲みから始まった。
手に持ったビールジョッキを掲げてから勢い良く飲み干した。喉仏が高速で昇竜拳を繰り返す。
「ブヒャアアアアアア！！！！効くぜぇぇぇぇぇ！！！！」
口元を泡だらけにして叫ぶリカルド。何と、ジョッキはもうスッカラカンだ。
この間、たった2秒。
本当に人間なのか？この人は？先祖はクジラ？
続いてテキーラの瓶をラッパ飲み。これも2秒で平らげた。
次に酒樽を寄せ、拳で叩き割ると、隣のダウトに中身をぶち撒けた。
「何すんだ、バカ！！こんの…ヒック。」
次の瞬間、ダウトも自分の胃袋の中身をぶち撒けた。
ゲェロゲロゲロゲロロレロレロレロレロエロレロゲボゲボゲボゲボ（ｒｙ
彼は下戸らしい。
ダウトは一通り吐き終えると自ら作ったゲロの海の中に沈んでしまった。

第4話　「ヤケ酒　ｗｉｔｈ　キ●ガイ」　8

すると突然、猛烈な異臭が強烈に鼻をついた。そう、ダウトのゲロだ。
おうっぷ。
まずい、クソっ、貰いゲロしてたまるか！
僕は息を詰め、こみ上げてくる吐き気を必死に堪えた。喉の奥からせり上げてくる得体の知れない化物を懸命に押さえ込む。
が、間に合わなかった犠牲者、約2名。史上最高に気持ち悪い混声二部合唱が聞けた。

「嘔吐のハーモニー」ｂｙリカルド＆ａｍｐ；アリス

二人、特にアリスの具体的な様子は非常に見るに絶え難かったので上手く表現することが出来ないが、とにかく酷かった。
そしてそれにより、悪臭が増した。３倍増しだ。
目が染みる程の悪臭だ。自然に涙が溢れ出てきた。もう駄目だ。死ぬ。
ブロンズは立ち上がると自分の部屋へと風の如く疾走した。

第4話　「ヤケ酒　with　キ●ガイ」　9

ねぇ、
宴が咽鼻叫喚の地獄絵図に変わるのに5秒と掛からなかったんですけど。
あぁ、しんどい。
ブロンズは自分の部屋のドアにもたれ掛かり、誰もいない静かな廊下を見ていた。
肩を上げ下げしてすっかり疲労困憊してしまった肺に空気を送り込むが、まだ微かに酸味のある臭みがある。どうやら毒ガスはここまで浸食しているようだ。
もう早く寝よう。あれのどこが歓迎会なんだか。
僕はドアノブに手を掛け、部屋の中に入った。
入ってからドアを閉めると、あら不思議。あの臭いはどこかへ消えてしまいましたとさ。
めでたし、めでたし。

と、いきたかった。
次は別の臭いが僕の部屋の中を支配していたのだ。
生臭い、いや、こうもうちょっと性的な意味で生臭い…単刀直入に言えば、
女の匂い。
「やぁ、ブロンズ…」
どきり。
もう勘弁して、クロア。

第４話　「ヤケ酒　ｗｉｔｈ　キ●ガイ」　１０

これはまずい。早くここから出ーーー
「捕まえた♪」
いつの間にか手首を掴まれていた。ドアから強引に引き剥がされる僕。
「展開読んで先回りしておいたよ。やっぱりゲロ地獄になったんだねぇ」
今度はベッドに突き倒された。

ねぇ、クロアさん。クロアさん。何で貴方は全裸なの？
それはねぇ、アンタとエッチするためさぁ。

有名なグリム童話をちょっと捩ってみた。じゃあこの後僕食べられるの！？（性的な意味で）
「ここだったらスリッパが邪魔に来ないし二人でゆっくり乳繰り合おうよ」クロアはそう言うとゆっくり舌なめずりをした。
ヤバい。
ヤられる。
今回はスリッパは飛んで来ない。
絶体絶命。断崖絶壁。

……。
僕は諦める事にした。

第4話　「ヤケ酒　ｗｉｔｈ　キ●ガイ」　１１

目を閉じた。暗闇が視界を覆う。
もうヤケだ。何も見えない聞こえない、何も感じるものはない。
ここでぼくははいになるのさ、わははははひゃわ。
あれ、なみだがとまらないよ。わひゃわひゃ。
「アハハ、とうとう観念した？」
ズボン、いや、パンツの中に何か入ってきた。あぁ、これは手だ。
クロアの手。あーもーどーだっていーやー。にるなりやくなりどうとでもしろよぉ～
あ、なにこのこえ。ろうかのほうからちかづいてくるみょ。
「おるぁぁぁぁぁぁ！！！ビィィィッチ！！ファァァァァック！！！」
あ！！リカルドさんだ！！いや、様だ！！
猛るリカルド様は部屋の扉を蹴ってぶち壊すと、すぐさま僕待望のスリッパ様をぶん投げた。
投げられたスリッパ様はクロアの頭部を見事に捉え、その一撃で彼女を気絶させた。
ありがとう。僕の心は貴方への感謝の気持ちで一杯です。
「ありがとう。リカルド様。」
「気にするな。それと俺のことはアフロと呼んでくれ」
「ありがとう。アフロ様。」
しかし、今気付いた、とんでもない事がひとつ。

第４話　「ヤケ酒　ｗｉｔｈ　キ●ガイ」　１２

敬愛すべき、信愛すべきアフロ様がなんと身体中ゲロまみれにしておられるではないか。
……。

さぁ、みんな！！ここでひとつ、算数の勉強をしよう！！
まずはこの公式を覚えよう！！
ゲロの臭い＋アルコール臭＋女臭イコール…

貰いゲロ。

あっ、ヤバ。
うぇっぷ。
ゲロゲロゲロゲレェレロレロレロレロオエェレロエロエロ……
「なっ…！？ブロンズ、大丈夫か！？……おえっぷ。」
ゲェロゲロエロゲロ……（中略）

こうして酒とゲロまみれの僕の歓迎会はロハネの漆黒の夜闇にて幕を閉じた…。

（それから三日間、僕の部屋はあまりの臭さに使用禁止となってしまいましたとさ。）

第5話　「キ●ガイへの貢ぎ物」　1

ロハネ観光は今日で五日目。本当の今日の今頃は飛行機の中でぐっすり旅の疲れを癒している筈だったのだろうが、それは遠い未来の一年後の話となってしまった。

さて、今僕の目の前の司教台の上には数え切れないほどの１００ドル札が山のように積まれている。

そして僕の隣では、アリスがその１００ドル札を少しずつ取って束にしたものをトランクの中に丁寧に敷き詰めていた。

午前９時。リカルドは祭壇の端で朝食ならぬ朝酌を飲んでおり、ダウトはキッチンで愛用の包丁を研いでいるらしい。クロアは朝っぱらから自身の部屋でオカズを食べているらしい。世も末だね。

それにしても今日は眠い。晩秋だというのに今日は何故か異様に暖かい。ステンドガラスから差し込んでくる日差しが祭壇のマリア像を後光の様に輝かしていた。

ただ、僕の眠たさの原因はこれだけではない。暇、というのもあった。

さっき言ったように、ここの教会の人々は一人一人全くライフスタイルが違う。僕と唯一噛み合うのはアリスなのだが、今は黙々と例の札束の詰め込み作業をしている。

第5話　「キ●ガイへの貢ぎ物」　1（後書き）

今回はちょいと真面目に……
カーチェイスとかさせてみましょうか

by作者

第5話　「キ●ガイへの貢ぎ物」　2（前書き）

早くも５０話目。
記念にキャラ人気投票キャンペーンでもしようかな…？

第5話　「キ●ガイへの貢ぎ物」　2

このまま何もしないでいたらまた夢の世界へ逆戻りしてしまいそうだ。

……。

あぁ、眠い。

それにしても何なんだろう、このお金。いくらあるんだ？十万…いや、もっとあるんじゃ？こんなに沢山、何に使うのだろう…？

「…アリスちゃん」

「なんれすかぁ？」

「…口から覚醒ブレスが出てるから後でブレスケア噛んどいて。ところで、このお金、何？」

「市長様への貢ぎ物れすぅ～」

「いくら？」

「大体、八十万くらいウェスカー？」

「サングラスの極悪おじさんになっちゃった！！」もう滑舌が悪いというレベルじゃあない。

「まぁこれで半月分くらいウェスカーね。あっ、そうだ、今何時ウェスカー？」

「九時十二分。って、いい加減ウェスカーから離れろ！！」

「うぇぇえぇぇぇぇ、怒られたぁ～」

あ、まずい。泣かせてしまった。こういうシチュ苦手なんだよなぁ。。。

第5話　「キ●ガイへの貢ぎ物」　3

こういう時効果的なのは「居ない居ない婆」なのか（教育テレビでやってた）？！本当によく分かんない！！どうしよう…。

取りあえず、僕は謝ることにしました。

「ごめんね…キツい事言っちゃって…ウェスカーさんもいい人だもんね…」

変顔したけどやっぱり泣き止んでくれないよ～、「他界他界」の方がいいのか？

その直後、猛々しい唸り声が僕らがいる祭壇の端から響いてきた。

「俺のォォ、アリスにィィィィ何て事しやがるんだあァァァァ！！！！」その声の方を向くと、既に視界は目の前まで迫ったスリッパに支配されていた。

贖罪のスリッパは僕の眉間に見事ヒットした。衝撃で脳が揺れる。すると意識が遠ざかり、僕は床に崩れ落ちてしまった。

倒れ際に、クロアが現れてこのロリコンインポと中指を立てたのが見えた。

あぁ、そうなの。アフロ様ってロリコンで…イン……

ガクリ。

第5話　「キ●ガイへの貢ぎ物」　4（前書き）

この小説は著作権法により模倣行為の一切を禁止します。
しかし、同人誌にするのならご自由に☆

第5話　「キ●ガイへの貢ぎ物」　4

気づくと僕は車の中にいた。バンのトランクに大量のアタッシュケースと共に載せられていた。
車窓を見る。かなりの猛スピードで走っているのがわかる。
前部座席。
運転席にリカルド。補助席にはクロアが座っていた。
ん？アフロ様…？
へべれけアフロ様。車止めてくれぇぇぇぇ！！死ぬ死ぬ死ぬ死ぬ！！絶対死ぬる！！やめれぇぇぇ！！
ここで突然の蛇行運転。大きく揺さぶられ、為す術もなく派手に転がる僕。
あぁあ。僕死ぬ。

チュドン。チュドン。

あれ？なんか脇で何か爆発したんですけど。何ですか？生卵　ｉｎ　ｔｈｅ　レンジですか？
今度は思いっ切り近くで爆発！
スピンする車体。スピンする僕。何が起こったんだ？！
また走り出した。体勢を立て直したようだ。でも爆音は止まない。
あれ、クロアが窓から体を乗り出してウージー撃ってる。
えっ、まさか…！？

第5話　「キ●ガイへの貢ぎ物」　5

僕は後ろを振り向いた。
何と殺し屋みたいな人たちがベンツとかに乗って一杯追っかけてきてるじゃないですか。ウフフフ。カーチェイスですか。映画か。

「インポ、弾！！」
「ほらよ！！あと、『アフロ』を略すなぁあぁあ！！」
「うるさい、アル中！！」クロアは叫びながら、開いた車窓から身を乗り出し、リロードしたウージーを連射する。前輪右タイヤを撃ち抜かれた一台の黒ベンツがコントロールを失い、ブロンズ達のバンが通り過ぎ去った花屋の店内に突っ込んでいった。爆音と花屋のおばちゃんの悲鳴、その他諸々の破壊音が一気に交錯した。
だが、まだ十台以上のベンツが漆黒の殺意を身に纏い、追ってきている。
今度は殺し屋達が仕掛けた。黒タキシード黒サングラスの分厚い男達が、窓から上半身を乗り出し、拳銃なり機関銃なりを撃ちまくる。
「糞！！ファック！！」リカルドは男達の狙いを狂わそうと、蛇行運転を試みる。
トランクの扉が、跳弾音で１６ビートを刻む。ブロンズが目を瞑り、耳を塞ぎ、蛇行運転で体を大きく揺らしながら必死に恐怖に耐えているのが見えた。

第5話　「キ●ガイへの貢ぎ物」　6

「おい、ブロンズ！！男だったら毅然としやがれ！！」リカルドは振り向いて叫ぶ。しかし、ブロンズはそのままうなだれ続ける。クソったれ、それでも男か？金玉ついてんのか？

直後、突如としてクロアが叫びだした。「ねぇ、糞インポ！！前前前！！！」

あっ。ヤベ、いけねぇ。

リカルドは前を見た。するとなんと、T字路の突き当たりが目の前に迫っているではないか！ブロンズに気を向けていた間に突っ込んでしまっていた。さらに信号無視。左右の車の群が動き出している。

……。

なんの！俺のスーパーテクニックでこのピンチを切り……

あれ？ハンドルが思うように動かねぇ。

それに後ろでタイヤがギャリギャリ唸っていらっしゃる……。

パンクしたぁぁあぁ！！！

殺し屋達の凶弾は見事バンの後部タイヤの両方を破壊していたのだった。

ハンドルを右に切っても左に切ってもそこに少し寄って細かい蛇行運転を繰り返す。

Ｓｈｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｉｔ！！！！！！！

このままじゃあ衝突しちまう！

第5話　「キ●ガイへの貢ぎ物」　7

思い切りブレーキを踏む。しかしT字路の突き当たり、廃教会の壁には、一瞬後には衝突するかしないかの距離。今更踏んだところで意味がない。

ならせめて……

礼拝堂の扉へ突っ込め！！

「うぉおおおおぉぉ！！」ハンドルを限界まで右に回す。扉は車体からやや右に位置している。届くか……？！「クロア！！ブロンズ！！捕まれ！！」

後輪タイヤが火花を散らし、あっちやこっちや勝手に左右に震える中、前輪が懸命にそれを引っ張る。除々に扉の方へカーブを掛けていくが、途中、前輪の左タイヤも撃ち抜かれた。同時にタイヤの摩擦が十分に働かなくなり、車体はドリフトのような形で扉へと向かう。

果たしてバンは廃教会の扉を突き破り、礼拝堂へ入っていった。衝撃で大きく車体は揺れ、リカルドとクロアは作動したボンネットに身体をピンボールのように弾かれる。一方、トランクのブロンズは一緒に積んであった崩壊したアタッシュケースの山に埋もれてしまった。

それからほどなくして、殺し屋のブラックベンツ達も礼拝堂の中に猛スピードで入り込んできた。

第5話　「キ●ガイへの貢ぎ物」　8

入り込むと、黒ベンツ達は一斉に急ブレーキを掛け、止まってしまったバンを取り囲んだ。

そして、一斉放射。轟音を立て、バンの車体に降り懸かる鉄の雨。サイドミラーもフロントガラスもワイパーも粉々に砕け散り、無数の銃弾が車内を飛び交う。

「ど、ど、ど、どうすんだこれ!!?」

「アンタが悪いんでしょ!?何とかしてよ!!」

リカルド達は各々の座席に伏して、屈み込み、皮一枚のところで生きていた。

シートは最早穴だらけ。シートを貫通していく銃弾との摩擦熱で開いた穴から焼け焦げた匂いがする。

置いてあったビールの缶も破裂した。中身がリカルドのアフロにぶち撒かれた。

しかし、どうやらブロンズは無事なようだ。アタッシュケースに守られたからか、のびているからかは知らないが、しっかりと生きている。

「クソ、あのデブ市長に会いに行く時はいつもこうだ!!こんちきしょう!!」

「叫んでる暇あったらちゃんと運転して!!」

「畜生、Ｆｕｃｋｅｒ!!」

リカルドはまた叫ぶと、なんと身を屈めたまま、アクセルを入れだした。

第5話　「キ●ガイへの貢ぎ物」　9

バンが急発進。腐った教会机を蹴散らしながら、粉砕しながら、見境なく一直線に爆進する。

「わぁわぁわぁあぁあ!!ちょっとちょっとちょっと!!」

「ああ、わかってるさ!!俺様のテクニックを見せてやらぁよ!!」

リカルドは屈んだ状態でハンドルを握った。

まだ銃弾の嵐は止んでいない。うっかり顔なんかを出したりするとその瞬間蜂の巣だぜ。

じゃあどうやって運転するかって?まぁ、見てなよ!!

リカルドは上を見た。彼の目に映ったのはバックミラー。形は銃弾であらかた毟り取られてはいたが、彼はそれで十分だった。

スピンターンのような動きで車体が一回転すると、バンはまるで方向を知っているかのように、先ほどの扉まで一直線に走り出した。

リカルドはバックミラーの僅かな視界だけで周辺状況を理解し、記憶したのだった。

バンの退場を阻害してくるベンツを、音を頼りに最短ルートで避けまくる。

左、右、も一度左。

ここでリカルドはクロアに合図を送った。

中指を立て、大きく舌を出す。

『爆破』だ。

第5話　「キ●ガイへの貢ぎ物」　１０（前書き）

重大なシステムエラーを乗り越え、ようやく復帰致しました。
よかったよかった。

第5話　「キ●ガイへの貢ぎ物」　１０

「ああそう」それを見たクロアは自身の座席の側面にある赤いボタンを押した。
すると、唸る車底から大量の、あるものがばら撒かれた。

手榴弾だ。それらは皆、ひとつ残らずピンを抜かれている。
「よっしゃ、全速力だ！！」リカルドはアクセルを思い切り踏んだ。
今ばら撒いた手榴弾は行き付けの発破屋で改造された手榴弾だ。
発破屋の主人Ｍｒ．Ｊ曰く、「こいつを使うんなら逃走車を用意してからにしろ。お前がアロルディス・チャップマンじゃなかったらな」

バンが教会の外へ出た瞬間、凄まじい轟音と共に光の雨が降り注いだ。太陽の光もあったが、爆発の閃光の方がいっとう眩しかった。
爆発は教会中のありとあらゆるものを割り、裂き、砕き、有象無象を片端から消し炭にした。
教会の中で惑っていたベンツ達は一瞬にして木っ端微塵にされ、それらに乗っていた黒服達も痕が無くなる程に焼き尽くされた。

第5話　「キ●ガイへの貢ぎ物」　11

「Ｊの手榴弾は相変わらず凄いね…」
「あぁ、アイツはなんでもかんでも容赦ねぇからな。持ってたら核も入れかねねぇぞ」
バンに瓦礫の小粒が雨のように降り懸かる。パラパラと無数の乾いた音が断続的に車内に響く。
「……新車買わねぇとな」リカルドは教会の方を振り向いた。堅牢な様子を見せていた教会は跡形もなく崩れ去っていた。「本当にアイツはおっかねぇよ……」
「同意。」クロアは補助席のシートに座り直し、不意に窓の外を見た。

高速で流れ行く景色。先程の爆発で目の玉をひんむく通行人。消防車のサイレンも微かながら聞こえてきた。あとはあの金黒豚（チャンプマン）のところまでのんびり行くとしようかな。

「さぁ、もうちょっとで着くぜ、ビッチ。」リカルドは交差点の信号を止まると、言った。チャップマン市長の所まであと1分も掛からない。リカルドは新たな缶ビールを懐から取り出すと景気良くそれを飲み干した。
その直後遙か後方から、悲鳴とも狂声ともつかぬ叫び声が響いた。非常に聞き取りにくかったが、こう発音したには違いなかった。

ブッイキス！！

第5話　「キ●ガイへの貢ぎ物」　11（後書き）

次回、ついにあの方がお出ましになります！！

第5話　「キ●ガイへの貢ぎ物」　１２

まさかーー。

クロアは慌ててサイドミラーを覗いた。そこに写っていたのは１００メートル先から迫る黒いバン。

「ヤバいよ、インポ！！」

「何だ糞ビッチ？！」

「ロッキンポ派の連中がこっち来てる！！」

「何だって？！」

次の瞬間。対向車線を走っていた一台のエルグランドが大爆発した。

車内に居たのに関わらず、爆発の熱がこちらまで伝わってきた。

間違いない。ヤツだ。

「よし、掴まってろよ、ビッチ！！全速力で逃げる！！」信号は未だ赤色に光っているが、構ってはいられない。奴、デイビッドから逃げるのが最優先だ。アクセルを思い切り踏み、前に並んだ数台の車を抜かして交差点へ飛び出した。

予想通り、横から来た車に衝突した。凄まじい衝突音が響くと車は勢い良くスピンした。しかし、運が良い事に、丁度３６０度回ったところでスピンは収まり、バンは再び走り出した。

第5話　「キ●ガイへの貢ぎ物」　１３

その際、見てしまった。黒いバンから乗り出した奴の顔を……
オウム真理教の麻原彰晃を思わせる風貌の三角頭の男が、こちらにガンを飛ばしながらＲＰＧを担いでいる。運転席で奇声を上げているメガネをかけた金髪の太った男は激しいヘッドバンキングを繰り返している。
その男の奇声は通り過ぎていく建造物の窓ガラスを一枚残らず粉砕していく。

別にアタシ達はデイビッドのＲＰＧにおびえてるわけじゃない。
あんなのいくらでも避けられる。問題は運転手…マイクの方。あんなの連れて市長の所に行ったらどうなると思う?そう、リビングでのんべんだらりと菓子を食べてる金黒狸が窓ガラスで串刺しさ。
あいつらにはここでオジャンになってもらおうかい。
だけどあいにくアタシのウージーの弾は少ない。
てなわけで、ここはヤク中教祖に頼むとしようかな。
「糞インポ、あのヤク中に掛けるから携帯貸して!!」
「俺の可愛いアリスたんにヤク中たぁなんだぁあぁぁ!!」
「はぁもう何アンタ?!アフロでアル中でインポでロリコンって?!最低だよ!!」
「守備範囲バリ広（ショタから死体まで）ビッチに言われたかねぇよぉぉぉおお」

第5話　「キ●ガイへの貢ぎ物」　１３（後書き）

決してデイビッドとマイクはマキシマムザホルモンと関係ありません。

もう一度繰り返します。

関係ありません！！

第5話　「キ●ガイへの貢ぎ物」　１４

「うるさい、チェリーボーイ！！」
「何だとこの……！！」
ＰＬＬＬＬＬＬＬ！！！　ＰＬＬＬＬＬＬＬ！！！
変態女、とリカルドが叫んだところで突如、彼の携帯電話が鳴動した。
口論の発端となったアリスからだった。
電話に出たのはクロア。アフロが出たところで戯れ言しか言わないよ。
「もしもし？アリス？」
ーーなんか今困ってるでひょう？
「ご名答。アタシら今ロッキンポ派の連中にツケられてんの」
ーーうん、こっから見えてますよぉ～。ヤツら景気良くはしゃいでますねぇ、わひゃわひゃ。
「……狙撃できる？」
ーーもちろんですぅ、十秒とかかりましぇんよ？

「じゃあ行きますよぉ～、とくとごらんあれ」アリスはそう言って電話を切ると対物用ライフルＭ８２のスコープを覗いた……

第5話　「キ●ガイへの貢ぎ物」　15

バンチェスター大聖堂の瓦屋根の上にアリスはちょこんと座っていた。クロアに敵の監視と狙撃を頼まれていた。

聖堂と黒いバンとの距離はざっと3キロ。途方もない遠距離…と思っただろうが、実は違う。通常のM92は2キロまでが射程なのだが、アリスの持っているそれは改造銃である。3．5キロまで弾は飛んでいく（勿論非合法）。そして、アリスの狙撃のテクニックからしても、3キロは大した事ではないらしい。

しかし、

「あ～、クジラが空を飛んでいますぅ～」M92のスコープを覗くとすぐに現れた幻覚を追ってしまうアリス。性癖である。「まてまておおきなクジラさん♪」

乙女のお遊戯タイム。

六秒弱経過。

ここでアリスはようやく自分に任された任務を思いだし、我に返った。

第5話　「キ●ガイへの貢ぎ物」　１６

「そうでした、そうでした。敵の排除を頼まれてたんでしたっけ」独り言の多い九歳児。端から見ればかなりの「おイタした子」である。

アリスはまず、標的の車を探す。案外簡単に見つかった。猛スピードで突っ走りながらわんさか花火を打ち上げている。

ズームイン。運転手、マイクの頭を狙う。が、照準は車の進行方向の遙か先に定まっていた。弾丸の初速は約４００ｍ／ｓ。３キロ先まで届くには８秒弱掛かるということだ。つまり、８秒後の状況を予測して照準を定めているのだ。

そして、撃った。

強烈な炸裂音が響き、一発の１１ｍｍ弾はまとわりつく空気を裂きながら超高速で飛んでいった。

炸裂音が暫く反響し、ようやく静まり返ったところで、アリスは再び屋根の上に寝転がって気持ち良さげに寝始めた。

第5話　「キ●ガイへの貢ぎ物」　17

「もっと早く避けれないの?!危なっかしい!だからアンタはインポなんだよ!」

「パンクしてて無理なんだよ!!あと、インポインポ言うな!!俺の読者への好感度が下がる!!」

「なら作者に恨みなよ!」

ＲＰＧの怒濤の鉄槌を何とかかわし続けてはいるが、もう危うい。パンクしたきりのタイヤはすっかり歪んでしまい、走行することさえ難しくなっている。

だが、それもあと少しだ。もうすぐ、アリスの狙撃援護が来る筈だ。もう少し。もう少し。あと何秒か、十何秒か。幻覚と遊んでいなければいいが……。

今までアスファルトを砕き続けてきたデイビッドのＲＰＧがここに来て車体を掠めるようになった。

鼓膜が張り裂かんばかりの轟音と共に、右の車窓、ミラーから閃光が放たれた。

次の瞬間、車体のすぐ右隣で起きた爆発によって、バンは大きく揺らいだ。

第5話　「キ●ガイへの貢ぎ物」　１８

同時に左右に弾き飛ばされる三人。最初からうなだれ続けて人形のように動かないブロンズの体はさらに崩れたアタッシュケースの中に生き埋めになった。クロアは右のヒンジ・ドアに額を大きく打ち失神した。残るはリカルドだが、こちらもドアに頭を打ちつけたが、アフロがクッションになって、ぼよ～んと跳ね返り、元の位置に戻った。

「えぇぇえぇえ?!」これには本人もびっくりだ。もう彼にはヘルメットは要らない。

さて、クロアもブロンズもダメになった（ブロンズは元からだが）。残ったのはリカルドだけ。マイクの奇声が徐々に迫ってきている。リカルドは対向車線に車が乗り出していたのを見て慌ててハンドルを握り直す。

「畜生ぉぉおおぉ!!」

そしてリカルドは思い切りハンドルを切った。目前まで迫っていた対向車はバンのボンネットを掠めて過ぎていき、再び襲来したＲＰＧの弾頭も辛うじて避けた。

その一瞬後、黒バンの前輪左タイヤが瞬く間に弾け飛んだ。アリスが８秒前に放ったＭ９２の１１ｍｍ弾だ。

第5話　「キ●ガイへの貢ぎ物」　１９

急にバランスが狂いだした黒バン。マイクが必死に体勢を立て直そうとしたが無駄だった。すぐに車体はスピンし、無抵抗で歩道に乗り上げる。

むりぽ～！！

そんな叫び声が聞こえたとほぼ同時にバンは住居の壁に突っ込み、そのあらかたを破壊すると、一気に炎上し始めた。

「……ふう。。……してやったぜ」その様をスライドガラスを開けて見ていたリカルドは中指を立ててから元に戻った。

「さぁて…着くぜ。市長の別荘へ」しかし、誰も何も返事をしてこなかった。気絶している人間が口をきける筈がない。そこで彼はクロアの頬を、おい起きろ、と強く張った。

登場キ●ガイ紹介　アリス

アリス　Ａｌｉｃｅ

年齢　９歳。
身長　ブロンズの腰の高さくらい。
血液型　Ａ型（覚醒時はＯ型）
趣味　お薬。
日課　お薬。
好物　お薬。
苦手なもの　説教。

エモノは重火器全般。狙撃もやってのける。
キリスト教エンズ派の教祖。ロリコンのリカルドから寵愛を受けている。覚醒剤使用時はロレツが回らなくなる。
妹にすると家庭が崩壊したりしてしまう。
何万回生き返っても大統領にはならないタイプ。というかならさない。
リカルドのみならず一部の読者に絶大なる人気が。
絶対コイツ長生きするだろうね。
１番の幸せ者。

戦闘力　★★★★☆
覚醒（剤）　★★★★★★★★★★
ロレツ　★☆☆☆☆
読者人気度　★★★☆☆

作者寵愛度　★★★☆☆

第6話　「金キ●ガイは糞の薫り」　1

「はい、これで八十万。」クロアが指し示したその先には山の様に積まれた大量のアタッシュケースがあった。「これで八十万。ねぇ、アンタ聞いてる？」

「あぁ、聞いているよ。」そう素っ気なく切り返したのは、マルク・ファットマン市長だった。

贔屓目に見ても小太りとは言えない、丸まると肥え太った黒人の姿がそこにあった。泡銭で蓄えた腹を見ていると妙に憎らしくなり、蹴ってサッカーボールにしてやりたくなる、そんな厭な男だが、その男は今、応接間に集まった客、ブロンズ達の前で一人テレビにかじりつき、ウィニングイレブンに没頭している。

あぁ本当にサッカーボールにしてやりたい…Ｓっ気もちゃんとあるんだよ、とクロアは心の中で叫んだ。

「行けぇ～ガブロフ、突撃だぁ～」そんなクロアを尻目に市長は続けてプレイに熱中した。必死に自軍のＧＫを敵陣に走らせている。

そして２０分後。ようやく市長はテレビの画面から目を背いた。

第6話　「金キ●ガイは糞の薫り」　2

「わたしのロシアが…負けた…」当然だ。というかいつまで人を待たせているんだ。

「ハイ、八・十・万！！」額の血管が切れかけているクロアはアタッシュケースをデスクの上に叩きつけた。

「おい、ビッチ。無礼はやめろ、相手はお偉いさんだぞ？」リカルドが制止をするも、効かない。クロアはいきり立ったまま市長を睨み付けている。

それを見た市長は泡銭で汚れた醜い顔に似合わない爽やかな笑顔を返した。「ははは、いいよ。私が悪かった」

その笑顔に拍子抜けしたクロアは思わずとも拳を収めてしまった。

「……、で報酬は？」

「ガレージにある装甲車を与えよう。」葉巻をくわえた市長の横に、冷厳さを備えた若い女が現れた。オーバル型のフレームの眼鏡を掛け、金の長髪も後ろで束ねており、着ているスーツには一切の皺が認められない、いかにも厳格そうな女が市長の葉巻に火を点けた。彼女は市長の秘書。名はリコリス・キャンベラー。

「……生意気な愚民ですね、殺してしまいましょうか？」

「リコリス君。君はいささか厳格過ぎるよ」

ここで、リカルドにおぶられたブロンズがようやく目を覚ました。

第6話　「金キ●ガイは糞の薫り」　3

う～ん。ここはどこだ？
何か高級そうなお部屋だな…。もしかして着いたのか？
ということは……うわ……この人が市長…？マフィアじゃん。ゴッドファーザーじゃん。
っていうか何この巨大まっくろくろ助？あぁ、アフロ様のアフロか。
「アフロさん、」
「お、ようやく起きたか。」
「ちょっと頭が痛いけどね」
そうして僕は床に降ろして貰った。床に赤いカーペットが敷かれてある。もっふもふだ。
すると次の瞬間。僕の顔面を一発の９ｍｍ銃弾が掠めた。チュイン。僕の頬から一滴の血の滴が滴り落ちた。
途端、市長さんの横にいた秘書みたいなお姉さんが僕にブローニング・ハイパワー９ｍｍの銃口を向けたまま叫んだ。
「貴様！！何処から現れた！？スパイか？！スパイなのか？！」
は？

第6話　「金キ●ガイは糞の薫り」　4

え？

僕はずっとアフロさんに担いで貰っていましたが…？

「……アンタ、目ぇ悪いの？」クロアは大きなため息をつくと、リコリスの眼鏡を取り上げた。

「な、何をする？！」途端たじろぐリコリス。

クロアはその前で彼女から奪った眼鏡をかけた。

しかし、その直後その眼鏡をかなぐり捨てた。

「つっ……たぁぁあああぁ！！！目が痛い！！！裂ける！！！染みる！！！度ぉキツぅぅッ！！」閃光に灼かれたような強烈な痛みを感じた眼球を押さえつけ、身悶えるクロア。

そして、ふっかふかのカーペットのおかげで奇跡的に無事だった眼鏡をリカルドは拾い上げ、リコリスにそれを手渡した。

「すまんな、馬鹿を連れてきちまって。」

「……いや、いい。」リコリスは素っ気なく答えると、また最近度が合わなくなってしまったな、とぼそりと呟いた。

第6話　「金キ●ガイは糞の薫り」　5

「あーーー、あーー、あ……つッ…」クロアはようやく目の痛みが収まってきた様子だった。「……ねぇ、リコちゃん」

「私の名を子供の玩具みたいに呼ぶな」眼鏡を掛け直しながらそう吐き捨てるリコリス。

「アンタにはアイツが見えないの？」クロアはブロンズを指差した。すると、リコリスはその先をじっと凝視した。目を細めながらどんどんブロンズに近づいていく。眼鏡を掛けているクセして全く眼が見えないらしい。結果としてリコリスがブロンズの顔を視認できたのは彼と1メートル間隔になった時だった。彼女はそこまで詰め寄ると、突如、ブロンズから顔をプイと背けた。

「……失敬。いかにもボンクラみたいな顔をしている貴方がスパイなどしている筈がない。すまない」

「…ち…直球だなぁ……」

「じゃあさ、そこのアフロはどう見えたよ？」と、クロア。

「ただの大きいブロッコリーかと」しかし眼鏡を拾ってくれた時にはしっかりと見えた、と付け加えてリコリスは市長の横へ戻った。

「さぁ諸君、ここからは真面目な話だ」市長はリコリスが戻ったのを確認すると、やや前傾姿勢になって話し始めた。

第6話　「金キ●ガイは糞の薫り」　6

「君達の８０万ドル×１２回払いで一年間町の警察を無力化し、私は君達を擁護する。まさに至れり尽くせりだな。ＯＫ？」すると、市長の声色が重厚な響きがあるものへと変わった。

「あぁ。ＯＫだ」リカルドは答えた。「……だが、ちょいと高ぇんじゃねぇのか？」

「私も上への賄賂が要るんだよ。地位を上げるためにね。」腕を組んでソファに背もたれた市長。葉巻の濃厚な煙が連なって蛇のように揺らいだ。「世の中、何でも金、金、金なんだよ。この世は金があったら何でも手に入るように出来てあるんだ。一生を木っ端役人で終わらせてたまるか」

と、その時、部屋の隅で暇にしていたブロンズが突如、不審な音を聞きつけた。

砕け散るガラスの音、複数人の乱暴な足音。

第6話　「金キ●ガイは糞の薫り」　7

これは…何？あぁ、あれだ。僕みたいなヘタレが撃ち殺されるパターンだ。

ブロンズがそう思った直後、突如、応接間のドアが蹴破られた。

「Ｆｒｅｅｅｅｅｚｅ！！！！」

そう叫んでマシンガンを構えぞろぞろと現れた数人の男達。黒いタキシードとサングラス。先程の殺し屋の新打ちらしい。

その瞬間、リコリスは動いた。

一瞬後の弾丸の嵐をものともせず、左に飛びながらブローニングハイパワー９ｍｍを連射した。弾丸は入ってきた５人の内の３人の頭蓋を一貫し、赤の花火をぶち撒けさせた。

すると、残った２人の殺し屋は、すぐに後退し、対面した壁に背を押しつけた。

成る程。これで奴の撃つ弾は当たらない、手を延ばせば一方的にこちらが攻撃できる。と彼らは踏んだのだろう。

だが、甘かった。リコリスは既に狩猟用ライフルの引き金に指を掛けていた。

第6話　「金キ●ガイは糞の薫り」　8

直後、部屋に凄まじい発砲音が響いた。ライフルの弾は殺し屋が隠れている壁を貫通した。もう一発。次はもう1サイドの壁を突き抜けた。

沈黙。

誰もリコリスに銃を向けてくる者はいなくなった。

その沈黙の中を市長の拍手が打ち破った。

「流石、私の秘書だ。何でも仕事が早い」と、市長は嬉しそうに笑みをこぼしながら言った。

「私は貴方の為ならば何でもしますよ市長…」

「リコリス…」

「市長…」

そうして見つめ合う二人。

「リコリス」

「市長」

「リーコリス♪」

「市ー長♪」

「リーコリス♪」

「市ー長♪」

「いつまでもいっしょにいようね☆」

「はい♪いつまでもあなたにお供します☆」

「Ｆｕｕｕｃｃｃｃｃｋ！！！！！」無論、叫んだのはクロア。市長と一緒にルンルンのイチャイチャモードのリコリスを一撃で張り倒した。「あああぁ、気持ち悪い！！イチャイチャイチャイチャして！！この小説はラブコメじゃないの！！アンタ性格変わってるじゃん！！」

「何だと貴様、殴りやがって。ラブコメじゃないならラブコメに

すりゃあいいじゃないか」

「死ねぇ！！」

第6話　「金キ●ガイは糞の薫り」　9

「私のリコリスに何すんだテメー！！」殴られたリコリスを見た市長は激怒して席を立ち上がった。
「アンタらが気持ち悪かったのがいけないんだよ！！」
間違いない、これは厄介事になる！！
「まぁまぁまぁまぁ、二人とも落ち着いて」と、僕は止めに入ろうとした
その時、
ただいまー、と何処からか中年の女の声が聞こえてきた。
「……あ…。」と市長。呆けた声を口元から漏らした。「私の妻が帰ってきた…。」
「……何かまずい事でもあるの？」クロアが聞きたくなる程、市長は突如として慌て始めた。
「私とリコリスとの関係を知られたらどうする？！」
まぁ、確かに。別荘とはいえ、家に自らの秘書を連れてくる所からおかしい。警護用と言っても不審過ぎる。見つかったらただ事じゃ済まないな。言い逃れは絶対無理だ。
ふとブロンズが思った直後、市長は走り出した。部屋の窓に向かってだ。
「あちょーー！！」
市長は肥満に似合わない俊足で十分な助走を取ると、一気に飛び上がった。すると、その砲丸のような体駆は、助走の勢いで窓ガラスをぶち破った。

第6話　「金キ●ガイは糞の薫り」　１０

そして、華麗に地面の芝生に着地すると、華麗に転がり前転を繰り出して華麗に立ち上がると、華麗に振り返った。

「ＨＡｌＨＡｌＨＡｌｌ！！！私は仕事に戻る！！私の妻が来たら大便しに帰ってきたんだと伝えておいてくれぇ！！」そう叫んで驚異の瞬発力で家の敷地を出た市長。それに伴い、リコリスもブロンズ達に少しばかりの餞別の言葉を告げてから

「あちょー！！」

と、窓の外へ飛び出した。

嵐が通り過ぎた……。

そこらに死体が転がっている。壁には銃弾痕。割られた窓ガラス……

「…これ…アタシらにどうしろって……？」

第6話　「金キ●ガイは糞の薫り」　追記　1

「あー、糞、やっぱアイツ駄目だ」廃車同然になったバンを捨て、市長から貰った装甲車から降りたリカルドは呟いた。「なぁ、ビッチ。そう思うだろ？」

「うん、酷い目に遭ったよ。アタシに『私の夫に何したの？！』だってさ、ホント最悪。何もしてないのに」

「何か浮気癖ついてるよね、あの人」と、ブロンズ。カーチェイスさせられたり撃たれたりと大変な一日でした。

「昔っからさ、あれは。もう治らない。精神病院かどっかに行って貰わないとな」装甲車の扉を閉め、ガレージのシャッターを閉めるリカルド。彼のアフロを夕日が照らす。

３人はガレージを後にした。庭の芝生を踏み、勝手口の扉を開けると見慣れた教会の廊下が現れた。それを奥まで進むと、お馴染みの大聖堂の祭壇に出た。

夕方になっていた。赤々とした光がこれでもかという程に西のステンドガラスからさんさんと降り注いでいた。

そしてその光の下で、ダウトが虚空に向かって包丁を振り回していた。

リカルドはそれを見ると、懐から携帯電話を取り出した。

「もしもし、警察ですか？」

第6話　「金キ●ガイは糞の薫り」　追記　2

「待てぇえぇ！！バーロー！！！」途端血相を変えて吠えるダウト。「俺はただ敵と闘ってただけだよ、このバカ！！」

「ダーウト君。」リカルドは携帯電話をしまうと、黒い笑みを浮かべながらダウトににじり寄った。「君は何歳でちゅか～？」

「…じ…17……」

「だったら見えない敵と闘うの止めて貰えるかなぁ～、とってもイタいんだ。おじさん恥ずかしくなっちゃう」リカルドの右手に握られる凶器。スリッパ。「お前いい歳してジャパニーズアニメの見過ぎなんじゃあああああ！！死ねぇえええぇ！！！」

「ぎゃあぁぁあああぁぁあぁぁあ！！！ジオ●公国に栄光あれぇ！！」

リカルド　が　あらわれた

どうする

ダウト　の　まほうこうげき

ちゅうにびょう　の　もうそう　は　きかない！！

リカルド　の　こうげき

スリッパ

ダウト　は　しんでしまった！！

第7話　「震えるキ●ガイと馬鹿」　1

僕がエンズ・クライスト・チャーチに来てから今日で6日目。あの後の市長の電話の話によれば、僕は世間一般の間では犯罪者扱いされてて、市長がそれを丸くくるめるのにはやはり一年掛かるらしい。はぁ。

さぁ、もう少しで12月だ。ドイツでは雪ってドカドカ降ってたからな、アメリカではどうなるんだろう？

……。あのね、冬って寒いでしょ？寒いもんでしょ？ならば風邪も流行るというわけで。

ぶえっきち！！

風邪引いてしまいました。

僕は今大聖堂に居るんだけどね、何故かみんなが居ないの。朝っぱらからみんな何してんだろう？

ぶえっきち！！

あ～だめだ。妙に頭がくらくらする。どうやら熱がありそうだ。早く自分の部屋に戻らねば。

僕はおぼつかない足取りで大聖堂の祭壇に登り、その端の扉へと向かった。扉を抜けると白を基調とした一本道の長廊下に出た。ここに僕の部屋へのドアがあり、クロア、ダウト、アリス、リカルドの4人の部屋も……ってあれ？

……僕の部屋ってどこだっけ？

第7話　「震えるキ●ガイと馬鹿」　2

まずい……、僕の部屋は何処?!
ざっと数えてみても扉は１５程ある。この廊下は無駄に長い。
僕の部屋はその真ん中辺りだって事は分かる。
だが、それから後は忘れてしまった。
そして理不尽なことにここにある扉は全部同じデザインである。
あ～頭が痛いよぉ～早くベッドで休みたいよぉ～。
僕はとぼとぼと廊下を進んでいき、適当な扉の前で止まると、その扉を開けた。
物置だった。沢山の教典が埃を被ったまま山積みにされていた。
はずれ。
次。その右隣の部屋。扉を開く。客室だった。大きい黒いソファーが二つ、アンティークのバロック様式デスクを挟んで威風堂々と佇んでいた。　はずれ。
はい次。また右隣の部屋。だが、今度のその扉からは異様な悪臭が微かに放たれていた。

第7話　「震えるキ●ガイと馬鹿」　3

何だこの臭い…鉄……？まぁいいや…。
僕はそう思いながら中へ。しかし、それが大きな間違いだった。
「やほーーい！！」扉を開けた瞬間、包丁を持ったダウトが奇声を上げながら中から飛び出してきた。押し倒される僕。床に頭を打った。痛い。
ダウトは僕の顔をなめ回すように眺めると、かぶりながら言った。
「……な～んだ、ブロンズか。てっきりロシアからのスパイかと」
「……一体いつの時代の話をしてるんだい？」ていうか人を襲うのは顔を見てからにしようよ。んで、人を襲うのに、やほーいって……？君何歳？ダウトの体を越して見える、部屋に飾られたフィギュアの数々。この人もうだめだ。
「まぁ、いいや。なぁ、ブロンズ。今から溝鼠の駆除行くんだけど一緒に行かないか？」
「行きません」
「世界の平和の為に……」
「なりません」僕がそう切り返していくとダウトは、んじゃまた今度な、と言って去ってしまった。

第7話　「震えるキ●ガイと馬鹿」　4

うん……まぁ、ここがダウトの部屋ね。わかった。覚えておこう。
んじゃ、次行ってみよう。
……。
アルコールの匂い…パス。次。甘ったるい不思議な匂い…パス。
僕はそんな酒飲みじゃあないし、覚醒剤の常習犯でもない。アフロ様の部屋とアリスちゃんの部屋ね。OK。わかり易ッ。
さぁ、残るは僕の部屋とクロアの部屋。僕ね、一番入りたくなかったのがクロアの部屋だったの。もうトラウマなの。
不運な事に、扉からは匂いが嗅げないようだ……1／2の確率。
一方は玉手箱、もう一方はパンドラの箱。
僕は左右に並んだ扉の前に立つ。
どうしたんだ、僕。どうして体が震えているんだ?落ち着け。落ち着け。冷静になれ。

クロアがそんなに怖いのか?自分の心に問いかける。

はい、怖いです。
うん、自分の心って正直だね……びぇえぇぇん

第7話　「震えるキ●ガイと馬鹿」　5

もうこうなったら自棄だ。
仮に間違った方を選んでも、その時はその時だ。
行くぞ！デッドオアアライブ！！
ガチャリ。
左の扉を開けた。するとすぐクロアの顔が覗けた。
バタン。
……。
……。
ガンガンガン！！
ひぃいぃいいい！！内側から叩かれる扉に必死に体を押しつける僕。
「ちょっ、アンタ！！アタシの出番、２秒未満で終わらせようとしないでよ！！」
あぁ、クソ。パンドラの箱を開けてしまった。デッドの方を引いてしまった。クロアを外に出してはいけない、と僕の生存本能が叫ぶ。
「出番が欲しかったらまず服を着て！頼むから！！」
「これがアタシのアイデンテテーなの！！」
「ティティーだ！！なんだよテテーって？！」
「どっちでもいいじゃん！！とにかく開けて！！いっしょに……」
「断る！！」

第7話　「震えるキ●ガイと馬鹿」　6

「開・け・て！！」
「い・や・だ！！」
口論すると次第にクロアの抗反する力が強くなってきた。それでも一応男女の力の差というのもあるもので、僕はまだ平気だ。だがこれじゃあ埒が開かない。
ようし、こうなったら開けてやる。ただし、タダじゃあないぞ。
開けた瞬間、自分の部屋に滑り込んでやる。
よし、まずは……、と僕は扉を背で押したまま、右手で最後に残った部屋、僕の部屋のドアノブに手を延ばした。
……クソ、数センチ足りない。何とか届かないだろうか……？！
あらゆる関節を限界まで伸ばし、震える手先でドアノブを掴もうとする。
もっとだ、もっと伸びる筈だ。
アイ　アム　ア　ゴム人間。
アイ　アム　ア　ゴム人間。
アイ　アム　ア　ゴミ人間。
アイ　アム　ア　ゴミ人間……！！
ぷちゅん。
突然僕の上腕二等筋で何かが炸裂した。
あぁ、つった。

第7話　「震えるキ●ガイと馬鹿」　7

ぎゃあぁぁあぁあ……！！痛い！！『肘の急所をぶちつけてシビビビビ』より痛い！！

うん、わかった。僕はゴム人間ではない。扉に手は届かない。

……もういい、開けてからだ。開けてからダイブしてやる。僕の部屋にダイブしてやる。なぁに、ピンポンダッシュの応用さ。ピンポンダッシュ＋鬼ごっこ＋スライディング＋……あ、ダメだ、無理な気がする。

でも、とにかくやらないと……うふんあはん地獄はもうコリゴリだ。

……よし、行くぞ！！

「うりゃあ！！」僕はかけ声と共に今まで目一杯押していたドアを一気に引いた。すると、ラッキーな事にドアにつられて飛び出したクロアが廊下の床に倒れ込んだ（案の定、全裸だった。だけど僕はもう逃げるもんねハッハッハァ！！）。

それを見た僕はすかさず、足の瞬発力を駆使し、僕の部屋のドアノブへ飛びついた（クロアはその時立ち上がっていた。だけど僕はもう逃げるんだもんねハッハッハァ！！）。

そして僕は一気にドアノブを回し、一気に扉を引き、一気に部屋の中へ滑り込んだ。

「あちょーー！！」

第7話　「震えるキ●ガイと馬鹿」　8

その時、クロアも一緒に中へなだれ込もうとしていた。
何としても彼女は中に入れるなぁぁあぁ！！
そんな脳の指令に僕の足が応えてくれた。
僕はドアの隙間から体をねじ込んでくるクロアの横腹を、スライディングした体勢から後ろに転がって思い切り蹴った。蹴りが直撃し、廊下へ吹っ飛ばされるクロア。それを確認した僕はすぐさま立ち上がり、ドアに鍵を掛けた。
ふぅ、やれば人間出来るものである。主人公がヒロインを蹴るのは、このよい子が読む物語としてどうかと思うが、まぁ、いいや。
ミッションコンプ。一件落着、さぁ、寝よう。
あ～頭が痛い。スライディングしたから余計だ。ぶえっくしょん。
僕はドアから振り返り、とぼとぼとベッドへ向かった。
めでたし、めでたし……？

……ん？！

第7話　「震えるキ●ガイと馬鹿」　9

あれ……？

僕のベッドってこんな濡れてたっけ？

ベッドの側のナイトテーブル。ランプは置いてたけどキノコを置いてた記憶はないなぁ。

本棚。エロ本は買ったことあるけど本棚全部が埋まるほど買った覚えはない。

ああ何か酸っぱ臭い。酸っぱ生臭い。

……。

これクロアの部屋じゃん……（泣）

つまり、僕の部屋にクロアが入ってたってワケ……？

デッド　オア　アライブじゃなかったんだ。

デッド　オア　ダイだったんだ。

ぶえっきち。ずるずる。ぶえっきち。

「どう？アタシの部屋？気に入った？」全裸のクロアが施錠を解除して部屋の中に入ってきた。

もう色々言いたいけど、風邪で全部言う気力がないから一言でまとめるね。

この変態！！

第8話　「キ●ガイミリタリー始動」　1

『ロハネの死神』、『血の芝狩り機』、『溝の守人』
これらは全てダウトの異名である。彼は、狩られる側の闇の住人達にそう呼ばれ、恐れられているのだ。しかし、これらは全て彼自身が作った二つ名であり、本人の一番は『血の芝狩り機』らしい。
ダウトは、エンズ・クライスト・チャーチから出て、真っ直ぐ１００メートル歩いた所にある裏路地（スラム）を拠点に、毎日殺戮活動を行っている。主なターゲットは麻薬の密売人だ。彼らはその裏路地を中心に商売をやっているので、ダウトは世界平和の為と称し、毎日毎日バットと包丁を引っ提げて彼らを殺りに行っているのだ。
同時に、それがエンズ派の収入源でもある。ダウトは「殺し」に往くと大体、殺した密売人の麻薬を奪い、教会へ持って帰る。それを教祖のアリスが売り捌いて金にする。ダウトの、教会に対する寄付金という事だ。因みにエンズ派のもう一人の信者、クロアは娼婦、つまり水商売で得た金を教会に捧げている。

そして、ブロンズがクロアに襲われている間、ダウトは独り、裏路地で猟を行っていた。

第8話　「キ●ガイミリタリー始動」　2（前書き）

最近小説とかのタイトルに「！」マークをつける物が目立ちますよね。
つける意味が解りません。
因みにこの小説のタイトルにある「！！！！！」にはちゃんと意味があります。
皆さんに叫んで貰いたいのです。声枯れるまで。命尽きるまで。
てゆーか叫んで生きて下さい。（最早意味不）
日本よ、バカになれ！！

ｂｙアリス

第8話　「キ●ガイミリタリー始動」　2

「さぁてと……今日はどんな鼠が出てくるかなっと……」

薄汚い裏路地を適当に徘徊するダウト。その脇で彼をおびえた目で見るストリートチルドレンがいた。ダウトはそういった乞食の連中もターゲットに入ってはいるが、その輩を殺すのは決まって彼が相当に退屈した時だけだ。

殆ど抵抗のない人間を殺したところで何が悦しい、何が面白い？活きた人間じゃなきゃ殺り甲斐がない。

……おっと……！

曲がり角に入った。その時、曲がった先に人が見えた。慌てて引っ込むダウト。

「獲物発見、エイムモードに入ります……」ぼやきながら、そろりと顔を出して獲物の様子を見る。

派手なスーツを着、鼻ピアスを付けた巨体の青年。どこかのマフィアだろうか？まぁいい。すると、その青年はひとしきり周りの様子を伺うと、対持していた小汚いランニングシャツの老人に、ビニール袋を一包み渡した。

そのビニール袋の中身には少量の白い粉。それは言うまでもなく、覚醒剤だ。

第8話　「キ●ガイミリタリー始動」　3

老人はそのビニール袋を手渡されると、すぐさま小走りで向こうに去っていった。

これは決まりだ。殺してしまえ。ダウトは包丁を握りしめ、一歩出た。青年は突然に現れたダウトの姿を見て素早く身構えた。腰のホルダーにゆっくりと手を近づける。

「溝鼠」ダウトは言った。「お前みたいな奴が居るから世界は狂っているんだ」

「誰だ手前ェ？」

「『血の芝狩り機』、ダウトだ。この街でそんな事も知らないなんて奴は相当のモグリだぜ」接近するダウト。両者間の距離が徐々に狭まっていく。

「『血の芝狩り機』やら何だか知らねぇが来いよ、来て見ろよ。」中指を立てて挑発する青年。ホルダーから銃を抜き出したのだった。勝者の笑みを浮かべて銃口を突きつける。

第8話　「キ●ガイミリタリー始動」　4

が、突きつけた瞬間には最早ダウトの姿はそこにはなかった。一瞬で消えた敵。姿を求めて見回す青年。

すると、ダウトは青年のすぐ下に居た。一瞬で相手の懐に潜り込んだのだ。

「遅えよ！！」ダウトは叫ぶと右手に持ったバットを振り上げた。青年の手から弾き飛ばされる拳銃。拳銃は回転し、宙を舞うとダウトの後ろに落ちた。叩かれた青年の手は複雑に歪み、折れ曲がり、皮膚を突き出した小さな骨からは心臓の鼓動に合わせて血が噴き出される。

「ひぃいいぃいいぃいいぃい！！」激痛と恐怖で頭を溶かされた青年は悲鳴を上げながら一目散に逃げ出した。激痛に激しく肩を上下させ、瞳を恐怖の色で染め尽くしながら、敗走した。

だが、それもすぐに止まった。

青年のこめかみに包丁の切っ先が湿潤な音を立てて挿入れられたのだ。絶息。

「遅ぇつってんだろ？このバカ」青年の背後でせせら笑うダウト。包丁が皮膚に埋もれていく。大量の血の滴が垂れ流れ出した。深部へ突っ込まれる程に、青年の意識は掠れ、薄れ、消えて無くなった。刃が骨を削る。脳髄を貫いていく。

第8話　「キ●ガイミリタリー始動」　5（前書き）

七月になりました。
もういくつ寝るとお正月？

ｂｙ作者

第8話　「キ●ガイミリタリー始動」　5

その感触が指に伝わってくるとダウトは、ただ刺すだけじゃつまらなくなってきたのか、今度は乱暴に青年の頭の中を突きまくり始めた。

青年は既に息絶えていたが、包丁で刺突される毎に脊髄反射で体は震動し、空っぽの肺から絞り出された、膃肭臍のような喘ぎ声も偶に聞こえた。接合部からは赤い蜜が溢れだし、ピストン運動を繰り返す包丁には粘ついた脳汁が絡みつく。

「カハハハハハハ、勃起モンだぜ。違う意味でスカルファックだ」

更に往復が激しくなる。滅茶苦茶に掻き回される脳髄。大きくグラインド。頭蓋の中で脳が丸ごと一回転した。接合部から脳の一部がはみ出してきた。

それを確認したダウトは一気に包丁を引き抜いた。すると、青年の死体は崩れ落ち、穴の開いた頭蓋から泡を立てた脳汁や血液が、脳味噌の断片達と共に溢れ出した。世にも奇妙なミックスジュースが出来た。包丁にまとわりついた脳汁が糸を引いた。

はは、いい気分だ。こういうのを死姦って言うんだよ。

ダウトは独り言を呟くと、血がこびりついた青年のジャンパーをまさぐり始めた。

第8話　「キ●ガイミリタリー始動」　6

案の定、白い粉が入った小袋が大量に見つかった。さらに、名前を書いたリストも出てきた。今日のノルマ、と題に書かれてあり、渡した人のチェックを行っていたようだった。未チェックの欄が数カ所開いていた。あの後、他の人間にも売るつもりだったのだろう。

ケッ、売国奴が。

ダウトは舌打ちをすると、その紙を丸め、適当に投げ捨てた。その後、一緒に出てきた覚醒剤の小包を自分のスラックスのポケットに詰めた。

さぁ、仕事は終わった。次は何をしようか。何をして遊ぼうか。死体をバラすのも面白いけれど、やっぱり活きのいい人間を捌く方が楽しい。

ダウトは血溜まりから血を掬い、飲んだ。口の中に鉄の味が広がった。

とその時、路地裏に入ってくる黒い人影が。

第8話　「キ●ガイミリタリー始動」　7

その人影は急ぎ足でまっすぐこちらへ駆けてきた。殺した奴の仲間かもしれない。ダウトは身構えた。

距離が近づくにつれ、輪郭が露わになってくる。

金髪金目の男だった。歳は３０代そこらだろうか。男は筋骨隆々とした体躯から威厳を放ち、威風堂々とした歩みでこちらに近づいていた。手には拳銃。かなり使われたような、年季の入った銃だった。

マフィアか？宗教団体の輩か？それとも……？

ダウトが憶測をしていると、突然、男が口を開いた。

「そいつはお前が殺したのか？」格調高い声だった。それであって、ただならぬ覇気を感じさせる声でもあった。

……こいつ、ただモンじゃねぇな……

ダウトが一歩後ずさると、男が一歩にじり寄る。重圧を掛ける。殺気を感じるダウト。冷厳な目で見下す男。

あぁ、いいさ。

そんなに殺りたいんなら、殺ろうぜ。殺し合いだ。

第8話　「キ●ガイミリタリー始動」　8

身長差はかなりある。ダウトは１７０程あるが、男の方は裕にそれを越して2メートルもある様だった。体重にもかなりの差があるだろう。

だが、ダウトは構わなかった。体を前傾させると、真っ直ぐ男に突っ込んでいった。

それに反応した男はバックステップして、銃を撃った。

が、撃った先にダウトの姿はない。

男の横に回り込んでいた。

「遅ぇんだっての」

男の後頭部を目掛け、バットを振るう。

だが、それは空を切った。

次の瞬間、ダウトの横っ腹に男の渾身のリバーブローが突き刺さった。

顔を歪めて苦悶するダウト。その顔に回し蹴りが入った。

吹っ飛ばされた先にはボロボロのごみ箱。巻き込んで倒す。ぶち撒かれる中身。大量の腐った生ゴミと共に大所帯のゴキブリが溢れ出た。

「誰が遅いと?それはお前の事じゃないのか?」

第8話　「キ●ガイミリタリー始動」　9

鼻をつくような異臭が立ちこめる。ゴキブリは壁伝いに這って逃げていった。

「……この野郎…！！マジで殺す……」ダウトの臓腑の底で殺意という名の憎しみが蠢く。

それを見た男は再び銃を突きつけた。身を捩るダウト。放たれた弾丸は体を皮一枚で掠めていった。

その間に包丁で突く。だがそれも避けられた。

逆に再び放たれた弾丸に脇腹を持っていかれた。

焼かれるような鋭い痛みにダウトはたじろいだ。

次の瞬間、もう一つ痛みが走った。

肩にバタフライナイフがいつの間にか突き刺さっていた。

それとほぼ同時に顔に蹴りが入れられ、一気に押し退けられた。

よろめくダウト。

今度は自分の血の味が口の中に広がった。深々と突き刺さったバタフライナイフ。シャツが紅に染まっていく。銃創からも止めどなく血が溢れ出す。

第8話　「キ●ガイミリタリー始動」　１０

「糞垂れが……！」唇から血が零れた。痛みで無意識に息が荒ぐ。
「何で手前ぇここに来たんだ?!何で俺を殺しに来たんだ?!」
ダウトの息切れ切れの怒号に、男は恐ろしく冷静に答えた。「お前がそいつを殺したからだ」ダウトが殺した、死体になった青年を指さした。
「手前ェ……!!マフィアか何かか?!」
「いいや、違う」
「んじゃ、ヤるクチか……?!」
「まぁ、そうだな」男が素っ気無く答えた直後だった。
突然、血相を変えたダウトが鬼のように吠え、包丁を男に投げつけた。青年の血を吸った包丁は真っ赤な軌道を描いて男の顔面に向けて真っ直ぐ飛んでいく。

第8話　「キ●ガイミリタリー始動」　11

だが、それはすぐに跳ね返された。男は銃底で包丁を叩き落としたのだ。包丁が地面で鋭い音を立てて跳ね返る。

「足掻くな」

男がそう言って正面に向き直ると血塗れのダウトがこちらに飛び掛かってきていた。冷静沈着にその頭蓋に銃の照準を合わせる……が、出来ない。

腕が上がらない。

何故だ？

自問自答する、男。

腕が上がらないどころか足も動かなくなっている。

一体全体これは何故？

……胸に何か刺さっている……

あぁ……俺のバタフライナイフだ……！！

「お返しだ、バカ野郎」ダウトは笑ってバットを振りかぶった。

第8話　「キ●ガイミリタリー始動」　12

ダウトは包丁を投げた後、間髪入れずに自分の肩に刺さったナイフを引き抜き、投げたのだった。投げたナイフは見事に心臓を貫いていた。

次の瞬間、鈍い音が響くと共に男の意識がブツリと途絶えた。

男の額にダウトの振り降ろしたバットが直撃したのだ。

頭蓋がひび割れる音がした。出来た裂傷から血が奔流のように流れ出す。

意識を失った男はぎくしゃくに体を折り畳ませて倒れた。

そして、ダウトは安手の人形みたくなったその男を何度も何度もバットで撲打した。

バットが形を歪ませるまで何度も何度も殴り付けた。

やがて、男の頭は割られた西瓜みたくなった。原形を止めていない頭蓋の残骸に早くも蠅が集まりだした。

「…ハァ……ハァ……ふざけ……やがって……！！糞の分際で糞生意気な……！！」

激しい殴打を繰り返し、歪んでしまったバットを放り投げた。流石のダウトも、出血によってかなり消耗していた。

第8話　「キ●ガイミリタリー始動」　13

千鳥足になりながらも、立ち上がる。体がふらつく。血を失い過ぎた……。

畜生。この野郎……。

その時、ダウトの脳裏である一つの疑問が思い浮かんだ。

ー一果たしてこいつは一体何者だったんだ？

ダウトはしょっちゅう戦闘中に怪我をするが、一人の人間にここまで追い詰められたのは初めてだった。

自分を半殺しにした、男の素性を知りたいのだ。

だが、どうやって知るのだ？

死体となった男はもう口を利けない。

ダウトは男の死体の衣服を漁り始めた。

だが、何もなかった。運転免許、携帯電話、その他一切の物を男は所持していなかった。

残るは胸に刺さったバタフライ・ナイフ。この街ではどこにでも売っている、ごく一般のものだった。当然、それだけでは何も情報は得られない。

財布とナイフ。所持品はこれだけだった。

……いや、もうひとつある……。

銃だ。

……。

ああ、何故こんな簡単な物にさっさと気付かなかったのだろう……。

死体に握られていたその銃は紛れのない、軍用ピストルだった。

第8話　「キ●ガイミリタリー始動」　ブロンズｖｓクロア（前書き）

さぁ、第七話、あの後何があったのか……？
今、謎が解き明かされる！！

第8話　「キ●ガイミリタリー始動」　ブロンズｖｓクロア

変態！！変態！！
気持ちがいつの間にか声になっていた。
「変態！！変態！！」
近寄ってくるクロアにありったけの変態コールを浴びせかける。
「変態！！変態！！」
すると、クロアは身を捩れさせ、言った。「……嬉しい…♪」
この　変　態　！　！　！
あぁ、この人はダメだ。僕を確実にヤりに来ている！！
甘酸っぱい女の匂いが徐々に近づく。
何か、武器！！武器！！固くて長いもの！！チン●？いや、そういうのじゃなくて！！もっと敵の撃退に使えるようなモノだよ！！
あぁ、もう！！これでいいや！！（とっさにナイトテーブルにあったモノを掴む）うおぉぉお！！

ブロンズ　の　こうげき
クロア　は　たおれた！

ぱっぱらー。

ふぅ。
よかった。
何とか童貞を守る事が出来たぞ。
……。
ところで僕、何で殴ったんだろう…？
……。
……。
あ、これって女の子が自分の●に突っ込んで遊ぶ……いわゆる「

ディルドー」って奴じゃ……。

……。

はずかぴー！！

第9話　「入院するキ●ガイと溜まるリビドー」　1

「だァから、この街に軍が来てるんだっつーの！！このバカ！！」

完治するまでの2週間、街の中央に位置する聖ロハネ・ブリッツ病院という病院に閉じこめられる羽目になったダウト。動けない鬱憤で声が荒ぐ。見舞いにはブロンズとクロアが来ている。もうすぐ昼時なのに、リカルドとアリスは帰って来ないどころか連絡も取れない。一体どうしたのだろうか？

「だぁーからわかってるよ厨二。傷口開くよ？」と、クロア。

病室は個室になっていた。横たわって点滴を打つダウトのベッドをクロアとブロンズが挟んでいた。

「るせぇぇ、バカ！！痛っ！つっ！」

「ホラ、言わんこっちゃない……」クロアが溜息をつく。「早く動けるようになりたいんだったら静かにしないと……で、何？」

「このバカ、何回言わせんだよ……、クソ軍人が俺を襲ってきたんだっての……。」眉間に皺を寄せる。「有り得ねーかも知れねーが、ガチだ。」

「……確かに有り得ないねぇ……」

その時、「え、それどういう意味？」とブロンズ。街に関しては全くの門外漢である彼は、ダウトとクロア、二人の会話の意味がさっぱり解らなかった。

第9話　「入院するキ●ガイと溜まるリビドー」　2

「…まぁ、あれだ」すると、ダウトが説明を始めた。「この街には軍人は入れねぇようになってんだよ。あの糞豚野郎のお陰でな。」

糞豚野郎……市長さんの事か。

「それなのに、そいつが狩場に現れて俺をこんなザマにしやがったんだよ」

「違反したとかじゃないの？」ブロンズは聞いた。

「いや、違うと思う。糞豚の賄賂の力っていうのはハンパじゃねぇからな……」

「何でだろうねぇ…」首を傾げるクロア。「……もしかして元軍人だとか…？」

「そうですよ、やっぱりあなたは勘が良いですね」突如、可愛らしい少女の声が聞こえた。皆、声のした方へ注目する。

いつの間にか病室のドアが開いていた。その下にアリスが立っていた。

「どうやらその人イラク戦争の一部隊の人のようです」

第9話　「入院するキ●ガイと溜まるリビドー」　3

「ア、アリスちゃん！！」と、ブロンズ。「今までどこ行ってたの？僕心配だったんだよ…」

「先程言ってた連中を潰して参りました、サー！！」

は……？

「一個小隊を皆殺しにして参りました、サー！！」

「キャーー！！」

「アサルトで全員銃殺して参りました、サー！！」

「キャーー！！」

ごめん。僕うるさかったね。ホントごめんね。お詫びに後の話の事も含めて今の話を要約するよ。大体に。

今日の朝四時に起きたアリスちゃんはあらかじめ前日に探しておいた敵と、今までずっと戦っていたんだってさ。その時一緒に戦ってたアフロ様は未だに戦闘中とのこと……。

そしてその敵というのが元軍人の人達であって、イラク戦争の時の遊撃部隊だったとか……。

第9話　「入院するキ●ガイと溜まるリビドー」　4

その遊撃部隊は「死神の機雷」と称され、数々の激戦地に赴いて沢山の戦果をあげていたそうな。だけど、その部隊には裏があって、兵の全員が覚醒剤の常習犯らしいんだ。どうやらその部隊のリーダーが、任務に大量の覚醒剤を持って行って、部下に振る舞ってたらしい。そのリーダーの名前はハウエル。元大尉だった。

あー、しゃべりすぎて舌が乾いた……。

僕の解説はここまで！

「つまり……」クロアは神妙な顔をして言った。「ヤク中のそいつらはアタシらの商品を奪おうとして街に来たっていう事だよね？」

「まぁ、そういうことですね」と、アリス。「でも百戦錬磨のダウトさんでさえこのザマです。警戒しないと。」

「うっせぇ、ザマ言うな。バカ。アサルトで遠くからチマチマ撃つような奴に格闘戦のスリルがわかんのか？楽しいぜぇ？！」

するとアリスはにこりと満面の笑みを浮かべた。「解らないし、解りたくもないです」

第9話　「入院するキ●ガイと溜まるリビドー」　5

「あー、しんど。」ここで、リカルドが部屋に入ってきた。ドアをガラガラと開けると、フラフラと千鳥足で空いた椅子を探し、よっこらせと座った。「アイツら、マジでヤバかった……アフロがなかったら死んでたぜ……」

リカルドのアフロは防弾製になっているらしい。

「つーわけでお前等。次アイツ等と戦る時ゃ必ずアフロを装着しろ」

「「「は？」」」偶然にもブロンズ、クロア、ダウト、アリスの四人の声が重なった。

閑話休題。

「さて、どうやってアイツ等ぶち殺すよ？」クロアの言葉でようやく話が本題へ進む。

「まぁ、あれですね。正面から叩き潰すのは相当骨が折れますね」

「面倒臭ぇ、皆で包丁とバット持って突っ込……」

「黙れ、ボケナス。」と、リカルド。「瞬殺で蜂の巣にされてぇのか？せめてアフロは装着し……」

「アフロネタはもういいです」

第9話　「入院するキ●ガイと溜まるリビドー」　6

「というか白兵戦は論外です。自殺行為です。あーお薬飲みた…」
「止めて、アリスちゃん。」ブロンズが割って入った。「病院の人が困るよ?ところでさ、なんで格闘はダメなの?」
「……相手は『元』がついても一応軍隊。格闘術はみっちりやってた筈だって事。」ブロンズの問いにはアリスの代わりにクロアが答えた。「だから普通の格闘は通用しないと思っておいた方がいいね」
「そうなんだ……」
「まぁ、俺は勝ったけどね」と、ダウト。ムカつく程のどや顔で。
「アンタ、ズタボロじゃないのさ」
「うっせぇ、バカ」
「黙ってよ、厨二」

「はーい、おまえ等スリッパ投げるぞ~?」
リカルドがスリッパを構えると場の空気が一気に静まり返った。

第9話　「入院するキ●ガイと溜まるリビドー」　7

ダウトとクロアの表情が凍り付いた中、リカルドは続けた。「とりあえず、だ。多分ハウエルの野郎はまだまだ兵を持っていると思う。射撃で一人ずつシラミ潰しに殺っていくのも手だが、時間がかかる……。そこでどうだ」

――Ｍｒ．Ｊに協力して貰わねぇか？

「きっと最高のパーティになると思うぜ？」

発破屋Ｍｒ．Ｊ。依頼者が持ってきた爆弾をニトロ等で違法改造する、エンズ派行き付けの改造屋である。手榴弾から地雷、さらにはロケット砲の弾頭なども改造対象として取り扱っている。因みに店主であるＭｒ．Ｊの本当の名は彼の肉親か親しい縁の者にしか分からない。無論、エンズ派の者は皆、彼の名の一切を知らない。

第9話　「入院するキ●ガイと溜まるリビドー」　番外

四人がＭｒ．Ｊの元へ向かい、一人病室に取り残されたダウト。
途端空気が静まり返る。

ダウトは退屈である。
大好きな包丁を研ぐことも出来なければ、幻想と戦うことも叶わない。
あぁ、暇だ。
あぁ、暇だ。
何か面白いことねぇかな、と何の気無しに辺りを見回してみる。

すると、クロアが座っていた丸椅子の上に何やら赤いリボンと白い紙で梱包された箱が……。
あぁ……見舞いね。
アイツいいとこあんじゃねぇか……。
早速その箱を手に取り、梱包を乱暴に引き剥がす。
果たして箱から出てきたのは、二、三冊の本だった。
ー一成る程。これで暇を潰せと。
よし、じゃあ最初何から読むか……。
えーと。
「スカトロ専！！　脱糞編」
「マダムのひとりアソビ」
「ＳＭ調教　生ハメ拷問」
……。
……あの変態いぃぃぃ！！
しかもよりにもよって全部アブノーマル系！？
ちょっとだけ覗く。

悶絶。
嘔吐。
こうしてクロアの見舞いは17歳のダウトに強烈なトラウマを植え付けたのだった……。

第１０話　「タバコキ●ガイは爆弾狂」　１

ねぇ、これ留守かなぁ？
僕たち今Ｍｒ．Ｊさんの店の前に来てるんだけどさ。
いくらノックをしても、いくらチャイムを押しても、いくら叫んでも、店の扉が開かないんだよ……。
１０分も粘っているんだけどね、店主のＭｒ．Ｊさんが全く姿を見せないの。

「……クソ、Ｊ～、Ｊ～、Ｊ～、Ｍｒ．Ｊ～！」リカルドが叫びながらチャイムのボタンを高速連打する。しかし時間が経つにつれて、段々と連打が遅くなり、声も小さくなっていく。「じぇい～、じぇい～、ぜー、ぜー、こ、交代だビッチ……」息切れ切れのリカルドが扉から離れ、クロアに催促をかける。
「え～、面倒くさ……」眉を顰め、嫌がるクロア。面倒な事は嫌いなのだ。「ヤク中、お願い」
クロアはアリスの方を向いた。すると、
「ほぇ～なんれすかぁ～はわわわわ」千鳥足のアリスがごみ箱を頭に被り、あさっての方向に向かってヨタヨタ歩いていた。
「……アンタ、いつの間に吸ったの…？」
「うにゃぁ、ごみ箱に理想卿ですぅ」
「もうアンタ、ダメだよ……ごみ箱が理想卿って…ゴキブリかい」

第１０話　「タバコキ●ガイは爆弾狂」　２

「じゃあさぁ……ロ・メ・オ♪やってぇ～」
「なっっ何を?!」
「アタシを」
「ぶぅぅっっ!!」赤面して吹くブロンズ。と同時に脳裏で蘇るトラウマ……。「なっ、ななな何を何を～～何を～～ッ!!」
「……冗談だよ」艶笑するクロア。「Ｍｒ．Ｊ呼んで来て」
胸を撫で降ろし、店の扉に向かうブロンズ。もうエッチな展開は懲り懲りだと心の中で密かに呟いた。

ブロンズは扉の前に立つと、まず最初にダメもとでドアノブを回してみる。しかし……。
……?
あれ?
開くぞ?この扉。
みんなうっかり屋さんだね。
こんな事にも気付かないなんて。
ガチャリ。
「ごめんくださ～い」僕は早速ドアを開けた。
だけど、それが地獄の幕上げとなってしまった……。

第１０話　「タバコキ●ガイは爆弾狂」　３

僕が扉を開けた瞬間、
「馬鹿、開けるなァ！！」
とアフロ様の声が。
「タバコの煙を吸ったら死ぬぞォ！！」

え？ちょっと何ソレ？
直後、店の中から出てきた大量の黒煙が２ｍを越える巨大な塊となって僕を襲った。

え？これタバコの煙？このドス黒いの？これ避けろと？
……無理でぇす。

遅かった。気付いた時既に僕は息を吸ってしまっていた。その黒煙を吸ってしまっていた。
……。
あれ？何だろう？とっても気分が悪い……
ぐはっ（吐血）。
バタリ。
ゲロゲロ（嘔吐）。

ん？今思い出したけどさぁ…
僕ホントに主人公だよね？
ホントだよね？

がくり。

ブロンズ　は　しんでしまった！

第１０話　「タバコキ●ガイは爆弾狂」　４

「ブロンズ……。すまん。言うの忘れてた……。」とリカルドが申し訳ないと言わんばかりの顔をして、言う。「Ｊの野郎は超鬼畜ヘビースモーカーなんだよ……」

店内からは未だに黒煙が外に向かって立ち昇っている。煙の量が半端ではなかった。まるで火事の様だった。しばらくすると、店内から一人の男が体を覆う煙を掻き分けて、ブロンズ達の居る外に出てきた。

タキシードにシルクハット、サングラス、とハードボイルドにキメた、猫背の男が現れた。しかし、その躯は折れそうな程華奢で、顎には無精髭を生やしていた。

コイツがＭｒ．Ｊ。「発破屋Ｊ」の店主である。彼のトレードマークはいつもくわえているタバコ。それだけ聞けばなんて事はないように思えるが、彼の場合その数が１０本になる。

サ●ジは１本。Ｊは１０本。

つまり、Ｊは超ヘビースモーカーなのだ。口一杯にタバコを頬張り、全身でタバコを感じようと、気持ちよさそうに吸っている。いくらタバコでも、ここまで来るとヤク中のアリスと同じレベル、いや同類と呼ぶにふさわしい。

第１０話　「タバコキ●ガイは爆弾狂」　５

「ヤー、ヤー、ヤー。ボーイズアンドガールズ、俺の店に何しに来たんだーい☆」

容姿がまずウザいが、通販のインチキ宣伝師の様なこの口調により、相乗効果でウザさに拍車が掛かる。

言い終えたＪは先ず、クロア達を差し置いて、ブロンズを指さした。「……ユー、そこのユー。血を吐いて倒れてるそこのユー。一体全体何があったんだい？」

「……おご…いが…あが……」しかし、タバコの煙で瀕死になったブロンズは口が利けなかった。

そこで、クロアが翻訳（？）する事に。

「この糞Ｆｕｃｋｅｒ．いつまで待たせんだ、尿道にディルドー突っ込むぞ、だってさ♪」

「おご…おご…（違うよ、の意）」

「豚にレイプされて死ね、だってさ♪」

「……ち…が…う……」

「このいんきんたむし野郎、だってさ♪」

「おい、ユー。ミーの事いんきんたむし、って言ったね？いんきんたむしって言った方がいんきんたむしなんだヨー、オーいんきんたむしって語感イイネ～☆……ところでいんきんたむしってなに？」

「チ●コの感染症の事ですぅ～～」因みに今言ったのはアリスだ。

「オー！いんきんたむしイズ　マイ　ゴッド！」

第１０話　「タバコキ●ガイは爆弾狂」　６

「やめんか、ボキャァァァァァァ！！」バキューンだらけの下ネタ合戦に痺れを切らしたリカルドが吠えた。電光石火の勢いで飛翔したスリッパがクロアとＭｒ．Ｊの頭を弾いた。

「色々と突っ込みたいのだが一つずつ言わせて貰う！ひとつ！！これはよい子が見る小説だ！！下ネタなんか使うな！！小さい子が見てたらどうすんだ！？ふたつ！！Ｊ、テメー初登場がこんなんでいいのか！？いきなり好感度が暴落するぞ！？みっつ、女の子がいんきんたむしとか言ったらいけないと思います。よっつ！！おめーら死ね。いつつ！！アリスは許す！！かわいいもん」

「「黙れインポ」」偶然にも、クロアとＪの声が重なった。

そして、静寂が響き渡った……。

第１０話　「タバコキ●ガイは爆弾狂」　７

Ｍｒ．Ｊとの依頼の交渉は必ず店の外で行われる。店の中がニコチン５０倍のタバコの副流煙に蹂躙されているからだ。ガスマスクをつけていない限り、店主であるＭｒ．Ｊ以外、誰も彼の店へ入る事が出来ない。

通常、Ｊに会うには店から外に呼び出さなければならないのだが、ブロンズは直接店の中に入ろうとした……。

結果、ブロンズ　は　しんでしまった！

嘘です。主人公がこんな簡単に死んではいけません。

リカルドが神妙な顔をして交渉に出た。

「早速なんだが、Ｊ。」

「おマエ、アフロでっかくなったネ～」

「うっせぇ。お前のお手製手榴弾を１５０頼む。あと、クレイモアを３０。二日で出来るか？」

「オッケーホッケー大丈夫。……＄８０００だネ。何？戦争でも起こすの？」

「おお。死に損ないの軍人共を八つ裂きにしに行くんだよ」

第１０話　「タバコキ●ガイは爆弾狂」　8

「それって……ハウエルなんたらが連れてるやつかな？」
「……心当たりでもあんのか？」
「あるともさァ」Ｊは口一杯のタバコを吐き捨て、革靴の踵でそれらの火を消した。彼の口臭は途轍もなくヤニ臭かった。「あれだろ？お前らの粉目当てに動いてるボーイズだろ？」
粉……無論、アリスが捌いている覚醒剤の事だ。
「やっぱりな。俺ん所じゃかなりの量のヤクが動いてるからな……」鼻が曲がりそうな悪臭（口臭）に必死に耐えるリカルド。「自分等の首を狙う奴等は早めにバラした方がいい。……Ｊ。頼むぜ。」
「ラジャ～。毎度～♪」
「んじゃ、二日後また来るわ。そぅら、ビッチ、ブロンズ、アリスちゃん。帰るぞ。」

第１０話　「タバコキ●ガイは爆弾狂」　病院満喫ダウト編

なぁ、あれだよな。

ナース服って萌えだよな？

ナースさん最高。

さっきなんかなァ、俺が仰向けになって人殺しの妄想してたらさぁ

　ダウト君、瞳孔開いてるよ♪

だってさ。

んで、スレイヤーズのナンバーを口ずさんでたらさぁ

　ダウト君、いいデスボイス♪

だってさ。

超カワイくね？

そんなこんなで俺、ナースさんを見る度に、

心臓を斬り裂かれて胸から血のザクロと肉片をぶちまけた挙げ句、
大量の胃液と共に吐血を繰り返す

くらいドキドキするんだ。

あぁ、誰か。俺のドキドキを止めてくれ。

……俺、病院好きだわ。

第11話　「暗躍するキ●ガイ達」　1

荒廃。
ハウエル元大尉が率いる軍、「死神の機雷」にはこの単語がよく似合う。
軍の者は皆、薬の快楽に溺れ、薬の為に戦い、薬の為に集った者達だ。
ロハネの片隅にある軍のアジト、廃工場。
そこは内装が錆びて鉄臭く、薄暗い、陰惨な工場だった。
その工場で、男達の叫び声が轟く。

「三度の飯より～！！」
「「ヤクが好きィィィィ～！！」」
頭領ハウエル元大尉の後に三十人強の彼の部下達が続く。
「弘法はァ～！！」
「「ヤクを選ばずゥウウウ！！」」
「河童のォ～！！」
「「ヤク流れェェェ！！」」

歓喜の声を上げ銃器を振り上げる男達の前にハウエルが立つ。

第１１話　「暗躍するキ●ガイ達」　１（後書き）

解説

「弘法はヤクを選ばず」
　ベテランの坊さんはどんな薬でもガンギマリできます

「河童のヤク流れ」
　河童が薬に溺れていきま～す。どんぶらこ～どんぶらこ～♪
　アッーー！！

第11話　「暗躍するキ●ガイ達」　2

ハウエル元大尉……。

顔に大きな斬傷が走っている、二枚目の大男だ。その男は元軍人ということもあり、かなりの筋肉質で、着ている軍服の上からでも筋肉が盛り上がりが分かるほどだ。

ハウエルは長い金髪をたなびかせ、咳払いを一つすると、言った。

「今夜、エンズ派の教会に夜襲をかける。」

ハウエルを活目する兵達。

「そこには覚醒剤……つまりは俺達の飯が大量に保管されているらしい。それを教会ごと奪うんだ。そしたら…どうなると思う?入ってくる覚醒剤を適当に捌くだけで大金持ちになれるんだぜ?そしたら毎日の様に薬れるんだぜ?」

狂喜する兵達。声を張り上げ、大音声で吠える。

「「覚醒剤!!覚醒剤!!覚醒剤!!」」

第１１話　「暗躍するキ●ガイ達」　３

そして、その夜。
１１月２２日、午後１１時。
エンズ・クライスト・チャーチ。
ダウトが居ない教会はやけに静かだった。
ブロンズ、クロア、アリスの３人は既に床に就いている。
誰も居ない薄暗い礼拝堂の祭壇の上でリカルドは独り、酒に顔を赤く染めていた。
「うぃッ。ひィっく。今日は流石に飲み過ぎたかな……ひぃっく。」
司教台には酒瓶が無造作に１２本転がされていた。
リカルドはこれを一人で平らげたのである。
「あー。頭が痛ぇ。ガンガン響いてくる……」
司教台の席から立つリカルド。自室へ繋がる廊下へと出ようとするが、足がふらつくのと、視界がぼやけるのとで上手く歩く事が出来ない。
という訳で。
開き直ってほふく前進で向かう事に。
のそり。のそり。
みみずのように床を這うアフロ。正面から見たら戦慄の画になるだろう。
正体不明の巨大な黒い球体（アフロ）がこちらへ向かってゆっくりとにじり寄ってくるのだ。

第11話　「暗躍するキ●ガイ達」　4

「頭痛ぇよぉ～、ガンガンするよぉ～、早く部屋に帰りてぇよぉ～」

頭痛は酷くなっていくばかりだ。

鈍い痛みが脳の内側からガンガンと響いてくるのだ。

ガンガンと。ガンガンと。

ガンガン。ガンガン。

ガンガンガンガンガンガンガンガンガン！！

……。

リカルドはこの音が銃声であることにようやく気付いた。

聖所の方を見る。

軍服を着た男達が教会机から自分に向かってマシンガンを撃っているではないか。

ーー間違いない。「死神の機雷」の野郎共だ。

弔い合戦に来たか。クソっ、早すぎるぜ。

その時、アフロにマシンガンの弾が被弾した。

弾は跳弾し、屈折した軌道は聖所の上のマリア像を捉えた。

煙をあげるアフロ。顔面蒼白なリカルド。

ーーこいつぁヤベぇ……！

さっきまでの酔いが一気に醒めてしまった。

第11話　「暗躍するキ●ガイ達」　5

懐にあるマグナムを出し、応戦する。
マグナムから打ち出されたグレネード弾の爆風が教会机を巻き上げる。
だが、弾幕の嵐は止まない。

ー一今思ったら、これ奇跡じゃん。ほふく前進してなかったら今頃俺は蜂の巣になってたじゃないか。

「糞ッ！！」
身の安全に挺するのが精一杯で迎撃どころじゃない。
一旦逃げた方が得策か？

とその時、

「何してるんですか？アフロさん」

アリスが奉献台の陰から、巨大なミニガンを担いで現れた。寝起きなのでパジャマを着ていた。
「ア、アリスちゃ……」
「黙って応戦してください！！」

第11話　「暗躍するキ●ガイ達」　6

アリスは叫ぶと同時にミニガンを撃ち始めた。
が、すぐに寸断された。
敵のマシンガンの弾がアリスの肩を捉えたのだ。
「いッッ……！」痛みに嗚咽を漏らし、尻餅をついてしまった。
「なッ……！大丈夫か！？」ほふくで駆け寄るリカルド。
「きゃあぁぁあ！！まっく●くろ助ぇぇ！！」
「違う、俺のアフロだ！！……じゃなくて！！傷はどうだ！？」
「へ…平気です……」
アリスの傷……。出血が収まれば大した傷ではなさそうだが……
これがロリコンアフロの怒りの火種となった。

ーー俺の可愛いアリスたんを傷つけやがってぇえぇえ！！

第11話　「暗躍するキ●ガイ達」　7

「おめーら全員ぶっ殺す!!」リカルドは吠えると、聖所に向かって思い切りスリッパをぶん投げた。
これまでにない全力投球だ。
怒りの炎で燃えたぎったスリッパの赤い軌道が教会机越しの一人の兵の顔面を捉えた。
するとその兵の首はねじ切られ宙を舞った。
間もなくして、跳ね返ったスリッパが二人目の兵の後頭部に直撃した。弾け散る頭蓋。跳ね返るスリッパ。
三人目。腕を肩ごと持っていった。
四人目。頭蓋骨を半分抉られた。

「……あれ?ちょっ、これマジで?」

自分が放ったスリッパの様を唖然と見るリカルド。

全くのまぐれらしい。

そうこう言ってる内に早、兵の十人近くが首狩りスリッパの餌食になっていた。

第11話　「暗躍するキ●ガイ達」　8

喚きながら退散していく兵達。その跡には屍がごろごろと転がっていた。
スリッパがリカルドの手元に帰ってきた。紅い血で塗れていた。

……。

「必殺！！ブーメランスリッパ！！」
「『必殺』じゃないですよ！！貴方、こんな凶器をクロアさんやダウトさん、その他諸々に投げてたんですかぁぁぁ！？」
「うぅぅぅ…こんなつもりじゃなかったんだい」
「そのスリッパ何で出来てるんですかぁぁ？！」
「……鉄☆」
「そんな事でどや顔しないで下さい！！ていうか、いい年した大人が☆マークなんかつけないで下さいッ！！」
「んじゃ●だ」
「下ネタですか」
「うん●」
「あぁ、貴方もういいです。おやすみなさい」

第11話　「暗躍するキ●ガイ達」　病院満喫ダウト編

おい。

おいおいおいおい。

幽霊出たぞコンチクショー。

さっき寝てたらさぁ。

急に部屋の扉が開いたのよ。

ナースさんが来たのかなぁ♪と思ってたらさぁ、

血塗れのおっさんだったのよ。

俺、発狂しながらバットや包丁ぶん回したが……

当たんねぇ、死なねぇ。

……怖ぇよぉぉぉ！！

愛しのナースさぁぁぁぁん！！！

……。

早く退院してぇよぉ……。

ぁぁぁぁ……。

あ、でも

ナースの幽霊だったらＷｅｌｃｏｍｅ！！

因みに、クロ姉の見舞いは千切って窓から捨ててやりました。

今思えば……大丈夫だったんだろうか……？

他人に迷惑してなかっただろうか……？

いや、「空からエロ本が降って来たぁ～」って通りすがりの中坊が喜ぶだろ。

何等問題無し！！

登場キ●ガイ紹介　ダウト（前書き）

糞絵は後、書かせていただきます！

登場キ●ガイ紹介　ダウト

ダウト　　Ｄｏｕｂｔ
主な二つ名　溝の草刈機

年齢　１７歳。
血液型　ＡＢ型。
趣味　ネズミ狩り、オヤジ狩り、ナース
好きなもの　ジャパニーズアニメ、ナース

キリスト教エンズ派の信者。
エモノはバットと包丁。
殺人狂。また、厨二病でもある。
いじられ役かもしれない。
ナース萌えに目覚めてしまう。
丸縁サングラスが気に入っている。
兄にしたら確実にマズい人。

三日とかからず警察の的になる。

無論、自分が。

戦闘力　★★★★★
殺人テク　★★★★★★
厨二　★★★★★★★★
読者人気度　★★★★☆
作者寵愛度　★★★★☆

キャラテーマソング：Ｓｌａｙｅｒ　「Ｓｎｕｆｆ」

第1回　わひゃわひゃキャラコン　結果発表！！（前書き）

キャラコンの結果発表～！！
なにやらダウトが叫んでます。

第1回　わひゃわひゃキャラコン　結果発表！！

ダウト「キャラコンドキドキ結果発表ゥゥゥ！！まず、俺っちがなんと1位ィ！！みんな拍手ぅ～」
クロア「アンタうっさい。しかも嘘ついて。アタシが1位。アンタ3位」
ダウト「黙れバカ！！いつか追い越してやる！！（泣）」
クロア「あっそ、ふ～ん。あ、2位はアタシのロメオじゃん」
ブロンズ「ロメオじゃないって……え、僕が2位？何も活躍してないのに……」
クロア「まぁ、それが主人公の特権ってヤツ。んじゃ次、4位…市長？！」
市長「HAーHAーHAー！！呼んだ金？」
ダウト「ふざけんなァ！！何でお前がこんな上位に！！」
市長「私のかました一発ギャグが効いたのだよ。あちょー！！」

……。

クロア「ハイ次～」
市長「酷いッ！！」
クロア「5位、インポ」
リカルド「酷いッ！！」
クロア「ハイ、ここまで～。6位以下のヤツはザマァ☆あと、投票してくれた人、こんな企画に乗ってくれてアリガト」
デイビッド「以上、愛以外を込めて！！」

アリス「うぇぇぇぇん、6位です…」

第1回　わひゃわひゃキャラコン　結果発表！！（後書き）

という訳で、

1位　クロア　　54pt
2位　ブロンズ　38pt
3位　ダウト　　33pt
4位　市長　　32pt
5位　リカルド　24pt
6位　アリス　　17pt
7位　Mr.J　　8pt
8位　ケビン神父　4pt
9位　リコリス
　デイビッド
　マイク　　0pt

となりました。
協力してくれた皆さん、有り難う御座いました。

第12話　「スリッパvsキ●ガイ共」　1

ー一次の日の夜……。「死神の機雷」アジトの廃工場。

「三度の飯より～！！」というハウエルの檄から始まる部隊全員で行うヤクヤクコールが終わる。

そして……。

「あのスリッパどこで売ってるんだぁぁぁぁ！！通販かしら！！お得な通販かしらぁ！？」

「「サー。大尉、オカマになっているであります。サー」」

激昂するハウエルに冷静に受け答える部下達。

「スリッパ一本で壊滅させられる部隊がどこにいるっていうんだ！？バカだろ！？絶対バカだろ！？そいつら！！」

「「サー。ここにいるであります。サー」」

「もういい！！今夜はあのアフロをさらうぞ！！スリッパを奪うんだ！！準備しろ！！」

「「サー。さらうなら女の子がいいであります。ハァハァ。サー」」

「うるせぇ！！おっさんでも我慢するんだ！！おまえ達！！」

第12話　「スリッパvsキ●ガイ共」　2

そして、夜。
11月24日、午前2時。時間が遅いので日付が変わってしまった。
部隊は5台のエルグランドで教会へ移動していた。
ハウエル達は三班に分かれて作戦を行った。
6人で構成されたA班は車から降りると、気づかれない遠間からへべれけアフロの動きを観察し、こっそりとその後を尾行けていた。
27名で構成されたB班は教会を取り囲むようにして待機。アフロが逃げた時、撃ち殺す為だ。
残りの一人、ハウエル元大尉は車内で待機。A班B班に無線で指示を出す。

ハウエルはピーナッツを摘んでいた。蜂蜜と砂糖でトッピングされた飛びきり旨いヤツだ。
「うは、旨ぇなぁ。やっぱこれなしじゃあ生きてけねぇよ」呟くハウエル。彼はこのピーナッツで覚醒剤の欲の抑制をしている。食べないと覚醒剤の禁断症状が起き、薬の過剰摂取で死んでしまうのだ。
しばらくすると、A班の無線機からノイズが走った。
通信だ。
ノイズが失せる。
「「こちらA班、こちらA班」」
「こちらハウエル、どうぞ」ピーナッツを噛み砕くと、甘く濃厚な薫りが口一杯に広がった。
「「アフロが自室と思しき部屋に入ったであります」」

第12話　「スリッパvsキ●ガイ共」　3

「おう、寝たと見たら捕まえろ」
「「夜這いですか？」」
「違ぇよ！」
強引に無線を切るハウエル。

……。
ピーナッツを摘む。
食べる。
うめぇ。

今度はB班の無線が鳴った。
「「こちらB班、こちらB班」」
「ハウエルだ、どうぞ」
「「暇であります」」
「黙れ！」
強引に無線を切るハウエル。

B班、外で待機だからつってもな……。
ピーナッツを摘む。
食べる。
うまうま。

A班の無線機を取る。
「こちらハウエル。応答しろ」
「「こちらA班であります。どうぞ」」
「アフロは寝た風か？」
「「いびきが凄いであります」」

「よし……んじゃあ俺がいいっつったら突入だ。わかったな」
「「はい。夜這いでありますね！」」
「違ぇよ！」
強引に無線を切るハウエル。
……最後、ヤツら妙にハイテンションだったな……、大丈夫か……？
ピーナッツを摘む。
食べる。
うまし。

第12話　「スリッパvsキ●ガイ共」　4

再びB班から無線が入った。
「「こちらB班、こちらB班」」
「ハウエルだ、どうぞ」
「「ヤクが欲しいであります」」
「黙ってろ！」
無線機を床に叩きつけるハウエル。

……皆我慢してるんだぞ……。
俺はピーナッツがあるから大丈夫だけど。
ピーナッツを摘む。
食べる。
馬。

……。

さて……そろそろ突入の頃合か……？
スリッパ強奪、アフロ誘拐。
アフロを殺害でなく誘拐としたのは、教会をぶん盗った後、そこでの覚醒剤の捌き方を聞き出すためだ。用が済んだら殺す。
指を組んで、鳴らす。
準備は万端だ。
A班の無線機を手にする。
しかしその直後、鼓膜を裂かんばかりの凄まじい重低音が鳴り響いた。

ー何が起こった……！？

車のドアを開け、爆発の起こった教会の様を確認する。

第12話　「スリッパvsキ●ガイ共」　5

紅い火炎がロハネの喧噪に満ちた夜空を焦がし、夜闇が立ち上る黒煙を吸い込んでいた。
教会は外壁が抉り出され、A班の者達の炭となった焼死体が教会の庭に転がっているのを、B班の数名が目を丸くして見ていた。

ー一畜生!!悪い被害妄想でもしてるのか、俺は?!

自分の顔をぴしゃりと打つ。
しかし、見る光景は変わらない。
紛れもない現実だ……!

ー一糞垂れがぁぁぁあぁ!!

ハウエルは車に戻り、AB双方の無線機を手に取った。

「ハウエルだ、応答しろ!!」
「「こ……こちらB班であります…どうぞ!」」
B班の奴等は突然の爆発に多少取り乱したようだった。
いや、そんな事より……。
A班の応答がない……!
爆発で無線機が破壊されたか、それとも……
……!!
ハウエルはB班の無線機のマイクに向かって思い切り叫んだ。
「還って来い、お前達!!」

第12話　「スリッパvsキ●ガイ共」　6

「「作戦は……スリッパはどうするのでありますか?!」」
「……いいから戻ってこい!!」
「「サー、イエス、サー!!」」
通信が切れる。
B班は無事還ってこられるのか……?
ハウエルはそう思いながらピーナッツをむさぼる。
そして煙草に火を点ける。
覚醒剤をくるめた特別仕様ではない、普通の煙草である。

ハウエル達は必死なのだ。
覚醒剤が手に入らず手元が枯渇している今、このチャンスをもぎ取らないと後に本当に覚醒剤が尽きて副作用で死んでしまう。非常用のピーナッツにも限界がある。
明日を生きるために、未来を生きるために、今、覚醒剤が必要なのだ。

しばらくすると、喧噪と共に大勢に人影が車に寄ってきた。
「「サー!お待たせであります、サー!」」ドアが開かれるとハウエルの見知った面子がずらりと並んでいた。
……無事、還って来れたか……。
ハウエルは束の間安堵し胸を撫で降ろすが、今から皆に悲しい知らせをしなければならない事で胸が詰まった。
「みんな、聞いてくれ……A班からの…通信が途絶えた……」

第12話　「スリッパvsキ●ガイ共」　7

「「……そうでありますか……残念であります」」感傷たっぷりに俯く兵達。

と、そこへ一人の男が教会の入り口から駆けて来た。飛び散る火の粉でその男の顔の輪郭がはっきりと浮かび上がる。

……A班のヤツだ!!

その手にはスリッパ。その男は一人になりながらも、スリッパ強奪という使命を完遂したのだった。

A班の男はすぐにB班の十九名の中に揉み苦茶にされた。労いだ。

そして歓声の中、男はハウエルに近付き、結果報告をした。

「サー!面目ありません!!……おまけにA班残りの五名を失ってしまったであります!!……サー!」男は満身創夷だった。爆風にやられたのだろう。

「いや、いい。お前一人還って来れただけでも良かった。その上スリッパも捕ってこれて上出来じゃあないか……ところで、あの爆発、何があったんだ……?」

「シルクハットに黒スーツを着た痩せ型の男が不意に背後から襲って来たであります」

「グレネードか何かでか?」

「その通りであります。手榴弾(グレネード)であります」

「そうか……でその後は?」

「窓を突き破り、逃走したであります」

第１２話　「スリッパｖｓキ●ガイ共」　８

「……よし」ハウエルは答えながらピーナッツを頬張った。「いいか、お前等。いまからあの教会に突入する」

「「なッ、何故でありますかッ？！」」ざわめく兵達。彼らが予想もしない事をハウエルは口にしたのである。

「向こうさん等は寝起きで迎え討つ準備が整ってないんだ、さらにあの悪魔のスリッパはない。しかも相手は四人そこらしか居ないと聞いた。大丈夫だ。やれる。それに、お前等も限界だろう？今晩で覚醒剤と女日照りからはサヨナラだ」

その直後、雄叫びを上げ、各々の銃器をぶん回し、奮い立つ兵達。ハウエルの言葉が彼らの心の琴線に触れたのだ。

「「覚醒剤！！覚醒剤！！覚醒剤！！」」

ハウエルも自らを奮起させる為、腹の底から叫んだ。「よっしゃあ、お前等！！突撃だ！！俺らの覚醒剤（あした）を勝ち取るんだ！！」

「「Ｕｕｕｕｕｕｕｒｙｙｙｙｙｙ！！！！！！！！」」

兵達とハウエルは吠えながら教会の入り口…大聖堂へと突っ込んでいった。

第12話　「スリッパｖｓキ●ガイ共」　9

大聖堂。
薄暗い視界にはまず、中央通路の両サイドにずたずたに並べられた教会机が入った。そこら中には銃痕が夜空に浮かぶ幾万の星の様に散りばめられていた。相当の大口径だ。
甘ったるい薫りと酒臭い匂いが混ざって嗅覚を刺激する。
覚醒剤はすぐそこだ、天国はすぐそこだ、とハウエルは自分に檄を入れた。
「ＧＯ.」ハウエルが囁くと、彼の後をついてきた兵達が少し屈んで先を進んでいった。
すると……
突如、女の声がした。
「やぁ、アンタらこんな時間に何しに来たのかい?」
ハウエルの先を行った兵達が目にしたのは、両手にウージーを引っ提げた黒髪の女だった。臍ピアス……ビッチか。
「一応ね、礼拝の時間って決まってるもんだからさぁ、アンタ達帰ってよ」両手のウージーを構え、にじり寄る女。「ねぇ、帰ってよ」
「どうするでありますか、大尉?」兵の一人が振り返ってハウエルに聞いた。
それに対し、ハウエルは不敵な笑みをこぼしながら言った。「当然殺れ」

第１２話　「スリッパｖｓキ●ガイ共」　１０

直後、銃弾が飛び交った。
女が左に飛び、ウージーを連射する。それとほぼ同時に兵達も各々の銃器を撃ち始めた。
女の銃弾はまず最寄りの一人の兵を捉えた。その兵は瞬く間に血祭りに上げられ、死んだ。
だがその一瞬後、女の左のウージーが兵の弾丸に吹っ飛ばされた。
女は一瞬動揺するが、すぐさま右のウージーを構え直す。
しかし、遅かった。
そのとき既に、兵達の後ろに居たハウエルが動いていた。
「Ｆｒｅｅｅｅｅｅｅｚｅ！！！！」ハウエルは兵士を制止したと同時に女の右腕に掴みかかった。
もつれ倒れ込む女とハウエル。
ハウエルは自分の体重で女を磔にすると、彼女の右手首を押し倒す。
そして、その右手にあるウージーの引き金を引いた。ウージーの弾は全て明後日の方向に飛んでいく。
やがて、弾が尽きた。弾倉が空になったのだ。
「お前は『多勢に無勢』っていう言葉知らねぇのか？バカ女」自分の股下でもがく女に愉悦の笑みを浮かべるハウエル。
「アタシの名前は『バカ女』じゃない……『クロア』だよ」

第１２話　「スリッパｖｓキ●ガイ共」　１１　エロ注意（前書き）

今回から数話、エロいシーンが続きます。
まぁ、でもここまで読み進めたあなたにはこれに耐えうる相当の免疫があると私は信じています。

ｂｙ
作者

第12話　「スリッパvsキ●ガイ共」　11　エロ注意

「OK．…クロア」
「「大尉……退がって下さい、弾が当たるであります」」ハウエルの背後でクロアに銃を向ける兵達。
「殺るのか？」
「「……い……いえ……」」
「だろ？」クロアの胸元を掴むハウエル。「男ならなぁ、ここは犯るべきところだろうがよォ！！」
クロアのスーツを引き裂いた。途端、彼女の膨らみとピンクの乳房が露わになった。
あられもない姿のクロアに劣情がそそり立った兵達は彼女を取り囲み始めた。
「……お前、いつもブラ着けてねぇのかよ？下はどうなんだ？」
「流石に濡れた時大変でしょ……ん……！」首筋を舌でなぞられ、一瞬喘ぐクロア。
「はン、このビッチが。気に入った」今度は乳首にかぶりつくハウエル。舌を乳輪に這わせ、吸い付く。
「…く……は……」クロアは身を捩り、悶える。
その間に兵達は自分達の膨らんだモノをズボンから引っ張りだし、クロアの顔に押しつけた。
するとクロアは紅潮した顔で艶笑し、「え、何？アンタ達もヤる気になったの？数が多いねぇ……全員ヤってあげる」兵達があてがってきたモツの中の二つを適当に選ぶと、両手に一つずつ持ち、シコり始めた。

第12話　「スリッパvsキ●ガイ共」　11　エロ注意（後書き）

やっぱりこういうシーンは描写が楽しい（苦笑）！！
これ見た友達が何言うかが楽しみです。
クレーム来なきゃいいけど。

第12話　「スリッパｖｓキ●ガイ共」　12　エロ注意

その間にハウエルはクロアの下腹部に手をやる。
穿いていたスラックスを降ろす。青のスキャンティ・パンツのクロッチに大きなシミが出来ていた。
「カハハハハハハ、もう濡れたのか？えぇ？！」
「…そりゃあこんだけ囲まれたら濡れもするでしょ？」
「あぁ、そうかい！！」パンツに手を掛け、一気にずり降ろすと、浅い茂みの中にサーモンピンクの花びらが見えた。そこからは蜜が滴っており、顔を近づけると、むせるような女の匂いにハウエルの股ぐらはいきり立った。
興奮で呼吸が荒くなる。強まっていく甘い匂いに合わせ、心臓の鼓動も早くなっていく。
茂みに指を滑らせると、瞬く間に花びらの中に埋もれていった。
甘い悲鳴が響いた。
埋もれた指に熱い蜜が絡んでいく。指で中を小突く度にクロアは喘いだ。
やがて適当なところでハウエルはそれを止めた。花びらから指を抜くと、指先に絡んでいた蜜が糸を引いた。手の平には粘ついた淫汁の海が波打っていた。

第12話　「スリッパvsキ●ガイ共」　13　エロ注意

「さぁて、今から19人の兵士に輪姦されるBABY.....気分はどうだ?」

「……最ッ高♪」その直後、ハウエルのイチモツがクロアを一気に貫いた。双方の脊髄に電流が走る。悦びの声。

「あッ……うぁ……!!…ぁ……アンタの…太いねぇ♪」

歓声を上げるクロアをハウエルが容赦なく突きまくる。

クロアは体を反り、蜜を垂らし、押し寄せる快感をむさぼっていく。

「ッあ!!あん!!あっ!!うぁ!!もっと!!激しくぅッ…!!」体位を変え、今度はクロア自らが腰を動かし始めた。艶やかに光る接合部が腰の振りに合わせ見え隠れする。

振り乱される胸。すっかり乳首が固くなっていた。

ハウエルが悶えるクロアの陰核を弄る。

襲って来た余りの快感にクロアは思わずハウエルの腹に手をついた。それでも彼女は腰を振るのを止めない。派手な湿潤音が接合部から鳴り響く。

「……セックスって…!ホントっ……最高!!」めくるめく快感によがり狂うクロア。最早、奉仕をしていた二人の兵の事も忘れている。

第12話　「スリッパvsキ●ガイ共」　14　エロ注意

「……あッああ……イキそう……！！イくっ！！イくゥ……ッ！！あぁあああっ！！」

ハウエルの体に絡みつき、クロアはついに絶頂を迎える。体が一瞬痙攣し、子宮口から排出される甘い蜜。同時にクロアの中に注ぎ込まれるハウエルの子種……。絶頂の余韻に恍惚と浸りながらハウエルの横に崩れ落ちる。

すると18人全ての兵の子種がクロアの体目掛けて飛んで来た。ハウエルとの様を見て我慢できなくなった兵達が今までマスをかいていたのだった。

「かは……かははは……！！お前最高だ……！！」果てたハウエル。肩を上下させながら豪快に笑った。

「…どうも…」胸元に付着した精を指で絡め取り、味わった。「臭い……アンタ何日も溜めて来たみたいだね……」

そして、全身精まみれになったクロアはハウエルを視界の端に置き、自分を取り囲む兵達に目を向けた。濡れた股を開け、痙攣している花びらを自ら広げて見せた。

「……ねぇ、アンタ達……早くアタシの中に熱い精子吐き出してよ……もっとイかせて……」

花びらの奥からトクトクと溢れ出す精と蜜のミックスジュース。妖しく光り、痛い程に充血する陰核。

完全に悩殺された兵達がクロアになだれ込む。

第１２話　「スリッパｖｓキ●ガイ共」　１５　エロ注意

群がる男の中で踊り狂う裸体、飛び散る様々な液体、矯声。皆、甘い快楽の渦の中に溶けていった。
そんな中、仰向けのままのハウエルは蒙鑞とした意識で兵達の様を見ていた。

カハハ……いい女（にく）だ。

兵達に輪姦されているクロアにハウエルの股ぐらが脈を打った。
彼女はもう八回も犯されただろう……。そう考えたら臓腑の底から劣情が沸きだして来るのがたまらなくなったのだ。

もう一度、アイツの中へ……。コイツを突き立てて……。

兵達の輪に入ろうと仰向けから立ち上がるハウエル。
しかし次の瞬間、予期せぬ事態になった。
立ち上がれない。
明らかにおかしい。
腰に力が入らないのだ。
さっきの騎乗位で腰が砕けた……？
有り得ない。
畜生、何が原因だ……？！

第12話　「スリッパvsキ●ガイ共」　16　エロ注意

辺りを見回してみる。だが、何の変哲もない。
ただ少し甘い匂いが鼻につくだけだ。
アロマキャンドルだろうか……？曇っていく思考。

あぁ糞、頭がぼやけてきやがった。

……頭？

ちょっと待て。

まさか……？

「あはは、アンタ馬鹿だねぇ。ようやく気が付いた？」兵に突き刺されながら踊っていたクロアが突然ハウエルに向かって嘲笑した。腰の振りを止める。

ハウエルは悟った。
媚薬だ。俺達が来る前に媚薬の気体が散布されてあったんだ。
俺達はハメたんじゃない、ハメられたんだーー

「皆、今すぐ逃げるぞ！！撤退だ！！」
「カモン、アリス！！」
ハウエルとクロアの声が重なった。
その直後。
大轟音と共に一台の装甲車が大聖堂の壁を突き抜け、ハウエル達の前に現れた。

第１２話　「スリッパｖｓキ●ガイ共」　１７

一瞬後、装甲車内蔵の機関銃が兵達を砕き始めた。
爆散する臓器。四散する肉片。肉林の世界が一瞬にして血の修羅場と化した。
「隠れろ！！教会机を盾にしろ！！」ハウエルが叫ぶ。
だが、彼の号令は叶わなかった。
兵が皆、ハウエルと同じ状態になっていたのだ。腰が入らない。足が動かない。媚薬が彼らの肉欲以外の全てを奪い去ってしまったのだ。当然、理性もだ。理性を完全に失ってしまった輩は未だクロアに取り付き、満たされない肉欲をぶち撒けていた。しかしその輩は皆、その数秒後自らの肉塊をぶち撒ける事となった。理性が少しでも残っていた輩は、ほふくで教会机の陰に隠れた。
それを見たクロアは床に落ちていた軍用ショットガンを手に取った。彼女の裸体は精と血が入り交じった、訳の解らぬ生臭い液体に染め上げられていた。その液体が彼女の四肢を伝い、落ちた。
直後、ショットガンの砲声が鳴り響いた。すると、教会机に隠れていた一人の兵の顔がひしゃげ、目玉や脳髄を飛び散らせた。

第１２話　「スリッパｖｓキ●ガイ共」　１８（前書き）

今更だけどよ、キャラコンの結果出てるぜ。皆ちんチェック！！
さぁ、俺っちは何位かな～♪

ｂｙダウト

第１２話　「スリッパｖｓキ●ガイ共」　１８

「今度はアタシがアンタらを逝かせる時間だよ」コッキング。発砲。コッキング。発砲。辺りは血の海になった。

「糞がぁぁぁ！！」ハウエルが落ちていたＢＡＲを腰に溜め、クロアを撃つ。

瞬間、装甲車が前進し、クロアの盾となった。弾かれる弾。代わりに機関銃の弾丸がハウエルの右腕を貫いた。

「がぁぁあぁぁあ！！！」突如襲った殺人的な痛みに張り叫ぶハウエル。見ると、右腕の破片が辺りに散らばっていた。砕け散ったのだ。

「畜生！畜生！！畜生がぁぁあぁぁあッ！！！」痛みによる焦りがハウエルの足を動かした。弾丸の嵐の間を縫って、一心不乱に教会の外へ出る。足の自由が利くようになった僅かばかりの兵達もその後を追う。

外に出た途端、吹き付ける夜風。車に逃げ込め、と足に喝を入れて走り出す。

しかし足を踏み出した途端、吹き付ける熱風。地面を見ると、大量のクレイモアがそこら一帯を占めていた。今ので兵が二人爆死した。

無論、教会に突入した時にこんなものは無かった。

ハウエル達はクロアが時間稼ぎになっていたのかと今更気付く。

第１２話　「スリッパｖｓキ●ガイ共」　１９

後ろから装甲車が徐々に迫る。
どうしたらいい？
簡単な事だ。
「皆！！クレイモアを撃つんだ！！」ハウエルが号令を下す。
すると背後にいた二人の兵が撃ち始めた。部下が二人にまで減らされてしまったのだ。ハウエルの頭の中を「絶望」の二文字が巡る。
爆炎と爆煙が爆音と爆風と共にハウエルとその部下計三人に襲いかかる。
前方の全てのクレイモアを撃って誤爆させ、道を拓く。
出来た道を黒煙の中、突き進む。
地雷原の中腹に来るとようやく煙が晴れかかり、視界が明瞭になっていく。
だがその明瞭になった視界に真っ先に現れたのは、スリッパだった。
煙を掻き分けて飛んで来たスリッパがハウエルの右にいた兵の頭を刈り取った。ハウエルの頬に大量の返り血が降り懸かる。
煙と視界が完全に晴れた。ペンライトを前方に向ける。地雷原の向こうに男が居るのが見えた。
アフロ……リカルドだった。

第12話　「スリッパvsキ●ガイ共」　20

「持っているスリッパが一つだけな訳ねぇだろぅ」リカルドが自身の紅いマントを広げた。すると、マントの内側に悪魔のスリッパが何十足並べられている戦慄の光景が垣間見えた。

「うらぁあぁあぁあ！！！」ハウエルが撃つ。

「甘い！！」それに反応したリカルドは丁度『礼』をする様な形で前傾した。

直後、ハウエルの放った凶弾が全てアフロに弾かれた。

リカルドは『礼』をする事で自身の巨大なアフロで体を隠し、盾にしたのだ。

その間にハウエルの最後の部下が死んだ。ブーメランの要領で返ってきたスリッパがその心臓を貫いたのだ。

「チェックメイトだ、ハウエル元大尉」

「あぁあぁあぁあぁあぁあぁあ！！」大絶叫するハウエル。再び返ってきたスリッパが彼に迫る。

どすっ。

ロハネの漆黒の夜闇に鈍い音が響き渡った。

第１２話　「スリッパｖｓキ●ガイ共」　終戦　１

ハウエルが死んだ。部下諸共皆殺しだ。
エンズ派は見事、迫り来る『死神の機雷』を迎え討ったのだ。
戦争に勝ったのだ。
との訳なので……。

「祝勝会じゃぁぁぁあぁぁあぁ！！」大聖堂の司教台。顔を酒で真っ赤に染めたリカルドが景気良く叫んだ。

しかし、返事がない。
クロアとアリスが呆然とした顔で彼の顔を見つめていた。
「あ……あれ？どした？」
「……アタシ寝るよ。おやすみ」クロアが動揺するリカルドに背を向ける。「久しぶりに犯されまくったから疲れた……」
「良かったんじゃなかったのかよ？ビッチ」
「冷静に考えて。２１Ｐだよ２１Ｐ」クロアは眠たそうに生欠伸を一つすると、薄暗い祭壇の脇に消えていった。「流石のアタシでもイき死ぬんじゃないかって思ったよ……」

第１２話　「スリッパｖｓキ●ガイ共」　終戦　２

２１Ｐ……。半端じゃねぇ……！！
クロアの言い分に従って身震いするリカルド。
だが、あの時間稼ぎの策は彼女自身が提案したものだった。二十人もの数を相手にしなければならなくなったのが誤算だったが。

クロアが消え、今度はアリスに目を移す。
リカルドは何か言いかけたが……止めた。
アリスが立ったまま寝ていた。
しかし、瞼は閉じず、目玉だけをひん向き返したその寝顔はとてもとても恐ろしかった。
基本、彼女の就寝時間は午後九時。今は午前二時を裕に越している。
無理はないと言えばそうだが……
アリスをこのまま恐怖のオブジェとして放置するのは余りにも恐ろしすぎたので、起こして、部屋に帰って貰った。

そして、大聖堂に残ったのはリカルドとＭｒ．Ｊだけとなった。

第１２話　「スリッパｖｓキ●ガイ共」　終戦　３

「Ｊ。一杯どうだ？」ジョッキを掲げるリカルド。
「ワタシ、ワインしか飲めませ～ん☆」
「そうか……、お前には本当に感謝している。俺達の注文の品を予定よりも一日早く、しかも直送で持って来てくれた……。おかげで迎撃が上手くいった。ありがとう。だが……お前、室内でブツを爆破させるってどうゆうこった。おかげで廊下の壁に穴が開いた。この野郎。弁償しろ」
「か……勘弁してくれ、ｂｏｙ」
「しかもこんな夜遅くに……不法侵入罪で訴えるぞ！！」リカルドはＪの肩を掴み、力任せに揺さぶる。
「……あのアーミー達殺したんだからいいじゃないかＹＯ・・・」
「あんな四流野郎共は俺の手にかかりゃどうにでもなった！！」
「……帰りたいＹＯ・・・・・・」
「うるせぇ！！」

それから酔っぱらいリカルドのグダグダ説教が五時間延々と続けられた……（夜が明けました☆）

登場キ●ガイ紹介　リカルド

リカルド　Ｒｅｃａｒｄｏ

年齢　５２歳。
血液型　Ｏ型
好きなもの　アルコール

キリスト教エンズ派の神父。
エモノはマグナム。インポなのにマグナム。またはスリッパ。
アル中。常に酔っている。
前世はクジラ。
一分間、アフロで何回銃弾を跳ね返せるかの世界記録保持者。
スリッパ大好き。
もしお父さんだったらマズい人。

間違いなく奥さんが発狂する。

戦闘力　★★★★☆
酒　★★★★★★★★★
スリッパ　★★★★★★★★★
読者人気度　★★★☆☆
作者寵愛度　★★★☆☆

第13話　「キ●ガイ、覚醒す」　1

「死神の機雷」との戦争から二日……。
驚異の回復力でダウトが早期退院した。入院期間、最初の予定では二週間だったのだが、彼は三日で退院したのだ。

午後一時の昼時。ダウトを迎えに行ったリカルドが教会に帰ってきた。

「ただいまァ」とリカルドが気だるく言うと、
「ヒィーホァーー！！やっぱここの空気は最高だぜぇぇ！！」
彼の横にいたダウトが大きく息を吸い込んで、開口一番、いきなり叫んだ。
大聖堂ではブロンズが昼食のホットドッグを頬張っていた。突然の奇声に驚いた彼はそのホットドッグを慌てて床に落としてしまった。

「あぁ…ホットドッグが……」
ダウトに挨拶をしたのはそれから数秒後だった。
「……あ、た、退院おめでとう、ダウト君」
「いやぁはぁぁはは、ありがとう、お礼にお土産、これあげるよ」
憎らしい笑顔を振りまくダウトがニヤニヤしながらブロンズにのど飴を渡す。
「あの、僕、のど飴いらないんですけど、ホットドッグ欲しいんですけど」
「熱い（ホット）！！犬（ドッグ）！！」
「あっ、今から裏路地行かないでね」

自分の前に犬の丸焼きが転がり込んでくるのを予感したブロンズは冷静に答えた。

第13話　「キ●ガイ、覚醒す」　2

「うひゃわあ、ダウトォ、こんにちはですぅ」
ガンギマリ状態のアリスがよたよた壇上に現れた。
「おぅ、ガキ。元気にしてたかァ？」手を振るダウト。「土産取ってきたぞ、受け取れ」
のど飴を放り投げる。アリスが犬のようにそれに飛びつく。キャッチすると、美味しそうに飴を口の中で転がした。

しばらくすると、クロアが姿を現した。
「あっ、厨二」ダウトを見つけると、目を細めて言った。「アタシの見舞いはどうだった？」
「とてもおもしろかったです（棒読み）」ダウトは言い終わると、何かを思い出し、突然目の色を変えてクロアに責め寄った。「そうだ、馬鹿！！いや、クロ姉ェ！！お前には特別な土産があるんだった！！」
鼻息を荒くし、大きな紙袋をクロアに手渡す。
「中身、何？ディ●ドー？！バイブ？！ＡＶ？！ＡＶだよね？！」
クロアは、ぬいぐるみを前にした幼女の様に目を輝かせた。
「俺様からのプレゼントだ！！開けてみろィ！！」

第13話　「キ●ガイ、覚醒す」　3

「オッケー☆」クロアは渡された袋を開け、最寄りの教会机の上に中身をぶちまけた。
清潔感のある淡いピンク色の服に赤十字が描かれた小さい帽。さらにオマケに体温計……。

……果たして中身はナース服だった。

「……お前……何処でこんなモノを……？」リカルドが呆然と机上のそれらを見る。
「日本の『アキバ』ってトコだ。そこの限定品を取り寄せて貰ったのだ。つーわけでよ、クロ姉！！」ダウトが鼻の下を伸ばしての土下座。「コスプレお願いしやすッ！！」

一瞬の沈黙。木枯らしの風が入り口の大扉から舞い込んだ。

「ダウト……」
「クロ姉…？」クロアが土下座のダウトに近づく。
「ありがとッ！！アタシ、一回これ着てみたかったんだよねぇ！！」満面の笑みでダウトの頭をワシワシと撫でる。「早速だけど着替えていい？！」
「もちろん！！」

第13話　「キ●ガイ、覚醒す」　4

やぁ、お久し振りのブロンズだよ。
ルンルンのランランのクロアが着替える為に自室に戻ってから五分が経ったんだけど……ダウトの話に出てきた『アキバ』ってどんなところなんだろ。
あっ、そういやドイツのニュース番組で『アキバ』の特集やってたなぁ……。
道端で沢山の従者さんが通行人に頭下げてたなぁ……きっと高邁な貴族達が住む大古都なんだろうな。
あっ、クロアが帰ってきた。

「お待たせ、似合ってる？」壇上に現れたピンクの白衣のクロアが色っぽく腰を捩らせた。
白衣が彼女の腰の括れをそのままに描き出し、いつもより一層の色気を醸し出している。胸元もはだけたままだ。さらに、服の桃色が彼女の童顔によく合っており、少し小振りな赤十字帽が可愛らしかった。
そんな可憐な姿の彼女が赤十字帽を整えながら、壇上から聖所へと降りる。

途端、瞳孔の形がハートマークのダウトが飛びついた。
「うっはァ！きゃんわいィィ！！」
「アンタみたいな変態殺人鬼に言われても何も嬉しくない！！」
迫るダウトを突き返したクロア。ブロンズの方に目を移す。「どう？ロメオ」

第１３話　「キ●ガイ、覚醒す」　４（後書き）

あれ？なんでだろ。
前話のエロシーンより今回の方が書くの恥ずかしかった。

ｂｙ作者

第13話　「キ●ガイ、覚醒す」　5

「……あっはっははは……に、にあ……似合うんじゃ…ないかなぁ……」あっ、分かった。僕こういうの免疫無い。

なんていうか、体が拒絶反応を起こしてる……。

「ロメオ～♪」案の定、クロアは僕に体を擦り付けてきた。「本気でそろそろHしようよ……」

「こッ、こ……こ、ここ断る!!」意識してないのにどもってしまう。これがナース服の魔力か?あぁ、もうなんかヤだ!「僕なんか童貞のままでいいんだァァァァ!!」

僕は誘惑するクロアを突き飛ばした。

尻餅をつく。

「あぁッ…!!」クロアが悲鳴を上げた。

……。

「あ……はァ……う……!!」クロアの顔が次第に紅潮していき、まるで何かを堪えるように俯いた。息が上がる。身を捩る。

第13話　「キ●ガイ、覚醒す」　6

「ど……どうしたの……？」僕はクロアの顔を覗き込んだ。
「注……射機…が……！」クロアは俯いたまま、涙声で話す。
「刺さったの？！どこに？！すぐにお医者さんに診て貰わなきゃ！！」
「刺さって……ない……」
「はい？」
「挿入った……膣に……ぁ……！」

あれ？
もしかして僕、主人公史上最悪の暴挙を行いましたか？
っていうか、えぇえぇえぇえぇ……！？

「ハッハハハヒハヒハハァァ！！腹がぁ～！！腹がぁ～！！」抱腹絶倒するダウト。彼には、クロアが突き飛ばされた拍子に白衣のポケットから落ちた注射機に、彼女の股間が被さる一部始終が見えていた。「お前、馬～鹿！！ヒャハハハハァ！！」
そんなダウトを尻目に、クロアはゆっくりとその場から立った。

第13話　「キ●ガイ、覚醒す」　7

「注射機……抜けない……」
「はいいいいいいいいい!?」ねぇ、これって性犯罪なの?僕って性犯罪者になっちゃうの?!
「引っ張ってよ…」
「ヤだ」
すると、クロアがリカルドに目を移した。
「インポ…これどうしようか……?」
「頑張れ。キリスト様からの試練だ☆」リカルドは親指を立てた。
クロアは中指を立てた。
「ここはれすねぇ、オナぬーをしたらいかがれひょう?」と、よたよたアリス。「愛液が潤滑油にょ代わりになるハズれすぅ。うにゃ。」
「あぁ、そっか。んじゃあヤろうか」
「ここでするなよ」リカルドが制止を掛ける。
「え〜?!ここは読者にサービスしないといけないで……」
「黙れ!!お前なぁ、前回沢山えっちなシーンがあったが、今回もとなるとこの小説が完全にエロ小説になるぞ!!作者のアカウント消されても知らねぇからな!?」
「……ハイハイ」

第13話　「キ●ガイ、覚醒す」　8

渋々と自室に戻ったクロア。

それから二時間後……。

「抜けない～！！」ナース服のままのクロアが泣きながら壇上に現れた。

「え、何？」と、ブロンズ。聖所で昼寝の真っ最中だった。傍らにはニューヨークタイムズが無造作に広げられていた。そして彼女の姿を見た瞬間、目が醒めた。

うげぇっ、ナース服だ！！

「11回もオナってみたんだけど全然ダメだったんだよ～！！」クロアがブロンズに抱きついた。しかし、次の瞬間、彼女は突き飛ばされていた。

「嫌だぁぁ、僕は童貞の道を歩んでいくんだぁぁあぁあぁ！！」

突き飛ばされたクロアは為す術もなく尻餅をついてしまった。

「ひあァッ！？」襲った痛みに、悲鳴を上げた。「ひぅ……ぅ……！」

「ごっ、ごご、ごめん、クロア！！ナース服が僕には見苦しくって、つっ、つい……！」ブロンズはクロアの顔を覗いて、精一杯の謝罪をした。だが、彼女からは答えがなかった。口元から聞こえるのは喘ぎ声だけだ。

……え、まさか……？

果たしてブロンズの予想は的中した。

「……体温計が…アナルに……ん……挿入った……ぁ！」

はぁぁあぁぁあぁぁ！？

第13話　「キ●ガイ、覚醒す」　9

えっ、僕、主人公失格ですか。
ハイ。
えっ、「そのまま続けて」？
わかったよ……。

……。

えぇえぇえぇえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！？
なんで二度も刺さるの！？
おかしいよね？！
僕、作者に嫌われてるのかなぁ？！
あはははははっはっはっははは。

……。

こんなもんでよろしいですか？
あ、ハイ。ありがとうございます。

「ねぇ……」と、赤面するクロア。前回と全く同じ絵だ……。
「何？」
「そんなにアタシを苛めたいの？」
「ち、違うよ……」
「だったら徹底的に苛めてよ……例えばさぁ……」

――おくちミッフ●ィィィイィィィイ！！！！！

僕は思いっきりクロアの顔面を蹴り飛ばして、彼女を気絶させた。
んで、すぐさま逃走。

……。

確かに僕は主人公失格かもしれない。
でももう僕はね、なるべくえっちな事は聞き入れないようにって決めたから。
クロアファンの読者さん、ごめんなさい。

第13話　「キ●ガイ、覚醒す」　10

次の日……。

クロアはリカルドと共に、病院を訪れた。以前、ダウトが入院していた病院だ。

受付を済ませ、待つ事五分。名を呼ばれたクロアは後ろにリカルドを連れて診察室に入り、目の前に置いてあった丸椅子に腰かけた。

クロアが対峙したのはこの病院の主治医だった。清潔な白衣を着、顔面に無愛想なホッケーマスクを張り付け、大きな鉈を手に携えた巨漢の、シェイソン・ホーヒース医師だ。

シェイソンがクロアの前で威風堂々たる姿勢で座っていた。血の付いた鉈を眺めながら、猟奇的な匂いを醸し出しながら。

――殺される……！！

シェイソンにビビり、おののくクロア。トンデモない奴が来たと顔色が青ざめる。彼に近づかまいと懸命に丸椅子をジリジリと後ろへずらしていく。

しかし、次の瞬間。シェイソンの鉈がクロアの丸椅子の脚を捉えた。そして一気に彼の下へ引きずり戻された。

「あぁぁぁぁぁあ！！！」クロアの恐怖の絶叫が診察室に木霊した。

第１３話　「キ●ガイ、覚醒す」　１０（後書き）

＊注意＊

この物語は映画「１３日の金曜日」とは何の関係もありません。

ましてや、その中の殺人鬼、ジェイソン・ボーヒーズとも何の関係もありません。

第13話　「キ●ガイ、覚醒す」　11

「クロアさん」
「……え？」
「他の患者さんに迷惑です。お静かに」
「……は？」
「お静かに」
「……はい」ジェイソン・ボーヒーズクリソツ男の生真面目な態度に面食らったクロア。意識せずも、敬語になってしまった。
それを見たシェイソンは手に持った鉈を床に刺した。酷く甲高い金属音が鳴り響いた。「さて……貴女。膣口に注射器が刺さり、肛門に体温計が刺さったと？」
「はい」
「何をどうしたらこうなるんですか？ＳＭですか？」
「……はい……」本当のことを話せば面倒な事になるのは見え見えだったので、そのまま切り返す。
すると……。
「……それじゃあ手術をしましょう。膣と肛門を切除します」シェイソンはいきなり床に刺した鉈を引っこ抜いて、振り回し始めた。
「キャアアァァァァア！！！！」

第１３話　「キ●ガイ、覚醒す」　１２

丸椅子を倒し、診察室から逃げ去ろうとするが、シェイソンの鉈がそれを許さなかった。刃先を襟の後ろに引っ掛けられた。強引に引き寄せられる。

「じゃあ違うのにしますか？お手軽なのがありますよ」

「……はい」

「手術は簡単です。下半身を切除します」

「簡単だけども文句無く死ぬゥうぅうぅゥ！！」

「……じゃあ薬で処方しましょう。すぐに楽になりますよ」シェイソンのホッケーマスクがクロアの顔に近づいた。

「嫌な予感しかしないんだけど……」

「それではさようなら、次の患者さんが待ってます」

「ハァ？！診察は？！ねぇインポどうにかしてよ」

クロアはなんとか状況を打開させようと部屋の隅に座っていたリカルドの方を振り向いた。

……。

リカルドは気絶していた。

唇から泡を零し、白目をひん向いて、爛れるように座っていた。

当然、返事は無い。

第13話　「キ●ガイ、覚醒す」　13

「インポォォォォォォォ！！！」絶叫したが、案の定目覚めてはくれない。

そうこうしていると、突如、シェイソンの太い二本の腕がクロアの身体に巻きついた。

「ちょ……！！やめて……！！」抵抗しようともがくが、無駄だった。剛腕はびくともしなかった。それどころか、力が更に上乗せされていく。

「……か……ぁ……」苦しみから思わず、口から喘ぎ声が洩れた。

するとその時、クロアの口の中に二錠の黒い丸薬が放り込まれた。

「……！！」クロアはそれを飲み込んでしまった。途端、突如として意識が混濁し始めた。

「すぐに楽になりますよ」遠のく意識の中で、シェイソンの言葉だけが延々と脳裏に響き渡る……。

第１３話　「キ●ガイ、覚醒す」　１４

それから七時間後。
クロアは教会の教会机の上で目覚めた。夜闇で微かに霞む大聖堂には誰の影も認められなかった。
「……う……ん……」
起き上がったところで、ある違和感がなくなっている事に気づく。
試しに下腹部をまさぐってみる。

注射器と体温計がない！！

嬉しさにガッツポーズを決める。これで明日安心して男娼屋のところに行ける！！
ただ……
いまちょっと寂しい。
下の口が寂しい……。

――半日注射器を咥えっ放しだったアタシのお●●がち●こ欲しさに疼いてる！！

よし、ちょっとロメオを襲ってくるとしようかな。

そう思ったクロアは、司祭壇に上がり、廊下へ続くドアを開けた。

第13話　「キ●ガイ、覚醒す」　15

「あ。」扉の向こうにいたのはブロンズだった。パジャマを着た彼は、何とも気の抜けた欠伸をかました。

運の良い事に、バッタリ、鉢合わせだ。

「ロメオ～♪」間髪入れず、クロアはブロンズに抱きついた。彼の胸に顔を埋めた。「アタシ、アンタとヤりたくて堪んないんだよぉ？だから一緒に朝まで……」

クロアの言葉を遮ったのは、ブロンズの、冷たい恐怖に満ち満ちた慄きの目だった。

「……クロア……君……まだナース服なの……！？」

後日、クロアはシェイソン医に尿道に挿入ったシャープペンシルを摘出するハメになりましたとさ。

登場キ●ガイ紹介　市長

マルク・チャップマン市長

年齢　　６３歳。
血液型　　Ａ型
好きなもの　金、秘書のリコリス

宗教の街、ロハネの市長。笑顔がとっても素敵です。
お金大好き。ものすごく大好き。
得意ネタは「あちょーー！！」。この一発ギャグで多くの読者の心を掴んだ。
リコリスたん大好き。お金の次に大事。本妻？んなもんほっとけ。
クロアが認める程の浮気癖あり。
もしこの人がおじいちゃんだったら酷い。

孫に一銭もやらない糞守銭奴。いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！

戦闘力　★☆☆☆☆
金　★★★★★★★★★★
リコリス愛　★★★★★★★★★★
読者人気度　★★★★☆
作者寵愛度　★★★★★

キャラテーマソング；「ゴッドファーザーのテーマ」

第１４話　「肥え太るキ●ガイ」　１（前書き）

やった～！！
この小説あともうちょっとで終わるぞ～！！

あとたったの６５００話！！
うぉうえええええぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！（嘔吐）

第１４話　「肥え太るキ●ガイ」　１

ブロンズの旅行記　～１１／２９～

やぁ、僕だよ。ブロンズだよ。
僕ねぇ、このロハネに来てからベッドの中で毎日、夜、日記を書いているんだ。偉いでしょ。
今日はこの小説を読んでくれている君たちにちょっと言いたい事があるんだ。

……その前に一つ。
今から僕が話す事は、全て真実だ。
全部本当の事であって、……決して嘘じゃない。
だから、みんな、信じて聞いて欲しいんだ。

……。

うん。よし、分かった。信じてくれるね。
それじゃあ話そうか。
十一月二十九日。
僕らに訪れた史上最悪の悪夢について……。

第１４話　「肥え太るキ●ガイ」　２

午前九時。
僕らは礼拝堂で朝食を摂っていた。
今日はクロアの手料理だった。
「はーい、えぶりばでー♪アタシの愛一杯の手料理だよ」
ルンルンのランラン、超ご機嫌のクロアが壇上に現れた。
僕らは適当な教会机を選んで食卓とし、それを囲んで今か今かと朝食が来るのを待っていた。
僕の隣に座っていたダウトは、昨日録ったアニメがあるんだ、早くしてくれ、とブツブツ唱えながらキッチンナイフとフォークを机に叩きつけていた。
ひょんなダウトは朝食を持ったクロアの姿を確認した途端、犬のような荒息を立てて「うおぁぁあぁぁ！！！待ちくたびれたぜ、早くしてくれ！！じゃないと俺、『魔法少女リ●●ルなのは』見れなくなっちまう！！あああぁぁあぁぁあ」と発狂し、彼女に飛びかかった。

第１４話　「肥え太るキ●ガイ」　３

「ちょっと、『いただきます』は！？」
「黙りんこぉぉぉぉ！！！！」ダウトはクロアから強引にプレートを奪うと、狂喜乱舞……狂ったように喜び、乱れ舞いながら自室へ帰って行った。
彼の姿が消えると、クロアは舌打ちし、ぼやいた。
「……アイツ、アニメと一緒に滅ばないかな……」
「さらっと酷い事言っちゃった！！」
「んじゃ、ハイ、ロメオ、ヤク中」今のでクロアは多少、気を損なったようだ。僕とアリスの前に、プレートを一つずつ並べると、最寄りの教会机の上に、ふて腐れたように寝転んだ。

第１４話　「肥え太るキ●ガイ」　４

僕はご機嫌斜めのクロアを視界の隅に置き、プレートのど真ん中の目玉焼きにナイフを入れた。切れ端をフォークで刺し、口の中に運ぶ。

「……クロア……おいしいよ……」

「……そう」

本日の天気は大荒れの模様です。

……ところで…、あれ？

アフロ様は？

正義の味方、アフロ様のお姿がお見えになれないのですが。

いつも朝はこの礼拝堂で豪快にお酒をあおっているんだけど……

「クロアさん、リカルドさんの姿が見られないんですが、どうしたのでしょうか」その数秒後、唸る僕に呼応するかのようにアリスが訊いた。

しかし、返ってくるのは、知らない、という気の無い返事だけ。

う〜〜ん。

まぁ、いいか。

しばらくしたら来るだろう。

寝坊か何かだろうね。

第１４話　「肥え太るキ●ガイ」　５

グラスに入った水を飲む。
「ごちそうさま」
「……。」
アリスは僕の横でまだ朝食と格闘していた。
席を立つ。

……。

ダウトに何か言ってやらなくちゃ。
廊下へ続く壇上の扉に向かいながら文句を考えていると、その扉からようやくリカルドが出てきた。
「おはよう」いつもより覇気の無い挨拶。
どうしたんだろう。取り敢えず、訊いてみた。
「いや、今朝起きてからずっと頭が痛いんだよな……」
「そうですか……」

なんか今日、厄日なのかな……。

……！！

天井を少し仰視した刹那、僕は戦慄した。

アフロ様のアフロが……

むくむくと大きくなっているではないか！！

「ぎゃあああぁぁぁぁぁぁああああ！！」
「なんだ、どうかしたのかブロンズ！！」
「アフロ、アフロ……あ…アフロ……アフロアフロ……アフロ！！！」
「アフロが何だってって……おわぁぁあぁぁあああぁぁぁ！！何じゃこりゃあぁぁぁぁああ！！」事をようやく知ったアフロ様も絶叫した。

アフロが膨らんでいる。現在進行形だ。
今、その大きさはいつもの二倍。
日本の遊園地、東京ディズニーシー入口の地球のモニュメント並みだ。

第１４話　「肥え太るキ●ガイ」　６

これには流石のクロアも飛び起きた。それを見たリカルドが彼女を疾呼する。

「糞ビッチ！！助けてくれぇエエえぇぇぇえ！！」

「ハァ！？無理でしょ！？これ！！……っていうかまだまだ大きくなってるし！！」

「イヤアぁあぁぁァァァあぁぁ！！ＪＥＥＥＥＳＵＵＵＵＳ！！」クロアの言い分通り、リカルドのアフロはますます肥大化していく。このままでは巨大化したアフロが教会の天井を突き破るのは時間の問題だ。

「ホントにこのままじゃヤバいよ！！どうすんのぉぉぉおお！？」

「知るかぁぁぁあぁぁぁぁ！！」

その時、クロアとリカルドの絶叫に割って入る声が聞こえた。

第１４話　「肥え太るキ●ガイ」　７

ーーぶっこわしてやりゃあいいんれすぅ～～

直後、砲銃の断続的な轟声と共に放たれた銃弾の嵐が膨張を続けるアフロを飲み込み始めた。

ブロンズが後ろを向くと、なんと、スーパーラリラリモードのアリスちゃんが魔法のステッキをフリフリとぶっ放しているではないか！！

「悪霊退散～～★わひゃひゃひゃひゃひゃひゃ」

ブロンズは絶句した。

リカルドは失禁した。

前文で笑った読者はよく考えてみてほしい。覚醒剤でラリった愛娘が自分の髪の毛を的に対戦車用ライフル（対戦車用ライフル）を乱射する構図を。失神しなかったリカルドは大健闘である。

だが健闘空しく、百数発の弾丸に晒されてなお、彼のアフロは全くの無傷だった。

第１４話　「肥え太るキ●ガイ」　８

「「「はアァァアぁァァアあぁぁ！？」」」四人の声が重なった。

クロアも試しにウージーを撃ってみるが、特に何の効果も得られなかった。「アンタのアフロ、何！？化け物！？化け物でしょ！？気持ち悪いっ！！」

「わあああぁぁあああぁぁあああぁ！！」アフロが天井のシャンデリアを粉々に砕いた。無数の破片がアフロを伝って落ち、割れる。

「ホントちょっとマジでヤバいって！！もう！！」クロアが携帯電話を手に取った。通話先は聖ロハネ・ブリッツ病院。１１９番して救急車を呼んでも、担架にあのアフロを運べるとは思えないし、ましてや車内に入れるのは絶対無理だ。

数回のコールの後、電話が繋がった。

――もしもし、こちら聖ロハネ・ブリッツ病院ですが。

「もしもし！！今すぐこっちに出張検診をお願い！！」

――落ち着いて下さい。そちらは何処ですか？

「エンズ・クライシスト・チャーチ！！お願い！！すぐ来て！！」

――……わかりました。少々お待ち下さい。

そうして電話が切れた直後、天井のステンドガラスが壮大な響きを立てて崩れ落ちた。

さぁ、時は一刻を争う。

病院からここまでは、車でざっと二十分。

それまで時間稼ぎだ！！

「すみません、検診に参りました」

早ぁぁぁあぁぁぁぁ！！

四人は礼拝堂の入口の大扉を注視した。

そこには鉈を携えた聖ロハネ・ブリッツ病院主治医、シェイソン・ホーヒースが立っていた。

悲鳴がこだました。

第１４話　「肥え太るキ●ガイ」　９

「おぉ、これはこれはクロアさんじゃないですか。昨日はどうも。膣と尿道と肛門は大丈夫ですか？」

「あ……あは……あはははは……」クロアの顔が引き攣る。トラウマが蘇る。

「ところで、患者さんは何処ですか？……あぁ、この方ですね」

シェイソンは天井高くそびえ立つアフロを見上げた後、リカルドに目を合わせた。「はは、貴方でしたか。昨日はどうも」

リカルドは返事を返そうとしたが、恐怖で声が出なかった。もう一度、失禁した。

「う～む。わかりました。手術をしましょう。手早に出来ますよ」

「おおっ」

「頭部を切除します」

「ぎゃあああああああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

「ハイ、仰向けになって～」

「無理です（物理的に）」

「怖がらないで結構ですよ？痛みは一瞬ですから」

「そうだけども！！」

第１４話　「肥え太るキ●ガイ」　１０

シェイソンはそれから一息置くと、いきなり鉈を振りかざした。
「ぎゃあああああああああ！！」
リカルドが大絶叫した。
すると突如、ＤＶＤデッキを掲げて発狂するダウトの姿が祭壇上に見えた。そしてダウトは何か喚き散らしながらリカルドのアフロに突っ込んできた。
「俺様のクソデッキがぶっ壊れやがったああァァァ！！ブルゥウウゥレイに買い替えやがれぇぇぇぇぇぇ！！」
アフロに向かってデッキを投げた！！
猛然と包丁を振り下ろす！！
ぽよんっっ。
ぽよんっっ。
跳ね返された。
跳ね返された。
バットで撲打！！
ぽよんっっ。
跳ね返された。

「Ｎｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏｏ！！」ダウトはムンクの「叫び」のように顔を歪ませた。

第１４話　「肥え太るキ●ガイ」　１１（前書き）

すみません。高校のテストが近いんで多分一週間ほど投稿できません。

第１４話　「肥え太るキ●ガイ」　１１

そして血を吐くように叫びながら地べたを這いまわっていると、不意に彼とシェイソンの目があった。

「あ……貴方は……！！」

「お……お前は……！！」

眼を見つめ合いながら、距離を近づける。

「友よぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」

抱き合うダウトとシェイソン。

その数秒後、シェイソンが言う。

「さあダウト君！！私の力を分けてあげよう！！」

「おおおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉおおおぉぉおお！！！みなぎるぜえええぇぇぇぇ！！！」

すると突如ダウトが雄たけびを上げ始める。前に屈み、力を溜める。禍々しいオーラがダウトの背後で稲光となる。大地が揺れる。大気が震える。

第１４話　「肥え太るキ●ガイ」　１２

「狂気１００倍！！」
血相を変えたダウトが再びアフロに向かって走り出した。包丁を天に振りかざす。
「暗犯血（アンパンチ）！！」

次の刹那。
アフロが一瞬にして真っ二つに斬られた。
断面はツルツルのテカテカ。リカルドのアフロはちょうど食卓で囲めそうなくらいの丸机のような形になってしまった。
黒いスライスアフロの残骸の先には、包丁を薙いだダウトの姿が。

「灰いいい灰いいいいい禁んんんんんんんんんんんん！！」
教会内に響き渡るリカルドの悲鳴。「俺のアフロがぁぁぁぁぁぁあああああああああああ！！」
残骸の前に跪いた。

第１４話　「肥え太るキ●ガイ」　１３

そんなリカルドを尻目に、ダウトはシェイソンのところに歩み寄った。

「ヤー、ヤー、ヤー！シェイソン！！元気にしてたか！？」

「ハイ、おかげさまで！！」二人とも、怖いくらいの笑顔。子供の時からの旧友である。

ハグして握手をした後、シェイソンから話を切り出した。「ところでダウトさん。一緒にポケモンやりませんか？」

「いんや、俺ちょっと今グラセフしたい気分なんだけどさ、どうだ？」

「いいですね！！一緒に警官狩りしましょうよ！！」

そうして、ダウトとシェイソンの二人はダウトの自室へと消えていった。

その跡に残ったのは、泣き過ぎて瞼がパンパンになったリカルドの嗚咽と、両断されたアフロの残骸だけだった……。

ふう。怪談話はこれにて終了。

ちょっと日記のページが文字でびっしりになっちゃった。

んでさ、あの後、クロアがアフロ様の部屋を潜入捜査したところ、ベッドが育毛剤で濡れていたらしいんだけど……

この件とは関係ないよね？

第15話　「キ●ガイアワーズ」　1

アリスの部屋。
きれいに整頓された本棚、塵一つないカーペット、真っ白なベッドシーツ。
中世ヨーロッパをモチーフとした部屋の窓からすがすがしい朝日の光が差し込んできた。

アメリカはロハネ、今日も快晴。

その朝日で目が覚めたアリスが欠伸をし、ベッドの中から出た。
伸びをして、いつもの宗教服に着替える。

さぁ、今日は何を吸いましょうか。コーラ（コカイン）？クリスタル（覚醒剤）？

アリスがのんびり考えていると、不意に彼女の目の前を黒い影が掠めていった……

第15話　「キ●ガイアワーズ」　2（前書き）

ハイ、すみません。
何日かぶりの投稿です！！

第15話　「キ●ガイアワーズ」　2

～ブロンズの部屋～

ＰＩＰＩＰＩＰＩＰＩＰＩＰＩＰＩＰＩＰＩＰＩＰＩＰＩ！！ＰＩＰＩＰＩＰＩＰＩＰＩＰＩＰＩＰＩ！

僕はけたたましく鳴る目覚まし時計で目が覚めた。

時計の上部を叩いてそれを止め、ベッドから這いずり出た。

さて、今日は何をしようかな……。。。

というか、早くドイツに帰りたいな……。。。

ふと鏡を見たら、自分の髪に酷い寝癖がついていた。まるでニワトリだ。

……シャワーで頭、濡らしてくるか……。

靴を履き、廊下へつながるドアへ向かう。

するとその時、いきなりアリスちゃんがドアから飛び出て来た！！

そして泣きながら僕に飛びついて来た！！

「うわあああぁぁぁぁぁぁぁ！！ブロンズさぁぁぁぁぁぁぁん！！」

「何！？どうしたの！？」

相当な涙声だ。これはタダ事じゃあないぞ……。

僕の質問に返したようだったが嗚咽で全く聞きとれない。

「アリスちゃん、落ち着いて。何があったんだい？」

頭を撫で、なだめると、アリスちゃんはようやく落ち着きを取り戻した。

涙を拭きながら、彼女は震えた声で言った。

「Gが……ゴキブリが……私の部屋にゴキブリが出たんですぅ……」

第15話　「キ●ガイアワーズ」　3

ゴ……ゴキブリ……？

僕はクスッと笑ってしまった。

ちっちゃい女の子ってやっぱああいうの苦手なんだね……

「……何がおかしいんですか？」不思議そうに僕の顔を覗き込む。

「ううん、何でもない」

僕はナイトテーブルに置いていた新聞紙を棒状に丸めた。

「んじゃ、退治しに行こうか、ゴキブリを」

「はい。ありがとうございます。お願いします」

そうして僕とアリスちゃんは廊下へ出た。

寝癖を直すのはゴキブリ退治が終わった後でいいや。

第15話　「キ●ガイアワーズ」　4

ブロンズはアリスを廊下で待たせ、独り、アリスの自室へ入っていった。右手には新聞紙。左手には殺虫剤。フル装備だ。
部屋はとても整頓されていた。こんなキレイなところにゴキブリが出るのかとブロンズが不思議に思う程だ。

おそるおそる歩を進める。イキがっていたが、実はブロンズも怖いのだ。アリス程ではないが、ゴキブリが怖いのだ。

「もう外に逃げてますように。もう外に逃げてますように……」
安手のオモチャのように連呼しながら、尺取り虫のように前進する。

部屋の中心に着いた。体を回して見渡す限りではゴキブリは現れていない。
いや、いた。
細く長い二本の黒い触覚がベッドと床の隙間からニョッキリと生えていた。

第15話　「キ●ガイアワーズ」　5

「うわあああぁぁぁぁぁぁぁ！！」痛ましい絶叫を上げながら、殺虫スプレーを噴射する。

触角はベッドと床の隙間の奥へと消えた。

その隙間に、続けてスプレーを噴射した。鼻をつんざく刺激臭が辺り一面に舞う。

咳をしていると、ゴキブリが隙間から這い出てきた。

……！！

ブロンズは絶句した。

黒光りする体長３０センチの巨大ゴキブリが足元から姿を現したのだ。

勝てる気がしない……！！

そして、心の底から気持ち悪い！！

「おうえええぇぇぇぇぇぇ！！」ブロンズは聞き苦しい嗚咽を漏らしながら部屋を後にする。廊下に出た。すると、待っていたアリスが心配そうな顔をして訊いてきた。

「……大丈夫ですか？」

ブロンズは首を横に振った。

第15話　「キ●ガイアワーズ」　6

そこへダウトが通りかかった。「よぉ、ブロンズ……どした？禁固囚みてぇに顔真っ青にして」

「ゴキブリが……ゴキブリが……」ブロンズは唇を震わせながらアリスの部屋のドアを指差した。

「ロリガキの部屋にゴキブリぃ？珍しいな」ダウトは首を左右に鳴らす。「ブロンズ。そんな雑魚も掃除できないようじゃ、お前もまだまだだぜ。よし、ちょっくら殺ってくるか」

ブロンズは少々イラっときたので、ダウトにゴキブリの詳細を一切明かさないことにした。僕と同じ気持ちを味わせちゃえ、と。

ダウトが扉を開け、アリスの部屋の中へ入っていった。

しかし、あっと言う間に帰ってきた。廊下へヘッド・スライディングを決めた。

第15話　「キ●ガイアワーズ」　7

「ゴキ！！ゴキ！！ゴキゴキ！！ゴキブリ！！ゴキブリ！！ゴキブリいいいいいいいいい！！」ダウトは顔を上げると狂ったように連呼し始めた。

「あの……ゴキブリが嫌いだったなら退治に行かなくてよかったですよ……」

「違ぇんだよ、クソロリ！！数が……！！」

その時、爆発音が鳴り響いた。

見ると、アリスの部屋のドアが爆散していた。そしてそこから百を裕に超える巨大ゴキブリの大群が波のように押し寄せてきた。

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああ！！！」

三人は戦慄の画に悲鳴を上げた。

走り逃げる。が、ゴキブリは想像を超える猛スピードで追いかけてくる。

叫び過ぎて喉が潰れてしまいそうだ。

第15話　「キ●ガイアワーズ」　8

「糞ぉぉ！！ここはサイレント・ヒルだってかぁぁぁぁ！？」
「取り敢えず、どこかに逃げないと保ちません！！」
「礼拝堂に逃げ込もう！ね！？」
「そうしましょう！！私のミニガンもありますし！！」
三人は廊下の最端、礼拝堂への扉に滑り込んだ。
そこにはクロアもリカルドも居なかった。無人だ。
壇上の司祭台に向けて走ると、再び扉が破壊された。礼拝堂に黒渦が侵犯してきた。
そこでようやくアリスが司祭台に隠してあるミニガンを手に取った。
「よっしゃ！！ぶっ放せ、クソロリ！！」
ダウトの喝と共に、ミニガンの銃口から閃光が放たれた。
無数の弾が無数のゴキブリ達の体を粉砕していく。が、黒渦の動きを止めるには足らなかった。
「きゃあああぁぁぁぁあぁぁぁあぁ！！」止まらない黒渦の中にアリスが呑まれてしまった。もがいた腕が消えたきり、彼女の姿を確認する事が出来なくなってしまった。

第15話　「キ●ガイアワーズ」　9

「おわあああああぁぁぁぁぁぁぁぁ！！アリスちゃぁぁぁぁぁぁぁん！！」

「だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！振り返んなブロンズ！！走れぇぇぇぇぇぇぇぇ！！」ダウトは礼拝堂の端に辿り着くと、ステンドグラスをバットで打ち砕いた。「オラ、ここから逃げっぞ！！飛び込めぇぇぇぇ！！」

「あちょーー！！」ブロンズが飛び込んだ先は墓場だった。エンズ・クライシスト・チャーチの東側には枯れ木に囲われた薄明るい墓場がある。

この墓場には主にダウトが殺した輩達が眠っているが、最近埋葬したのはハウエル元大尉だ。

そのど真ん中にリカルドと修道服姿のクロアが居た。

リカルドは秋の枯れ草が茂る地面に跪いていた。彼が対峙していたのは、墓標。墓標には文字が刻み込まれていた。

「神父のアフロ上半分、ここに眠る」……。

リカルドの後ろに居たクロアが彼を呆れと軽蔑の目で彼を見ていた。

「ねぇ、クソアフロ。アンタいつまでアフロネタで喰っていくのさ？」

するとリカルドは俯いて言った。

「この身が滅ぶまで」

第15話　「キ●ガイアワーズ」　10

……何してるんだろ、あの人……。
いや、そんな事より取りあえず助けて貰わないと！！

「クロア！！アフロ様ァ！！助けてぇぇぇ！！」ブロンズは力の限り叫んだ。すると、クロアとリカルドはこれに呼応した。

「何！？そのGの大群！！気持ち悪ッ！！」
「こっちに連れて来るなぁぁあぁぁあ！！」
「きゃぁぁあぁぁあぁぁあ！！」
「だぁあぁぁあぁぁあぁぁあ！！」

逃げ去られてしまった。

……。

気付けばいつの間にかダウトの姿も見えなくなっていた。

独りになってしまった。

後ろを振り向く。
気色の悪いGの大群が目の前にまで迫っていた。

……。

ねぇ、これ詰んでない？（チェックメイト）

ぴぎゃあぁぁあぁぁあ！！

ブロンズは泣き叫んだ。すると突如、彼の体が爆風で吹き飛ばされた。

第15話　「キ●ガイアワーズ」　11

土まみれになりながら、地面を転がった。止まると、服の焼け焦げた匂いがした。

「ブロンズ!!」

声がしたのでブロンズはその方を向いた。

振り向いた先は教会の屋根の上。そこにダウトが立っていた。

「ブロンズ!!退けや!!」

ブロンズが声に従うと、彼の目前で大爆発が起こった。群れを成していたゴキブリが一斉に金切り声を上げて炭と化した。

また爆発。黒渦が散り散りになる。

どうなってるんだ!?

何が起こってるんだ?

ブロンズが思うと、ダウトの後ろから人影が現れた。

始め、爆炎で輪郭がぼやけていたが、やがて、解った。

Ｍｒ．Ｊだ。

「ヤ――、ハッピーボーイ★助けてやるＹＯ!!」Ｍｒ．Ｊは手を振ると、手榴弾を投げた。

第１５話　「キ●ガイアワーズ」　１２

「どわぁあぁぁあぁぁ！！」

また爆風に飛ばされるブロンズ。彼おかまいなしに投げられる手榴弾はゴキブリを周りの木々ごと粉砕していく。枯れ木の一片が燃え、広がり、辺りは火の海となった。

「オイ、糞Ｊ！！もうちょいマトモに投げらんねぇのか！？」
「頑張ってマ～ス♪」
「お前ぇぜってーマトモに投げる気ねぇだろ！？ぶっ殺すぞ！！」
「Ｏｈ．怖。。」Ｍｒ．Ｊは返すと、手に持った六個の手榴弾のピンを一斉に抜いた。そしてそれらを投げた。
投げられた手榴弾は全て寸分の狂い無く、ゴキブリの群に向かっていき、地面を抉った。

「ハッ！！やんじゃねぇか、糞Ｊ！！」
「ありがとゴザイマース！」
「んじゃ、俺も行くぜ！！お前ぇだけ活躍すんのはヤだからな」

第15話　「キ●ガイアワーズ」　13

ダウトはそう言うと、屋根から飛び降りた。
「覚悟しろよクソゴキ共!!俺様が相手だ!!震えろ!!」そして地面へ降り立った瞬間、
「ぐぼぁ!!」彼はあさっての方向に吹っ飛ばされた。

スリッパだ。

しかし、リカルドのそれとは明らかに違う。

便所スリッパだ。

リカルドのスリッパはいつもごく一般の家庭用スリッパだ。それ以外のスリッパは見たことがない。

スリッパが遙か彼方の主の手元へ帰っていった。

便所スリッパの主は、ブロンズが見たことのある顔だった。

ロッキンポ派教祖デイビッドだった。
約一週間前、市長の金を送りに行く道中現れたロケラン野郎だ。
「諸君、南米産ゴキブリのお味はどうかね?けけけけ」
デイビッドはほくそ笑みながら前に出た。

第15話　「キ●ガイアワーズ」　14

彼は自身の教会で一年前からバンド（宗教団体）を組み、危ないライブ（ミサ）を開き続け、最近になってファン（信者）を急激に増やし始めている。
彼はエンズ派にとって、現在最も注視しなければならない敵の一人として存在している。

「出たな、ヘドバン中毒者ぁ！！」ダウトが包丁を握りしめいきり立つ。「何しに来やがった！？」

するとデイビッドはメロイックサインを決めた。「ロック（異）のインポ（徒）野郎たちをぶっ殺しに参りまちた！！」

「あぁ、そうかい！！ならテメェが死ね！！」ダウトは包丁を投げ放った。綺麗な真直線状の軌跡を描いて包丁がデイビッドの心臓目掛けて飛んでいく。
しかし、その途中で包丁は叩き落とされた。代わりにダウトの方にスリッパが迫る。

……！！

スリッパはダウトの顔面に直撃した。彼の身体が血飛沫を上げて後方に吹き飛んだ。

第15話　「キ●ガイアワーズ」　15

「ユー！！やり過ぎネ！！」それを見たＪは無数の手榴弾をばら撒いた。
が、全て空中で爆散した。直後、爆炎を掻き分けて来た便所スリッパがＪの腹を直撃した。
「あべし！！」Ｊは血を吐いた。悶絶した後、屋根から転落し、枯れ草の茂みの中に消えた。

……。
あれ？
僕また独りだ。

ブロンズは絶望した。

「ロッキンポはあと貴様一人じゃあぁあぁぁ！！死ねぇぇえぇえ！！」
空中でスリッパが屈折し、ブロンズの方を向いた。と思うと一直線に飛んで来た。

その時。

便所スリッパが横から入ってきた家庭用スリッパと弾き飛ばされた。

「！！？」
デイビッドが向けた視線の先……
そこにリカルドが居た。
「真のスリッパ使いは俺だぞ、糞野郎」

第15話　「キ●ガイアワーズ」　16

リカルドがスリッパを構えた。「ブロンズ、下がってろ。ちょっと危ないぞ」

「……わかった」幸いにも巨大ゴキブリはJによってほとんど駆除されていた。その僅かな残りは全て瀕死でそこらをよろよろ這いずりまわっていた。

「お前みたいなアフロが真のスリッパ使いぃ？」デイビッドもスリッパを構えた。「ふざけるな！！」

双方がスリッパを投げた。次の瞬間甲高い衝撃音が鳴り響き、二つのスリッパが地に落ちた。

その間にデイビッドが投げる。リカルドは手に持ったスリッパでこれを弾き、もう一方の腕で投げた。横にカーブを描いて飛んで行くのをデイビッドが投げて阻止する。

目まぐるしく攻守が入れ替わる。一向に均衡が破れる気配が無い。次第に両者の手数が増えていく。

デイビッドの目の前に二つの家庭用スリッパが迫る。手に持ったスリッパで弾く。

リカルドの目の前に二つの便所スリッパが迫る。首を回してアフロでこれを跳ね返す。

そして、

「これで終わりだ、デイビッド！！」リカルドが叫び、マントを翻した。すると、マントから三十余の家庭用スリッパが煙を出して一斉に射出された。

「うおおおぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉ！！」これに対してデイビッドはスリッパを手で投げ、リカルドのスリッパを懸命に撃ち落とす。撃ち落としたリカルドのスリッパ達が次々と爆発する。

リカルドは自分のマントのスリッパにミサイルを仕込んだのだっ

た。

キィィィィィィィィィィン！！空気を裂く斬撃音を喧しく立てて家庭用スリッパが飛ぶ。

「もはやスリッパの意味ねぇ！！」そして、二十四のスリッパがデイビッドを直撃した。

第15話　「キ●ガイアワーズ」　17

凄まじい着弾音が轟いた。
爆風と共に飛んできた衝撃波が枯れ木を揺らし、転がっていたゴキブリを引き裂く。ブロンズの体を吹き飛ばし、地を穿いた。太陽より眩しい閃光が放たれ、ロハネの街が一瞬白に染まった。
土煙と砂煙と硝煙が混じった爆煙が立ち昇る。
しかし、その爆煙がみるみる飛ばされていく。
風？いや、今日は快晴だ。風なんて微塵もない……
まさか、とリカルドが思った瞬間
「ブッイキス！！ブッイキス！！ブゥゥゥッイキス！！！」奇声と共にデイビッドが激しいヘッドバンキングで煙を掻き消しながら現れた。
「何いいいいいい！？」リカルドはたじろいだ。

デイビッドはヘッドバンキングで頭を上下に振ることで、ミサイルもといスリッパの衝撃を全ていなしたのだ。

そう、デイビッドはリカルドとほぼ同じ能力を持っているのだ。

第15話　「キ●ガイアワーズ」　18

リカルドはデイビッドににじり寄った。
ーースリッパ使いの人間はこの世に二人も要らない……
ならば今ここで殺るのみ……！！

その時、ここで空かし風が吹いた……。

「……帰るわ、俺」それからの暫くの沈黙の後、デイビッドがまた呟いた。「尿路結石が……！！」
「は？」
「痛い！！痛ぇんだよ！！あぁぁあぁぁあぁ！！」叫んで股間を鷲掴みにしてのたうち回りだした。顔がみるみる脂っこい汗で濡れていく。「俺の封印されしチ○コがぁあぁぁあぁ！！」
「うるせぇえぇえ！！この半端厨二野郎がぁぁあぁぁ！！」
「畜生、今日のところはこれ位で勘弁しといてやる！！」デイビッドの背後から無数のスリッパが宙に浮いて現れる。そしてそれらのスリッパが彼を中心に巨大な渦を巻く。
「次は殺す！！」そう吐き捨てられたかと思うと、渦が霧散した。
デイビッドの姿が消えていた。

第１５話　「キ●ガイアワーズ」　１８（後書き）

尿路結石

麺が固くて、こってりしたラーメンを食べまくったりするとなっちゃう実在の病気。

尿道に石みたいなのが詰まって大激痛が走る。（痛みは陣痛と同レベル）

第１６話　「新教育番組：キ●ガイとあそぼ」　１

第一次スリッパ大戦が終結してその夜……

ゴキブリの脂で汚れた教会やアリスを掃除するのに半日掛けたので皆かなり疲れていた。

クロアの作った夕食を食べ、一段落。

じゃあ、寝ようか。僕…ブロンズは思った。

ダウトが生欠伸してとぼとぼ歩いてる。見ると、僕の腕時計は十一時を指していた。

……まぁ、大変だったからなぁ…掃除……ヌメった床をモップでゴシゴシゴシゴシ……

おえっぷ。思い出したら気分悪くなってきちゃった。

とにかく、早く寝よう。

僕は浴室でシャワーを浴びてから、自室に戻った。

第16話　「新教育番組：キ●ガイとあそぼ」　2

パジャマに着替えて、ベッドにダイブ。
……。
寒い。
よく考えてみれば明後日で十二月じゃん。寒いワケだ。
僕はストーブをつけようと一旦ベッドから起き上がった。
すると、コンコンとドアをノックする音が聞こえた。

誰だろう……？

僕はストーブをつけてからドアを開けた。するとそこに、猫のぬいぐるみを抱いたパジャマ姿のアリスちゃんが立っていた。本日二回目だ。
「ブロンズさん……」
「……何？」
「私の部屋がまだゴキブリ脂ギッシュなので一晩寝かせて貰えませんか？」

あぁ、
そういえばアリスちゃんの部屋ってまだ片づいていないんだったっけ。

「うん、いいよ。入って」

第１６話　「新教育番組：キ●ガイとあそぼ」　３

「ありがとうございますッ！！」
アリスちゃんがジャンプして僕に抱きついてきた。僕はそのまま彼女を抱きかかえ、ベッドで下ろした。
「んじゃ、おやすみ」部屋の明かりを消した。途端、部屋は暗闇に包まれた。唯一の明かりであるナイトテーブルのランプだけがほのかに闇を灯した。
僕はその明かりを頼りにしてソファーに辿り着いた。

ベッドはアリスちゃんに占拠されちゃったし、今日はここで寝ようか……。

ソファに座り、もたれ、目を閉じた。
完全な闇。
おやすみ、アリスちゃん……

だがその時、アロマキャンドルのような甘い香りが僕の鼻を掠めた。

第16話　「新教育番組：キ●ガイとあそぼ」　4

それとついでにこんな声も聞こえてきた。

ーー今晩はアヘンにしましょうか。うふふふふふふ。。。

……。

ぎにゃあぁあぁぁあぁぁあああぁあぁぁあ！！

僕は急いで部屋の明かりを点け、アリスちゃんの手にあった怪しげなビニール袋を取り上げた。

「あーーーーっ！！私のアヘンが！！」

「吸わないで！！せめて僕の部屋で吸わないで！！」

「返してくださいよぉぅ……」

「ダメ、ゼッタイ。」

僕は明かりを消し、ソファに戻り、アリスちゃんから没収した袋をお尻の下に敷いた。

「吸わないでね。約束してよ……お願い……」

「わかりました……」

「んじゃ、おやすみ」

「はい、おやすみなさい」

目の前で九歳児が狂いゆくのなんて見たくないよ……

まぁ、もう大丈夫だ。安心して眠れるよ。

僕は再び瞼を閉じた。

第１６話　「新教育番組：キ●ガイとあそぼ」　５

……。

……。

ーーモルヒネ盛る姫ぇぇ……ぐふふふふふふふふふふふふふ

……

ＮＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯＯ！！！！

僕は跳ね起きてアリスちゃんの注射機をかっぱらった。

「あーーっ！！私のモルヒネがぁっ！！」

「確かに吸うなとは言ったけど！！言ったけどもッ！！」

「解りました、飲むタイプならいいんですね」

「ＭＤＭＡもダメ！！ていうかお薬ダメ！！今日だけは我慢して！！」

「わかりましたぁ……」

僕は再びソファに戻った。注射機を自分のお尻の下に……いや、刺さったらいけないので注射機はクローゼットの奥にしまった。

一呼吸置く。

んじゃ、寝るか……。

第16話　「新教育番組：キ●ガイとあそぼ」　6

……。

……。

やっと静かに寝てくれたみたいだ……よかった。

……。

……あばば。

…………………………………………？

あばば……。

あばばばば……。

…………………………………………？？

……あばばばば……。

あばばばばばばばばばばばばばばばばばばばばばば！！！

「ぎゃあぁぁあぁぁあぁあぁぁあぁああぁぁああぁあぁ！！！」

僕は飛び跳ね起きて部屋の明かりをつけた。

なんとアリスちゃんの体が激しく痙攣しているではないか！！

「あばばばばばばばばばばばばば！！　おくすりぃぃい！！　おくす

りいいい！！」

どうやらコレ、薬の禁断症状らしい！！

「おくすりくださいいぃいぃ！！」

「ごめん！！負けたよ！！好きなだけ飲んで吸って打って！！」

こうしてブロンズ君は地獄の一晩を過ごしましたとさ。

コレを読んでるみんな、危険なお薬はダメ、ゼッタイ。

登場キ●ガイ紹介　Ｍｒ．Ｊ

Ｍｒ．Ｊ

本命　不詳
年齢　４２歳
血液型　Ａ型
好きなもの　タバコ
嫌いなもの　人間ドック

クライアントが持ってくる手榴弾などを改造する発破屋を営んでいる。
ガリガリ。容姿はかなりなハードボイルドでキめている。リボンをつけたシルクハットを常時着用。あとサングラス。
極度のヘビースモーカー。一箱分のタバコを一気にふかす。そのため、彼の店はガス密室状態。米国たばっ子連盟の会長を務める。タバコ税が上がると発狂。
生身での戦闘能力はほとんどゼロ。お手製の手榴弾とタバコの煙がエモノ。

戦闘能力　★★★☆☆
タバコ　★★★★★★★★★★
体重　★★☆☆☆
読者人気度　★★☆☆☆
作者寵愛度　★★★★☆

第17話　「Ｔｈａｎｋｓ　ｆｏｒ　キ●ガイ」　１

やぁ、昨晩アリスちゃんの件で徹夜したブロンズだよ。おはよう。
今日は十一月の第四木曜日、アメリカの祝日「感謝祭の日」。この日はみんながクリスマスに向けて準備を始める日なんだって。

そんな訳で朝から教会は慌ただしい。
みんなで街に繰り出すんだってさ。

んじゃ、僕も荷造りするか……ん？ちょっと待って。
外には殺し屋とかがうようよいるんじゃ……

「あぁ、その点ならもう大丈夫だよ」クロアは言った。
なんでも、市長さんが殺し屋たちのアジトに手紙を送りつけたんだって。

――私の財布に手を出した奴らは全員ナパームで焼き殺します？

市長より愛を込めて

さすが市長さん。太っ腹。
という訳で僕たちはちょうどお昼時、街に向かって車（装甲車）を走らせましたとさ。

第17話　「Ｔｈａｎｋｓ　ｆｏｒ　キ●ガイ」　2

街でもクリスマスの準備が始められていた。街路樹に色とりどりのライトが巻き付けられ、立ち並ぶ店にはクリスマスツリーが飾られていた。

車（装甲車）から降りた僕ら。

雪がぽつりぽつりと降っていた。吐息が白い。もう少しで十二月なんだというのを実感させられる。

「寒い……」

黒いジャンパーにジーンズ、とボーイッシュにキめてきたクロアが僕に寄り添ってきた。

と共にダウトもやってきた。

「やーい、やーい、リア充死ねぉ！リア充死ねぉ！」クロアに中指を立てながら脳なし猿みたいに円周する。「ヒュー！ヒュー！ブロンズ！！デキ婚だけはすんなよな！！こいつお前とヤる事しか頭ん無ぇからなァ！！」

ここでクロアが反撃に出た。

「Ｆｕｃｋ' ｎ　ｐｕｓｓｙｙｙ！！！！うっさい厨二！！殺す事しか頭にないアニヲタキ●ガイめ！！」

「なんだァ！？ヤんのかテメェ！？コラ！！えぇ！？」

「えっ。公衆の面前でヤんの……？アンタそういうのが好きなんだ……アタシも好きだけど」

「……。」

戦意喪失したダウト。

ーーそうだ、忘れてた。コイツは完全なる変態だ。

第17話　「Ｔｈａｎｋｓ　ｆｏｒ　キ●ガイ」　3

「はーい、キチガイさん達、終わったかな～」リカルドがスリッパを持って地面と水平移動する。もの凄い剣幕の笑顔だ。「終わったよな?終わったよね」

「「……はい」」

「ハイ、終わったね……じゃあ、糞ビッチ、あとヲタ。指令だ」

リカルドはマントの懐から二枚の小さなメモ用紙を取り出した。それらをクロアとダウトそれぞれ一枚ずつ手渡す。「ビッチ、お前はクリスマスツリーを、ヲタ、お前はライトを適当に買ってこい。俺はアフロの新調をする。アーユーオーケイ?」

「は?アーユーホーケイ?イエス」

「んもぉぉぉぉぉお前黙れ!!畜生!!金渡してやるから早くツリー買って来い!!」

「はーい」

「その金、ラブホに使うなよ!!」

「……チェッ、ケチ」クロアは舌打ちして中指を立てると、人ごみの中に消えていった。

第17回　「Thanks　for　キ●ガイ」　4

「つーことでお前早くライト買ってこい、ヲタ」リカルドがダウトに目を移した。
「クソったれめ、分かったよ……あっそうだ！テメーこそ俺にブルーレイデッキ買えよ！！観たいアニメが溜まってんだよ！！」
「いい歳こいて何がアニメじゃあぁああ！！てめぇふざけんな！！」
「デッキ買わなかったらライトも買わねぇ！！」
「てめぇは五才児か！！まぁいいだろう、買ってやるから早くライト買え！！」
「話分かるじゃん、んじゃ金」
「ほらよ」リカルドはダウトに素っ気無く百ドル札を手渡した。
「んじゃ、行ってくっぜ。……勘違いすんなよな！！別にお前の為に買ってやる訳じゃねぇんだかんな！！」
「俺はクーデレ萌えじゃぁあぁあぁあぁ！！さっさと行け！！」
そうしてダウトも人混みの中へ紛れていった。

第17回　「Thanks　for　キ●ガイ」　5

「さてさてブロンズ君。君はかわいいかわいいターキー(七面鳥)を買ってきなさい」

「えっ？ターキー？七面鳥の事？」ブロンズは聞いた。

「そうだ。今夜のパーティの主役だ。とびきりデカいの買ってこい。これ金な。……おっと。お前、道とか知らねぇだろ？つーわけで俺の愛しのアリスた～ん、ブロンズの道案内頼む」

「は～い」アフロの中からアリスがひょこっと出てきた。地面へ降り立つと、ブロンズの元へ駆け寄った。

「んじゃ頼むぜ！二人共！あっ、ブロンズ！俺のアリスたんに色目使ったら承知しねぇからな！？アリスた～ん、愛してるよ～！！」

ブロンズ班とリカルドは互いに手を振って別れた。

そしてリカルドは新しいアフロを調達しに、ダウトのブルーレイを買うために、独り、走り始めた。

第17回　「Ｔｈａｎｋｓ　ｆｏｒ　キ●ガイ」　6

まずリカルドは理髪店へ向かった。
アフロを直す為だ。
今の彼のアフロはお椀形をした奇妙で悲惨な形状を成している。
人前に出るのが恥ずかしいくらいだ。
赤面しながら全速力で走る。

リアルド達は、街に来る前にあらかじめ「落ち合うのは五時」と決めて来た。
今現在の時刻は二時。
つまり、リカルドはあと三時間でアフロを直し、ブルーレイを買わなければならない。
大忙しだ。

五分走り続けてようやく店に着いた。
行きつけの理髪店だ。
店の名は「発破屋Ｊ」。

「ハーイ、ボーイ！！何か用かネ～～！？」

リカルドが店の入り口で店主の名を叫ぶと、店内からテンション超爆なＭＲ．Ｊが現れた。
「Ｊ、いつもので頼む！！手早くな！！」
「アイアイさ～～」

次の瞬間、ロハネの街が一瞬閃光と轟音に包まれた。

第17回　「Ｔｈａｎｋｓ　ｆｏｒ　キ●ガイ」　7

アフロが完全復活したリカルドはブルーレイを買うため家電量販店へ。

自動ドアをくぐり抜け、店内へ。すると、エアコンやらパソコンやらといった、ありとあらゆる家電が陳列される巨大なマーケットが現れた。

適当なブルーレイデッキを手に、レジへ向かう。

しかし、一つ問題が。

「……なんだこりゃぁ？」

リカルドが目の当たりにしたのは一本の赤いライン。店の端から端までを一直線に結んであった。そしてそのラインを越えたところすぐに立っているのは警察官。

警察官に尋ねてみると、このラインから一歩でも出たら逮捕する、とのこと。

……カンのいい読者は気がついただろう。

そう。この店、店のど真ん中にロハネとロサンゼルスとの境界線が敷かれているのだ。

第17回　「Ｔｈａｎｋｓ　ｆｏｒ　キ●ガイ」　8

ロハネに住む住民たちは大概、国際指名手配中の重犯罪人だ。勿論、リカルドもその一人。

ロハネの住民はロハネに居る限り市長の保護（無法地帯の提供による匿い）を受ける事になるが、市長の権力の範囲外、公の場では警察やＦＢＩ等に即座に追いかけられる立場にある。

ロハネから一歩でも出るとＤＥＡＤ　ＥＮＤ

リカルドが今いるのはロハネ、レジがあるのはロサンゼルス。

つまり、リカルドは今ボーダーを踏み越える事なく、ボーダーを越えて遥か先にあるレジに向かわなければならないのだ。

でないとブルーレイが買えない。

するとダウトがガンダムを見れない。

するとダウトがハルヒを見れない。

するとダウトがらき☆すたを見れない。

ダウトは発狂死してしまうだろう。

さて、リカルドはどうする？

第17回　「Ｔｈａｎｋｓ　ｆｏｒ　キ●ガイ」　９

……。

何も手だてがないので、取りあえず目の前の警察官をぶちのめすことにした。

出来立てのアフロで頭をチョップ。

途端、警察官は口から泡を噴いて崩れ落ちた。

よし、これでレジに行ける。

アフロの新しい使い方を見つけたリカルドはボーダーを踏み越えた。

その直後、

ダパパパパパパパパパパパパ！！

突如前からマイクロウージーの銃弾が飛んできた。

「だわわわわわわわわわわわわわわわ！！」リカルドはとっさにそれをアフロで弾き、慌てて元の場所に戻った。

「何ィィィィッ！？」前を向き直したリカルドは絶句した。

ボーダーの遙か向こうでＦＢＩの重武装隊員が隊列を組んでリカルドに銃口を向けていた。

第17回　「Ｔｈａｎｋｓ　ｆｏｒ　キ●ガイ」　１０

……。

何も手だてがないので、リカルドは取りあえずＦＢＩをぶちのめすことにした。

スリッパを投げた。途端、ＦＢＩは唖鼻叫喚の輪舞曲を踊り始めた。

暫くしない内に死屍類々の地獄と化した。

よし、これでようやく……

リカルドがボーダーを踏み越えようとしたその時。

ちゅどおぉおぉおぉおぉん！！

左の壁から戦車が突っ込み大砲をぶっ放してきたので、アフロで受け流し、また元の位置へ。

米軍隊出動。ＡＫやらＵＺＩやらといった短機関銃を腰に構えた兵が、戦車によって破壊された壁から絶え間無く溢れ出す。戦闘機の空気を切り裂く甲高い音も聞こえてきた。

なぁ、これいじめじゃね？

たかだかスリッパを操れるアフロの中年おっさん一人に米軍一個大隊だぞ？

あれ？目が潤んできやがった。

第17回　「Ｔｈａｎｋｓ　ｆｏｒ　キ●ガイ」　１１

午後五時。メンバーがそれぞれのモノを買い、車（装甲車）の前に戻ってきた。

ブロンズとアリスは七面鳥。クロアはクリスマスツリー、ダウトはライト。

だが、クロアとダウトは両方安手のモノを買い、余った金で自分達のモノを買っていた。クロアはＡＶとアダルトグッズ、ダウトはフィギュアとチェーンソー。

「何ですか、貴方達」と、アリス。クロアとダウトの醜態を前に言った。「おつかいもまともにできないとは全く何ですか？」

「うるせぇよ、クソロリ」

ダウトを無視し、アリスは説教を始める。

「いいですか。お菓子ならまだしもＡＶやらフィギュアやらに使うとは……日本の七歳児でもそんなことしませんよ？つまり貴方達は子供以下、すなわちウンコです。」

声は荒げないが、急所を衝き、グサグサと来る説教が続く。説教できるのは、教祖と教徒の主従関係の故。

第17回　「Thanks　for　キ●ガイ」　12

アリスがウンコの事しか話題に上げなくなってから二十分後。
「……ところで、アフロさんは何処ですか？」
「遅ぇよ！！」ダウトは思わず突っ込んだ。直後耳が腐るトコだったぜ、と呟いた。クロアも一緒にいたブロンズもだ。
ウンコについてここまで語れる九歳女児は初めて見た、と。
「……んー…まだアンタのブルーレイ探してんのかもよ？厨二」
「あん？うっせぇよ、俺は二次元に生きるって決めてんだよ、バカ」
「アンタ顔はイイんだけどね……ホント残念なイケメンって感じ」
「黙れバカ。残念でも無念でもいいんだよ、あ」
「何？厨二」
「あれ見ろ」
クロアが振り向くと、夕日の後光が差した巨大なアフロの影が近づいてくるのが見えた。

第17回　「Ｔｈａｎｋｓ　ｆｏｒ　キ●ガイ」　１３

夕日を背にし、歩むリカルド。ボロボロの体にピカピカのアフロ。
そしてその手にはブルーレイ。
彼は一個大隊に勇敢に立ち向かい、見事ブルーレイを勝ち取ったのだ。
誇らしい英雄の勇姿に全米が泣いた。
嘘だ。

装甲車に乗って街を後にし、教会へ戻る。
教会に戻ると皆、せっせとパーティの準備を始めた。
ブロンズは七面鳥を焼き、クロアはディナーの用意をし、アリスとダウトはドレスアップ。ライトと装飾品で着飾ったクリスマスツリーを刺す。
勿論、リカルドのアフロの天辺に、だ。

日が沈み、ようやく準備が終わった。
さぁ、パーティの始まりだ。

第１８回　「七面鳥とキ●ガイ」　１

豪華な夕食。こんがり焼けた七面鳥の香ばしい薫りがただよう。
その横にはシャンパンの瓶が並び、その横にはワインやらビールやらといった酒瓶が並んでいる。教会を包む夜闇を壁の蝋燭達が優しく照らす……
その食卓を六人が囲む。
……？
六人？
数えてみよう。
時計周りに、ダウト、クロア、ブロンズ、アリス、シェイソン、リカルド……
なんだ、いつものメンバーじゃないか。あっはっはっはっはっはっ……ん……？シェイソン……？
何でお前がここに居るゥゥゥゥゥッッ！！？
ダウト曰く、「楽しい友達連れて来たんだ、いいだろうがよ？」というワケで、血と臓物による地獄のカオティック感謝祭パーティの始まり始まり～～。

第１８回　「七面鳥とキ●ガイ」　２

「う～ん！いい匂いですね。ははぁ！」シェイソンが嬉しそうに手を叩く。「この度は素晴らしいパーティに私めをお誘い戴き誠に有り難う御座いました」

シェイソン大喜び。

ダウトも大喜び。

シェイソンとダウトだけ、大喜び。

意気消沈の他メンバー。

せっかく、せっかく、今から陽気にはしゃごうと思ったのに、コイツ（エイソン）の身に纏う険悪な邪気のせいではしゃげないじゃないか、と。

おまけにその事を口にしたら、殺されそうで恐ろしい。

皆、俯き、黙り込む。

「オイオイ、どうしたんだよ、みんなぁ！テンション低いぜ、オラ！！」ダウトがそんな皆の顔を一人一人覗いていった。

みんな目が死んでる～♪

「まぁもういいや、ちゃっちゃとおっ始めようぜ！！乾杯！！」

第１８回　「七面鳥とキ●ガイ」　２（後書き）

ギャグマンガ日和　パロりました。
すみません。
因みにギャグマン漫画もアニメも見たことありません。
二重の意味ですみません。

第１８回　「七面鳥とキ●ガイ」　３

ダウトの勝手な乾杯音頭でパーティは始まった。だが、誰も杯を上げない、声を上げない。
暫くの沈黙の後、シェイソンが七面鳥に手を出した。足の部分を千切って手に取ると、マスクを一瞬僅かに開けて食べた。
「素晴らしいお味です」
ダウトがそれに続く。
しかし……。

他のメンバーテンション最低潮。まるでお通夜だ。
「さぁさぁ皆さんどんどん食べて下さいよ」ついにシェイソンに主導権を握られてしまった。
このままだとパーティがシェイソンに支配されてしまう……！
さぁ、どうする?!
まず一番手にリカルドが動いた。
ビールジョッキを片手に立ち上がった。
酔って恐怖を紛らわそうというのだ。
「『イッキ』すっぞ『イッキ』いいいい!!皆の衆!!盛り上げてくれぇぇえぇ!!」
スター気取りで叫ぶと、ジョッキの縁に唇をつけた。

第１８回　「七面鳥とキ●ガイ」　４

直後、ジョッキが破砕した。
リカルドの手中で粉々になった。
彼がビールに口をつけた瞬間、シェイソンがジョッキにメスを投げたのだった。
「飲酒は体に良くありません。肝臓に害を与え、思考判断を鈍らせます」
「痛ぇえぇえぇえぇ！！」無数のガラス片が手の平に突き刺さったリカルドは泣き叫んだ。
「あぁ、これはいけませんね」シェイソンはそれを見ると、不意に立ち上がった。「手術をしましょう」
「いやぁあぁあぁあぁあぁあぁあぁ！！」シェイソンにアフロを掴まれ、祭壇へと引きずられていくリカルド。祭壇の脇の、廊下へ続くドアに消えると、そのまま戻ってこなくなってしまった。
暫くすると、シェイソンだけが嬉しそうに席に戻ってきた。
「いやぁ、すみません。それでは楽しいパーティの続きといきましょうか！」
皆は確信した。
ーー騒いだら殺される！！

第１８回　「七面鳥とキ●ガイ」　５

次の瞬間、シェイソンが再びメスを投げた。
「きゃあ！！」餌食になったのはアリス。どうやらＭＤＭＡを飲もうとしたところ、メスで錠剤を射抜かれ、止められたらしい。
「危険薬物摂取は大変危険です。ダメです、ゼッタイに。……もしや貴女、常習犯ですか？ならば、体がどこか悪いのでは……？」
シェイソンはまた立ち上がった。「手術をしましょう」
「きゃあぁあぁぁあぁぁあぁ！！」シェイソンに襟を掴まれ、祭壇まで引きずられるアリス。祭壇の脇の、廊下へ続くドアに消えると、そのまま戻ってこなくなってしまった。
暫くすると、ジェイソンだけが席に戻ってきた。
「長らくお待たせ致しました。さて、続けましょう！」

先ほどまで騒いでいたダウトもタダ事ではない事を察知し、黙るようになってしまった。

ここでクロアが動き出した。
シェイソンの支配下から脱するための良案が思い浮かんだらしい。

第１８回　「七面鳥とキ●ガイ」　６

彼女は突然立ち上がると、皆の前でおもむろに服を脱ぎ始めた。
紅潮して目を背けるブロンズとダウト。だがシェイソンはまじまじと注視していた。
ついにクロアは全裸になると、シェイソンの巨体に寄りかかった。
「…あれぇ、おかしいですねぇ？アタシに欲情してるんですかぁ？溜まってるんですねぇ？」クロアは艶笑しながらシェイソンの股間を優しく揉んだ。「手術しよ♪」
クロアはシェイソンの白衣を引っ張って祭壇に上がった。そして二人は祭壇の脇のドアへ消えていった。

……。

とうとう席に残るはダウトとブロンズ、二人だけとなってしまった。
「おい、ブロンズ」
「何だい？ダウト」
「これが感謝祭ってヤツだぜ」
「いや、違うでしょ！！」

第19回　「久し振りにキ●ガイ」　1

暖炉の暖の心地よさでいつの間にか寝てしまっていた。

起きて窓の外を見てみると、辺り一面雪景色だった。凄まじい初雪だ。

そうだった、今日は十一月最後の日だった、とふと思い出す。

マルク・チャップマン市長は突然イスから立ち上がり、吠えた。

「雪合戦だぁあぁぁあぁあぁあぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁあぁぁ！！」

机の上に山積みにされた政務の書類をまとめてごみ箱にぶち込むと、ポケットから携帯を取り出し、ダイヤルダイヤル。

リカルドに電話した。

電話に出たところに用件を集中放火でまとめて言い放ち、最後に、キャンセルしたらアフロを焼き払います、と吐いてから電話を切った。

そして市長はリコリスを呼び、さぁ支度をしようじゃないか、と胸を膨らませた。

第１９回　「久し振りにキ●ガイ」　２

市長の電話でロハネ唯一の公園に集まったブロンズ達。
チャップ公園。そこは、三百メートル四方の大きな公園で、ロハネの面積の約六分の一を占めている。木に囲まれたこの公園の中央には池があるが、寒さで氷が張っている。尚、市長がたまに朝、ジョギングをしに来るらしい。
皆が敷地に足を踏み入れると、ダウトがいきなり奇行に走った。
「ヒャァァハハハハハハ！！雪だ雪だ雪だぁぁぁぁあ！！」ほふく前進しながら積もった雪をむさぼり喰い始めた。「雪って旨ぇなぁあぁ！！ヒャッヒャハハ……腹痛ぇえぇぇ！！」
飛び上がり、慌ただしく辺りを見回す。「トイレ！！トイレはどこなんだぁあぁぁあ！！」
しかし、いくら見回し走っても一向にトイレが見つかる気配はない。
そうこうするうちに、限界が。
「あぁあぁぁあ！！畜生ぉおぉおぉお！！」最後の手段、とダウトは背の高い草むらの中に身を潜めた。
野グソだ。
ブロンズ達の耳に不協和音のハーモニーが流れる。

第１９回　「久し振りにキ●ガイ」　３

悲劇のダウトを尻目に公園を散策すると、市長がリコリスと仲良く雪だるまを作って遊んでいるのを見つけた。
「おぉ、来たか来たか」市長は皆を見つけると言った。
「何が来たか、だよアンタ。雪合戦なんかでアタシら呼び出して」
「いやぁ、この雪見てたらつい…な」
「アンタは小学生か」
ここでリコリスが話に割ってきた。
彼女は睨むクロアの胸ぐらを掴み、鷹のような鋭い剣幕で睨み返した。「市長様は小学生ではない、幼児だ」
「うん、幼児だね」と、クロア。
「あぁ、幼児だ」と、リコリス。
二人は友情の握手を交わした。

閑話休題。
あの後でリコリスが市長の痴話を延々と暴露し、市長がメソメソ泣き出したあたりの話は省く事とする。

第１９回　「久し振りにキ●ガイ」　４

雪合戦の下準備が始まった。
決められた制限時間（３０分）内に各チームで雪を固めたシェルターを作っていく。
合計七人のメンバーは三チームに分かれ、戦うこととなった。
チーム１　市長、リコリス
チーム２　クロア、リカルド、アリス
チーム３　ダウト、ブロンズ

……。

非力なブロンズと野糞のダウトを組ませたのは市長である。

準備が始まると、涙目のブロンズは真っ先にシェルター作りを放棄し、異臭を頼りにしてダウトの所へ向かった。
すると、ダウトはまだ草むらの中で野糞をしていた。
心なしか、草むらの中から呻き声が聞こえてくる。
大丈夫？、とブロンズが聞くと
今ピーク、との返事が。

さぁ困った困った。
このままではブロンズはリンチに遭ってしまう。

第１９回　「久し振りにキ●ガイ」　５

取りあえずブロンズはダウトを放棄し、シェルター作りに励む。
「あぁあぁぁぁ。負けちゃうよ負けちゃうよ。こんなん絶対無理だってば…」ぼやきながら、雪を手で固めていく。
だが、彼一人ではどうすることも出来なかった。

「三十分だぁあぁぁあ！！手を止めろぉ！！」
「早いってば！！」市長の号令に従ったブロンズ。結局一枚しかシェルターを作れなかった。
凄く心許ないけどこれで頑張るかと、とりあえず意気込む。
周りを見る。
すると、みなさん沢山作っていらっしゃった。
市長チーム五枚。クロアチーム九枚。
圧倒的状況にブロンズは泣き叫んだ。
と同時に、ゲームが始まってしまった。

「ぎゃあぁあぁあぁあぁあぁあ！！」一瞬にしてブロンズの目の前に無数の雪玉が迫ってきた。
とっさにシェルターに隠れ、これを避ける。
ー危なかった……！
胸を撫で下ろす。
だがその直後、不穏な音がブロンズの耳に入ってきた。

第19回　「久し振りにキ●ガイ」　6

雪玉が木にぶち当たった音だった。
ガチュッ！！
明らかに雪のものではない。雪玉は弾けると、中から出た石ころが跳ね返り、落ちた。

ーー石入りだぁあぁあ！！

しかも、見ればそこら中石だらけ。
どうやら、先ほどブロンズを襲った雪玉は全弾石入りだったらしい。

ーー殺される！！

ブロンズは身震いした。

くそ、このままじゃあリンチに遭うのは確実だ。
応戦しないと！！

ブロンズはシェルターを背に、雪を固めた。
手のひらサイズの雪玉が十数個できた。

よし、反撃だ！！

シェルターから顔を出し、雪玉を構えたその時。

「あちょーー！」

突如、市長がブロンズに突っ込んできた。
丸まると太った体駆で飛び込みタックル。
「いやぁあぁぁあぁぁあ！！」
ブロンズ唯一のシェルターが一瞬にして粉微塵に粉砕された。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8929r/

CRAZYYYY STUUUUNT!!!!

2011年12月1日23時50分発行